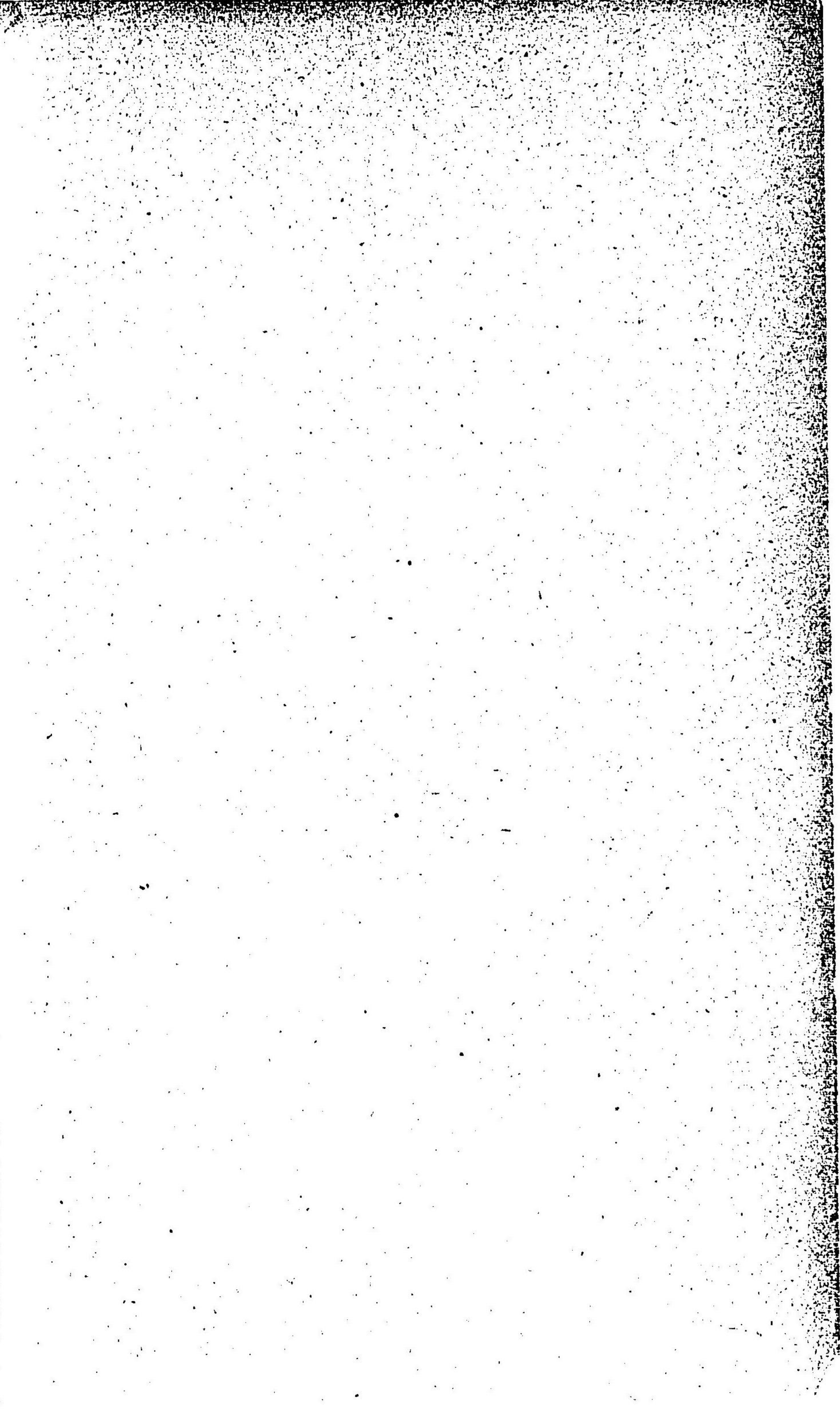
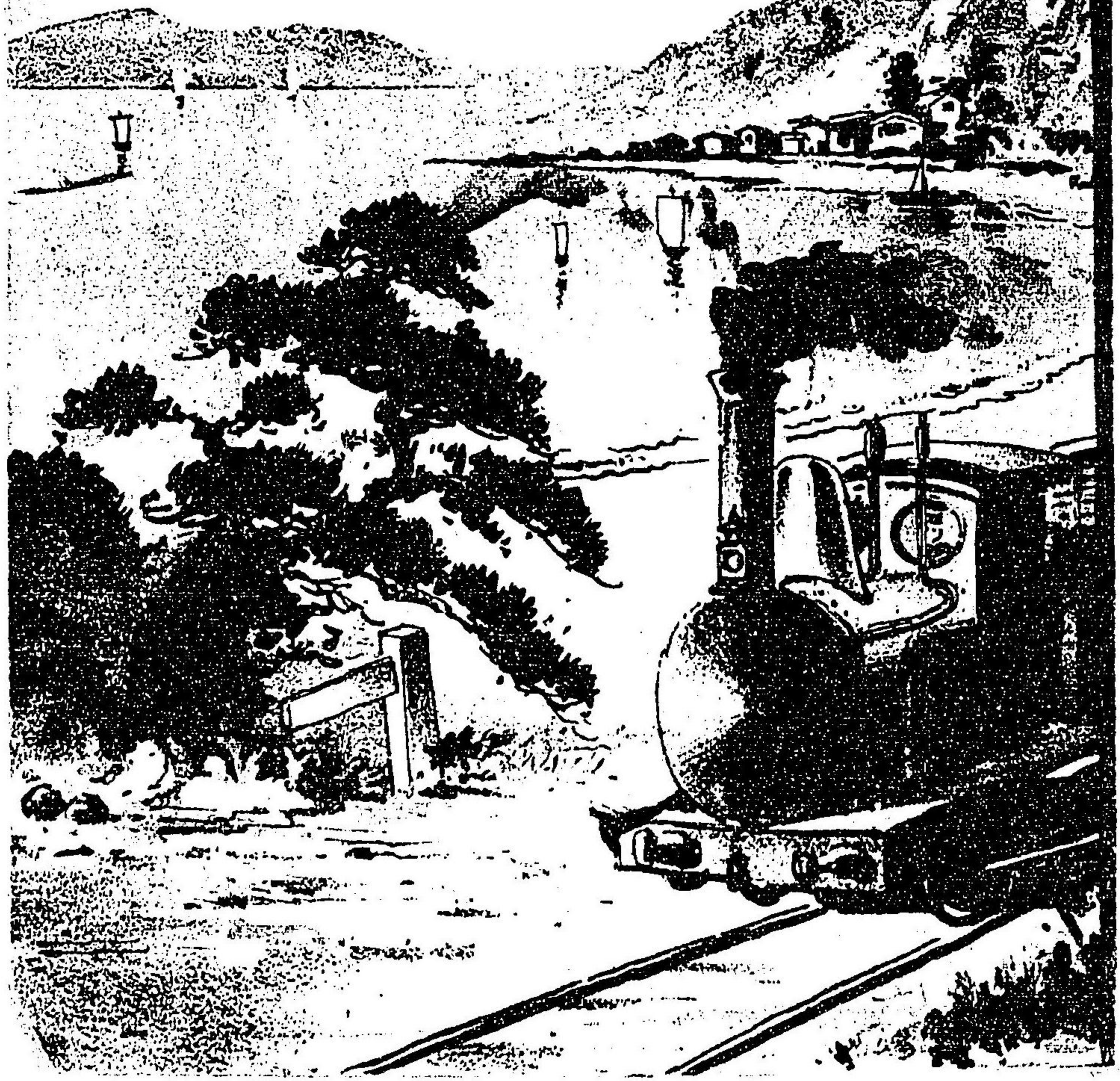


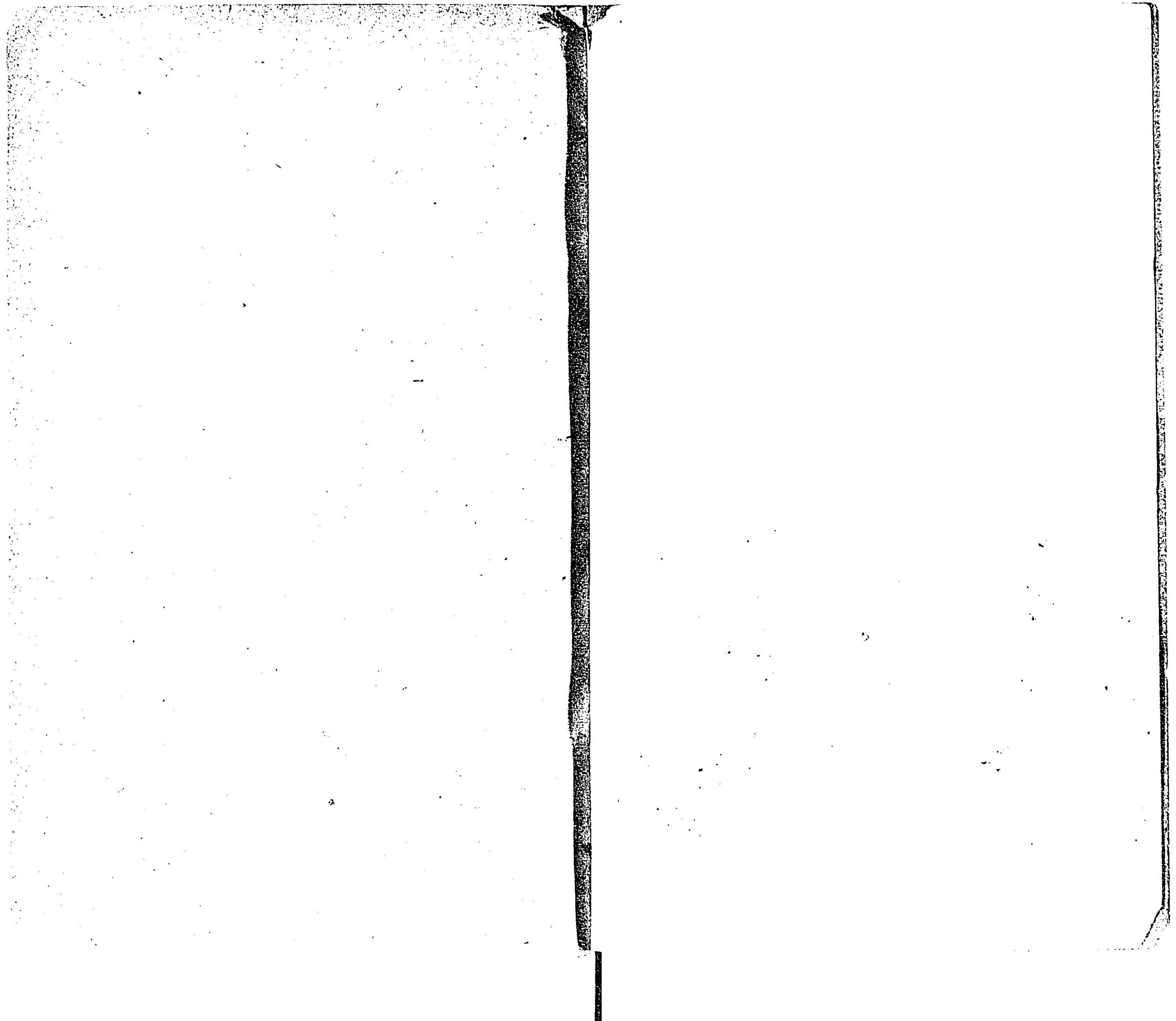
陽鐵道旅客業

72  
227

各山浦若野村

此站鐵路社會運新





山陽鐵道旅客案内緒言



我が山陽鐵道は兵庫明石間十哩餘を明治二十一年十一月一日より運輸開業し廣島以西の工事は今其最中にて  
 築込に隨ひ順次開業の手筈なり目下開通の神戸廣島間  
 全線路中最も天然の風光に富み旅客の爲めに愉快  
 此上なきの好場所とす今や春季夏初この線路を旅行す  
 るもの日一日に多きを加ふるに際し旅客探勝の便に供

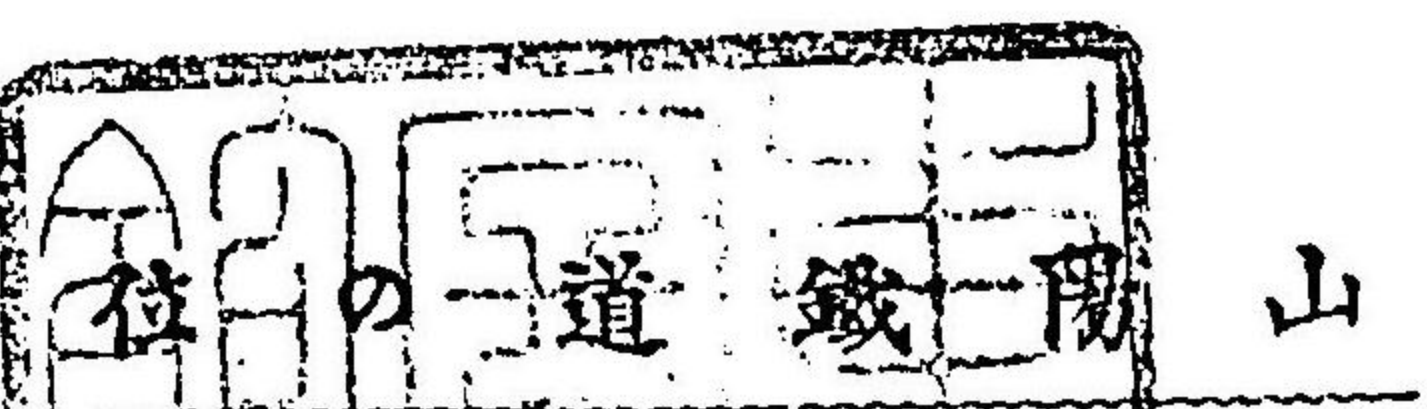
せん爲め沿道の地理及び名所舊蹟の大略を記して「山陽  
 鐵道旅客案内」一冊を作り唯匆卒の編輯或ハ遺漏なき  
 を免かれざるべし并はまた他日を待て増補せんのみ

明治廿八年四月

編者識す

山陽鐵道旅客案内

山陽鐵道の位置

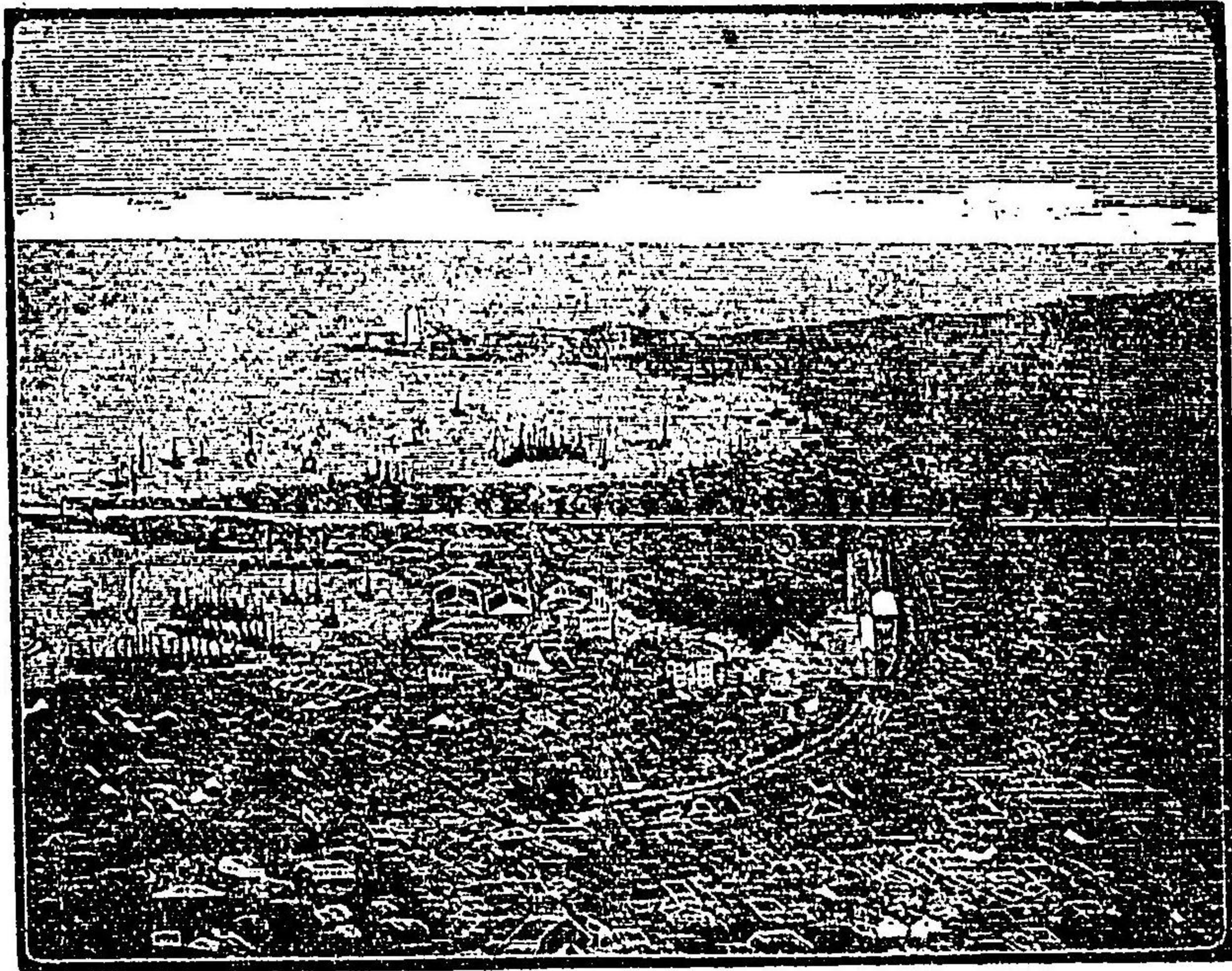


我が山陽鐵道は兵庫縣攝津國神戸港に起り山口縣長門國赤間ヶ關に  
 終る其間凡そ三百英里にして恰かも山陽道の中央を横斷し攝津播磨  
 備前備中備後安藝周防長門の八州を貫通せりその位置東は大阪京都  
 名古屋東京の各設鐵道及仙臺青森に至る日本鐵道會社の鐵道に直接  
 し西は小海峽を隔て九州鐵道に連かり實に日本鐵道中要用の幹線  
 をして關東より畿内を経て中國九州に赴き若くは九州中國より畿内  
 を經て東北地方に到るの旅客は好んで海路を取るものゝ外皆この線  
 路を由らざるはあかるべし

神戸兵庫の記

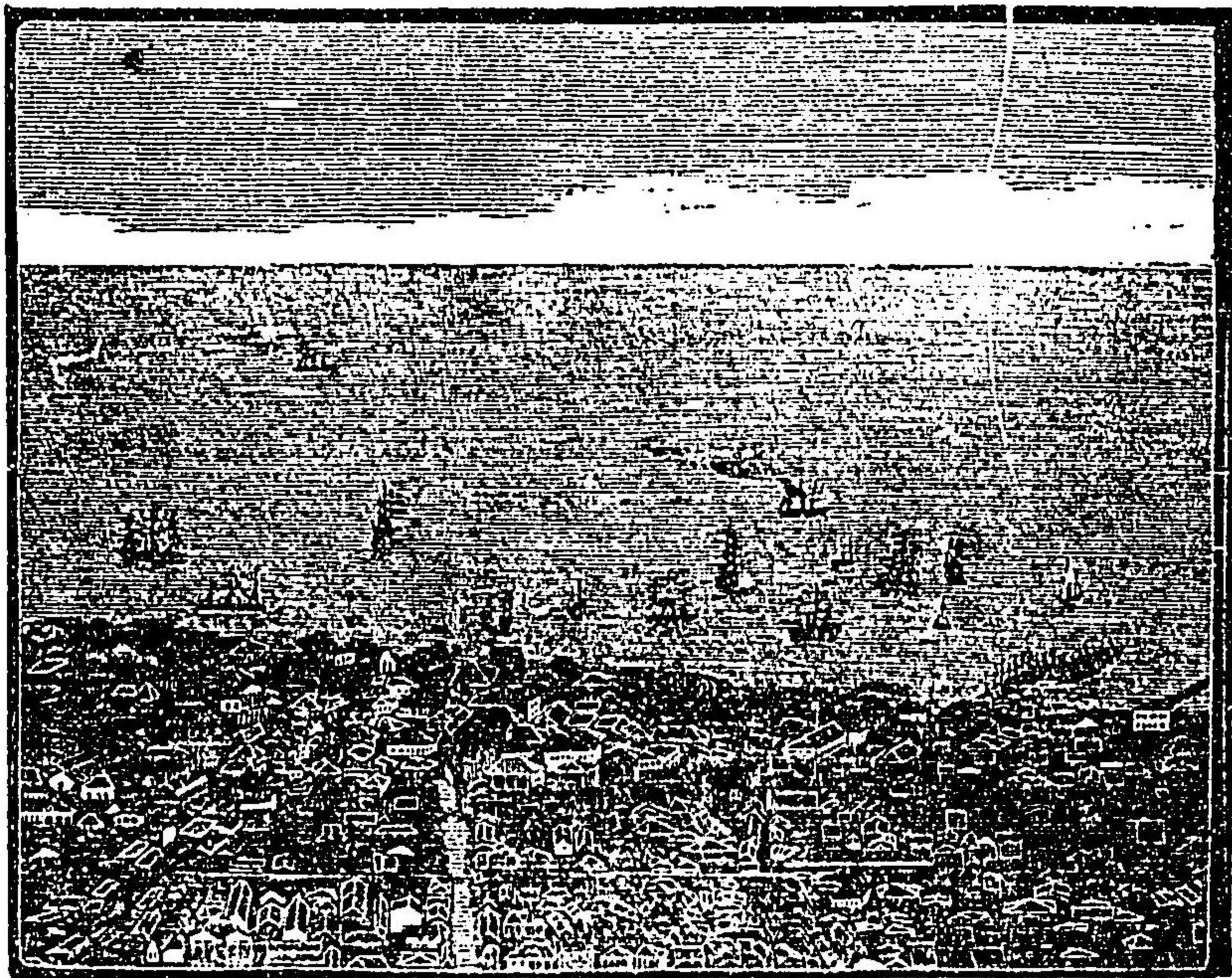
編者は是れより我が山陽鐵道旅客の爲めに神戸兵庫を始めとし  
 て其以西の各停車場近傍に於ける土地の模様及び名勝古蹟を畧  
 説して親切ある案内者たらんとす

神 戸 兵 庫 の 記



抑も神戸は日本五港の一に居  
 り二拾餘年以前までハ僅かに  
 西國の街道筋に當る一個の漁  
 村に過ぎざりしが一旦之を開  
 きて海外諸國との貿易場に供  
 へしより爾來日に月に繁昌を  
 加へ今は横濱と肩を比ぶる旺  
 盛の良港とは成ぬ神戸港より  
 淡川を隔て西にわる港灣は  
 即ち兵庫港にして頃日まで兩  
 港の市街を合せ神戸區と爲せ  
 しを明治廿二年四月市町村制  
 の施行に際し八郡部の内荒田  
 村菟原郡の内葦合村をも併せ  
 て神戸市と改稱せり全市戸の

神 戸 兵 庫 の 記



數は三萬零四百六拾五戸、人  
 口拾二萬三千五百十九人あり  
 此内市公民の權利を有する者  
 は一千七百八十一人なりと云  
 ふ而して人口の増加は目下尙  
 尙實に著るしく隨て市内到る  
 所春夏秋冬常に家屋の新築工  
 事を見受けざるはなし亦盛な  
 りと謂ふ可し港内には内外の  
 漁船帆船林のどとく出入常に  
 頻繁を極めり中に就き内外の  
 諸港へ定期航海を爲すものは  
 日本郵船會社大坂商船會社英  
 國彼阿會社佛國エムエム會社  
 獨逸ロイド會社加拿陀漁船會



神 戸 兵 庫 の 記

沖繩	鹿兒島	釜山	仁川	芝罘	天津	元山	浦邊新德
廿二圓	拾二圓	廿八圓	五拾錢	四拾四圓	四拾五圓	九拾四圓	四拾八圓
		五拾錢	三拾錢	七拾二圓	八拾二圓	八拾八圓	八拾七圓
		拾七圓	拾七圓	廿四圓	廿七圓	卅二圓	廿八圓
		四圓	四圓	四圓	四圓	四圓	四圓
八圓	四圓	七圓五拾錢	拾壹圓	拾二圓	拾五圓	九圓九拾錢	拾一圓七拾錢

彼阿會社瀛船船客運賃表

神戶	橫濱	香港	倫敦
上	上	廿五圓	三百七拾五圓
等	等	四圓	四圓
中	中	拾五圓	二百拾五圓
下	下	五圓	五圓

エムエム會社瀛船船客運賃表

神戶	上海
上	四拾四圓
等	四圓
中	三拾圓
下	拾五圓

香 港

馬耳	六拾圓	四拾五圓	二拾四圓
耳	四百拾五圓	二百五拾圓	百五拾圓

ロイド瀛船會社瀛船船客運賃表

神戶	長崎	アレクソン
上	拾六圓	四百四拾圓
等	四圓	二百六拾五圓
中	拾圓	四圓
下	五圓	百二拾圓

加拿陀瀛船會社瀛船船客運賃表

神戶	橫濱	マンクローア
上	拾六圓	百六拾圓
等	四圓	四圓
中	拾圓	百拾五圓
下	五圓	五圓

神 戸 兵 庫 の 記

神 戸 市 街 神 戸 市 の 内 元 葺 合 荒 田 の 兩 村 を 除 き 市 街 地 に 屬 せ し 所  
 は 舊 來 の 慣 行 に 由 り て 今 向 後 自 己 三 部 に 分 れ た り 即 ち 東 の 方 生 田  
 川 以 西 の 方 相 生 橋 に 至 る まで を 神 戸 部 と い ひ 相 生 橋 以 西 の 方 湊  
 川 以 東 の 方 兵 庫 湊 東 部 と い ひ 湊 川 以 西 を 總 て 兵 庫 湊 西 部 と い ふ  
 此 内 神 戸 部 最 も 繁 昌 に し て 町 數 五 拾 餘 あり 官 衙 會 社 等 も 多 く こ の 部

神 戸 市 街

神 兵 庫 街 の 記

内におりて市街の体裁兵庫の方に比すれば大に舊体を改めすべ  
 日進の趣あり就中海岸通榮町通元町通のときは商社買店軒を並べ  
 夜に至れば家々の電燈燦々として白晝を欺くなど實に市内繁昌の中  
 心とも謂ふべし部内に在る官衙會社等の重なるものを列擧すれば

- |            |         |             |        |
|------------|---------|-------------|--------|
| 兵庫縣廳       | 北長狹通四丁目 | 小野濱海軍造船所    | 小野濱    |
| 神戸税關       | 居留地東    | 神戸郵便電信局     | 榮町六丁目  |
| 神戸市役所      | 相生町     | 神戸監獄        | 宇治野町   |
| 兵庫縣警察本部    | 下山手通四丁目 | 神戸警察署       | 相生橋東詰  |
| 縣立神戸病院     | 下山手通七丁目 | 商業會議所       | 榮町六丁目  |
| 神戸取引所      | 海岸通四丁目  | 日本郵船會社支店    | 海岸通二丁目 |
| 大阪商船會社支店   | 海岸通三丁目  | 神戸電燈會社      | 榮町六丁目  |
| 神戸石油會社     | 榮町三丁目   | 橫濱正金銀行支店    | 榮町三丁目  |
| 阪田粗生米店     | 榮町三丁目   | 第一國立銀行支店    | 榮町四丁目  |
| 三井銀行分店     | 榮町三丁目   | 第五拾八國立銀行支店  | 海岸通二丁目 |
| 第三拾八國立銀行支店 | 榮町三丁目   | 島田銀行支店      | 元町四丁目  |
| 神戸棧橋會社     | 小野濱     | 神戸船橋會社      | 海岸通四丁目 |
| 神戸製紙場      | 三宮町     | 五州社(神戸又新日報) | 榮町六丁目  |

神 兵 庫 街 の 記

兵庫市街 湊川を中央に狭み其東西即ち湊東湊西の兩部を合稱し  
 て兵庫と謂ふ。湊東部にハ三拾餘ヶ町湊西部には四拾餘ヶ町あり湊西  
 部は兵庫港を前に控む其以前は西國の街道筋に當れる宿驛にして上  
 國へ往來する中國四國九州の大小名又は商買などの宿泊せるもの多  
 く市街大に賑ひしが神戸開港の後ハ其繁昌次第に東に移り今はまた  
 舊時の觀あき及べり。湊東部は市街最も軌近の設に係り其体裁も他  
 の兩部に比すれば大に不整頓なるを覺ゆれども夫の湊川神社福原街  
 寺どの之れあるが爲め多聞通筋(國道筋)の繁昌は却て兩部に勝るもの  
 あるが如し當兩部内に在る官衙會社等の重立ちたるものを擧ぐれば

- |          |      |         |      |
|----------|------|---------|------|
| 神戸鐵道局    | 東川崎町 | 神戸始審裁判所 | 橋通   |
| 兵庫假留監    | 眞光寺裏 | 兵庫警察分署  | 小物屋町 |
| 山陽鐵道會社   | 西柳原町 | 川崎造船所   | 東川崎町 |
| 日本米穀輸出會社 | 島上町  | 日本精米會社  | 出在家町 |
| 三井物産會社支店 | 松屋町  | 第六拾五銀行  | 戸塚町  |
| 第七拾三銀行   | 江川町  |         |      |

◎兵庫市街



神 戸 兵 庫 の 記

居留地 外國人居留地は神戸市内の最東にありて其區域は懸川(榮町元町の東端あり)以東生田川までを限とす域内十數町に分れ道路廣く且つ清潔にして煉瓦石造の商館軒を並べ夜間は瓦斯街燈の光線燦きて途上を照らし恰かも海外の港市に到るの思ひあるべし又懸川より西の方宇治川までを雜居地と稱し此間の山手に居を占むる外國人も甚だ寡からず

鐵道停車場 市内に鐵道停車場三ヶ所あり其一是兵庫相生町の神戸停車場其二是神戸三宮町の三宮停車場其三是兵庫西柳原町の兵庫停車場にして此内神戸三宮の二ヶ所は官設に係り兵庫は山陽鐵道會社の所有に屬するものあり而して甲は市内の中央乙は其東方丙は其西方に在りて恰かも三方適宜の地に分れたれば旅客はその往々所の目的に従ひ各最寄の場所より上下するの便利あるべし

旅店 神戸にては海岸通榮町邊の漁船問屋が大抵みち旅店を兼業し回漕一切の周旋を悉すと共に亦旅客寢食の用をも辨するを例とせり是れ此地は元來船舶出入の港にして今日までの有様にては往來の

神 戸 兵 庫 の 記

旅客はその海路よりする者多きに居るを以て双互の便利より斯くは成り來れるものなるべし勿論此外に專業の旅店數多わりとは雖も是等は寧ろ中等以下に適するが多く其以上の旅客にありては矢張り夫の漁船問屋に投宿するを便とす其内にて重立ちたるは海岸通に後藤常盤舎熊谷加納中居安藤薩摩屋等榮町に西村大森蓬萊舎等ありて其宿料晝食料は凡そ左のごとき定めに依る

宿 料	晝 食 料
壹 等 洋食 壹圓 二拾 錢	壹 等 洋食 三 拾 五 錢
二 等 和食 五 拾 錢	二 等 洋食 二 拾 五 錢
並 等 洋食 三 拾 錢	並 等 和食 拾 五 錢

兵庫にては神明町即ち以前の旅館町邊に旅店數多わり然れども是等の中には傍ら料理茶屋をも兼業とせるもの多きが如し其他西洋風の

◎居留地 ◎鐵道停車場◎ 旅店

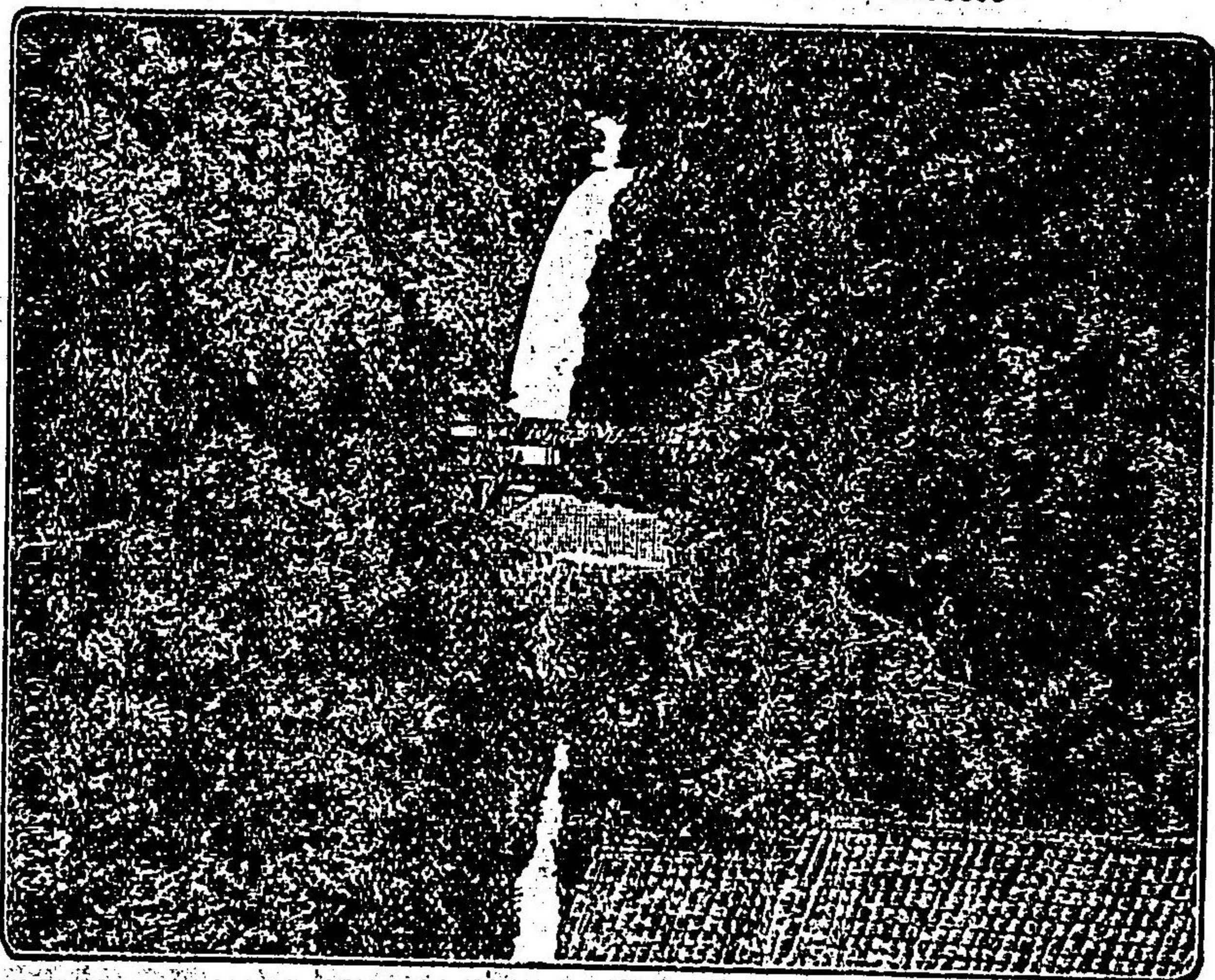
神 戸 兵 庫 の 記

旅店を好む旅客は居留地の兵庫ホテル。オリエンタルホテル。ホテルデ  
コロニー等の諸館に投ずべしその宿料は大抵三圓より四五圓迄を通  
例とす。序に市内料理茶屋の重なるものを擧れば先づ神戸にては常盤  
樓(宇治川端)吟松亭(玉川樓)手合亭(以上北長狭通)等兵庫にては常盤花壇  
(湊町)音羽花壇(永澤町)等を推すべく又西洋料理にハ宇治川端の自由亭  
(旅店)をも兼業す。北長狭通の改訂専業町の西洋亭等あり  
以上神戸兵庫両市街の地理と且つ旅客に須要なる二三の事項を畧説  
したれば是よりまた市内にある名勝舊蹟の類にして旅客の杖を曳く  
に便すべき場所を案内すべし  
湊川神社 神戸に遊ぶものは先づ補正成の詞廟たる湊川神社を訪  
はざるべからず神社は兵庫湊東部内多聞通二丁目にあり近く開港前  
までは此邊一面の田圃にして夫の元録四年水戸黄門光國の建設に係  
れる一基の碑石(碑面に彫みたる嗚呼忠臣楠子之墓の八文字)は即ち黄  
門の筆にして裏面の銘は明人舜水朱之瑜の撰なること人の知る所も

神 戸 兵 庫 の 記

り、織かに田畔古松の下に立てるのみありしが維新の後朝廷補氏の誠  
忠烈義を表彰し茲に宏壯ある社殿を營みて之を祭祀するに至りしか  
ば曾て蕭寂を極めたるの地いつしか熱鬧無比の衢とは成ぬ社内に劇  
場寄席大弓揚弓室内射的及び茶店等ありまた夜に及へば雜貨飲食物  
骨董盆栽などを鬻げる商賈夥多しく出店し廣き境内殆んど露肆を以  
て滿せるが如し殊に夏時には士女の群衆雜沓最も太甚しく先づ當所  
を以て市内第一繁華の地とあすべし。前記の碑石は表大門を入て右手  
の方に在り當社々格は別格官幣社にして湊東部内は大抵みも其氏子  
あり  
布引瀑布并温泉 布引は神戸名勝中最も屈指の場所にして神戸  
停車場より東北凡そ三十丁許にあり道路平坦人力車の往來最も自在  
なり山甚だ高からずと雖も樹木鬱生翠巒遠く摩耶六甲の諸山脈に接  
し南は蒼海漫漫として遙かに帆影の相連あるを見る竝に山光水色併  
せ得たるの勝地といふべし山中に二流の瀑布あり上に在るを雄龍と  
いひ下に在るを雌龍といふ雌は直下して奔流さながら矢の如く雄は

神 戸 兵 庫 の 記



巖角に遮ぎられて二段とあり水勢却て稍緩あるに似たり併に千古の壯觀なり夏時には内外人の來りて瀑水に打るゝもの多く又其近傍適宜の所には茶亭を設けて遊客休憩の便に供す山麓には人家凡そ二百戸許ありて自から一市街を成せり此地に炭酸温泉場あり是は明治十八年中生田川(瀑水の下流なり)の上流宇焼ケ口の岩間より鑛水の湧出するを發見し同所より百間餘の樋を以て此所に其水を引き浴場を新設せしものにて饅頭賣斯子宮加

神 戸 兵 庫 の 記

答兒等に特効ありといひ夏時には浴客殊に群集し京都大阪邊より來て逗留する者も亦寡なからず元來此地は其以前旅店茶店等の風儀甚だ宜しからずして旅客と見れば強て飲食を勤め不法の價を食ぼるなどの弊習奇きに非ずして爲めに勝地の名を傷くるに至りしが近年は全く之れを一洗し萬事に改良を加へて専ら旅客の便を計ることとせり(旅店料理屋を兼業す)の重立ちたるは常盤舍富貴樓門極菊水等に於て其他尙ほ十數軒あり温泉入浴料及び旅店宿泊料は左のごとし

別	合	並	宿泊料	中等	上等
幕	幕	湯	宿泊料	全	一泊
一回	一回	一回	二拾五錢	二拾錢	三拾五錢
廿拾五錢	拾五錢	五錢			
一週間	一週間	一週間		全	壹食
壹圓廿五錢	六拾錢	廿五錢		拾五錢	二拾錢

神 兵 庫 の 記

下 等 全 拾 五 錢 全 拾 錢

生田神社 神戸より布引に至る途中三宮停車場の北凡そ四五丁の所にあり祭神一座稚日女尊(天照皇太神の御妹)を祀り攝社四座その左にあり今は官幣小社に列し兵庫神戸両市街に氏子甚だ多し市内の大社なり社殿の後にある一樹林は即ち源平壽永の古戦場たりし生田の森にて當時此森を平家一ノ谷城壘の追手となし大將軍新中納言知盛本三位平重衡北は山手より南は海邊まで逆茂木を曳き垣楯を設けて嚴重に守りしとかや去れば當社には源平両家に由縁ある寶物少なからずまた境内に古跡多し其の重なるは

熊原の井 元暦元年二月當生田の森にて源氏大に平軍を敗りしとき熊原源太景季梅花を折て籠に指し戰終て此所に差置かしと云傳ふ

武運の神を祈りしとも傳へり

無官太夫救盛此所の萩を愛し和歌を詠せしあとの俗傳あり

救盛萩

神 兵 庫 の 記

◎生田神社 ◎三宮神社 ◎諏訪山

三宮神社 神戸元町通の東端外國人居留地と相接する所にあり元と一個の村社にして境内甚だ廣からずと雖も毎夕露肆の出づること湊川神社お齊しく市内の東部に在ては夜間最も熱鬧の場所ありとす

諏訪山 神戸には未だ公園の設けあらず然れども諏訪山のごときは之れを公園と稱するも不可あかるべし山は神戸市街の真北神戸停車場を距ること凡そ十丁許に在り登臨すれば神戸の街衢悉く眼中に落ち港内庭泊の船舶市内散在の勝跡一々指點すべし山上に茶亭あり眺望宜しき所を擇んで看棚を設け遊人觀覽の便に供へり先年金星大陽を經過するの事ありしとき佛人此山上において觀測を行ひ紀念の爲め石碑を建設して即ち茶亭の前にあり山腹に諏訪大明神の祠あり諏訪山の名は蓋し是より來れるあるべし明治十五年中この山麓に炭酸水の湧出するを發見し神戸の人前田某茲に温泉場を開きしより酒亭旅店を設くるもの漸次に多きを加へ今は自から一個の町を成すに至れり酒亭(兼旅店)には本常盤常盤西店全中店全東店播半山海樓一力

神戶兵庫の記

樓等ありて孰れの樓上も眺望に富めり又此温泉の主治効能は痛風慢性癩麻質斯胃病瘰癧等に適し入浴料は左の定めあり

十八

入浴料

上等幕湯 一回 金拾二銭 並湯 一人一回 金二銭

湊山温泉 神戸近傍に鑛泉浴場三ヶ所あり其一は布引其二は諏訪

山其三は即ち湊山ありとす同所は兵庫停車場より東北凡そ十五丁許

湊川の主流有馬街道の左傍に在り俗に天王の温泉と稱し(街道の上の

山に午頭天王の社ありて近傍一体の山を天王谷といへるに依る古よ

り山麓に微温泉湧出し中世に至り一時鑛脈絶へたるも近年又舊に復

して浴場を設けり旅亭の如きは當時尙不完全にして諏訪山布引とは

素より同日の談にあらすど雖も土地の開闢幽邃あるに至ては三温泉

場中當所を以て第一とすべく初夏新緑飛螢の候には浴客特に多し又

當温泉は其昔豊太閤入浴の遺跡なりとて干今其由緒傳はれり温泉主

治効用は胃腸慢性加答兒肝臟充血下腹充血生殖器病痛風等によるし

入浴料

一ノ湯 一人一回 金三銭 二ノ湯 全 金二銭

廣嚴寺 湊川神社の西門を出て、真北に往くこと三四丁取元村に

醫王山廣嚴寺といへるあり俗に楠寺と稱す建武三年五月廿五日楠氏

の一族七十三人此寺の客殿に於て自盡せりと云ふ即ち正成の菩提所

あして楠氏の遺物を藏せり境内に一株の老梅ありて傍に石碑を建て

詩文を題す曰く

楠公墳上一株梅元祿年間此地裁精忠猶守當時節歲々南枝向日開

此梅元在子楠公墳上水戸黃門公立牌之時移等諸廣嚴寺庭中云故

湊山老禪師恐後世之不知其故事而使予記焉時文政癸未秋九月也

江戸龍山藤堂子基

湊川 楠氏戰没の地として有名ある湊川は神戸兵庫の中間にあり

水源は丹生の山田東小部西小部藍那小河等の諸溪泉相合して石井村

に至り千鳥の瀧となり下流廿丁餘にして川崎の瀨に注ぐ此川往古は

石井村より會下山の麓を経て兵庫の西に至りしが治承年中平相國清

盛が兵庫築島の折今のごとく變更せしものありと云ふ然るに今日に

◎湊山温泉 ◎廣嚴寺 ◎湊川

十九

神戸兵庫の記

於て此川の高堤を市内の中央に存せしむるは兵神兩地の交通を妨た  
げ障害を爲すこと少なからずとて往時の如く其流域を變じ現在の堤  
防を除くべきの説起り既に政府へも出願に及べりとぞ此川の上流  
奥平野村邊にては河水を引きて水車に用ゐるがも急下流には平時水  
更にあく河中一面砂礫にして霖雨の候緩かに出水を見るのみ  
福原町 治承年中平相國清盛の沙汰に出でたる福原の都は今の兵  
庫ありといへど地理定かからず今日福原の名存する所は湊川堤防の  
東下兵庫濱東部の西端にありて一個の遊廓地と成れり以前は青樓市  
街の各所に散在して他の商家と軒を接し不都合大方ならざりしかば  
明治五六年の交官より命を下して福原町を遊廓地と定め各所の青樓  
を悉く此所に集めたり廓中の大通りを仲の町と稱し中央を通て樹  
木艸花を栽け其体裁専ら東京の芳原に擬せるものゝごとし殊に近時  
は各樓皆電燈を用ひて蘭燈又は蠟燭に代へ夜景をして一層賑はし  
からしめんと勉めり廓中娼家の數は凡そ七十戸許にて其内の賑ある  
は色葉樓松浦樓眞田樓愉快樓青柳樓等とし孰れも仲の町に在り

神戸兵庫の記

築嶋寺 兵庫には由緒ある古刹少なからず築嶋寺の如きも其一  
り同寺の島上町の海岸にありて本稱經島山來迎寺と號し清盛入道淨  
海の卿創するどころありと云ふ其縁起を尋ぬるに二條院の時清盛帝  
都を福原に移さんとし地形を點檢せしむるに狹隘にして九衢を設く  
るに足らず依て築島の事を按し應保元年二月上旬より始めて工を起  
せしに全八月二日大風波を動かし潮水逆流して築島悉く壞崩せり重  
ねて同三年三月下旬より築き始めしが又もや南風起て白浪高く地を  
捲き成就の事覺束なし時の博士阿部泰氏の説に是れ龍神の怒に觸れ  
しがゆゑあり人柱を入れて築かしめば成就せんと言へり是に依て生  
田の小野に關を構へ往來の旅客を攝め取らしむるに其歎限りなし茲  
に清盛の家童に太井松王と呼ぶ少年ありて諸人の悲歎を見るに忍び  
ず自から犠牲と成て海に投之又同時に若干の石に一切經を書寫し海  
底に沈めしかば漸く風波収まり築島幾くもあく成就せりとぞ然るに  
島供養のとき紫雲變遷として降り中に松王は如意輪觀音と現光を  
放て來臨したりして五條大納言に勅し松王來迎の所に七堂伽藍を

神 戸 兵 庫 の 記

建立せしが建武年中湊川合戦の時堂塔皆兵燹にかゝりて燹失し今は  
僅かに其舊跡を存するのみあり寺内に松王の墓井に入水の時の手植  
の松及び祇王祇女の墓標と稱するものあり  
眞光寺 同寺は兵庫南逆瀬川町にありて市内の巨刹あり仁明天皇  
の御宇惠尊法師唐土より歸り宋王より賜へる大悲の尊像を安置して  
當山を開けり藤澤遊行元祖一遍上人全四十四代一遍上人併びに茲に  
遷化し境内にその牌石あり又門外遺池の畔に金銅の大露佛ありて眞  
光寺の如來と稱し其名高し  
清盛石塔 と名附くるもの眞光寺の南にあり十三層の輪塔にして  
土臺は方五尺高四間餘なり清盛は養和元年閏二月京師西八條に薨去  
せしが僧圓實その遺骨を齎らして此所に來り之を瘞めり其後百余年  
を経て弘安九年北條七代貞時諸國巡察の途次この塔を建て後世を吊  
ふといへり又經正の琵琶塚と稱する碑石清盛塚と相對して立てども  
岬間に隠れて能くは見ゆす  
和 田 岬 我國沿海に數多き岬の中にて和田の岬は最も其名の聞

神 戸 兵 庫 の 記

わたるものあり同所は兵庫市街の西南隅にありて兵庫停車場よりは  
凡そ二十丁計東南方に當れり此地元と西方の風浪を凌ぎ鳴門の潮先  
を避け船舶旋繁の便を計らん爲め清盛の築く所にして砂州遙かに海  
中に突出し其東の灣内は即ち兵庫港あり岬頭に燈臺あり明治五年八  
月を以て設置す發光は不動赤色にして海上十二里を照せり又石造菱  
形の砲臺あり湊川尻の川崎濱に在る圓形の砲臺と同宏く徳川政府の  
末年勝安房守が築く所にして近年まで若干の兵士之を守護し内外軍  
艦出入の際には禮砲を放つの例なりしが今は兵士も引揚げ自から廢  
臺の姿と成れり此邊一帶の海濱には老松甚だ多し和田の笠松と和  
へ枝幹廣がりて笠の如きもあり前面は海を隔てゝ紀泉の諸山と相對  
し風光最も明媚なり春和の佳候には兵庫神戸より遊人多く出るを以  
て適宜の所に茶店又は看棚を設け休憩觀望の爲にせり  
和 田 神 社 同社は和田岬の南和田崎町の端にありて天御中主神を  
祭り社殿壯麗嚴肅なり俗に海上鎮守の神と稱し渡海の者日和を祈る  
に多く願わるとて之れを信仰なすとぞ

◎眞光寺 ◎清盛石塔 ◎和田岬 ◎和田神社

此他市内にて訪ふべき所尙は少からずと雖も案内の煩らはしきは却て旅客に迷惑なるべし由て特著なるもの外は態と省略することゝすしぬ

兵庫驛

我が山陽鐵道の基點は神戸停車場構内官設の線路と相接続する所にあれども本社的位置は兵庫西柳原に之を定め即ち兵庫驛と相對する所に在り而して兵庫驛は我が鐵道に屬する第一次の停車場にして諸驛中殊に樞要の場所ありと知るべし  
西柳原は兵庫市街の西端に在りて區郡兩部を境し是より以西は即ち八郡郡にして尻池長田駒ヶ林板宿須磨の諸村を過ぎ夫より播州明石郡に入り鹽屋垂水舞子濱を経て明石に至るまで途上頗る勝景に富みその眺望の佳絶あること恐らくは我が山陽鐵道線路中の第一位に在るべしイナ全國の鐵道線路中の第一に在るといふも敢て過言には非ざるべきかいざや我が旅客の爲めに案内の勞を取らん

兵庫驛

我が旅客は兵庫驛を離れて列車の窓より先づ北の方を望めば街道より北手に當りて一帯の小丘山脈を認めん其中人家高樓の並び立てる所之を増田山とす  
増田山は兵庫驛を西北に距ること十二三丁街道より北に入るこゝ三四丁の所にある一小丘にして元と増田某の所有ありしがゆゑに此名ありとぞ南の方茅渚の海を眼下に眺め風光最も宜し兵庫柳原より出張の割烹店もありて春秋の好時節には兵庫神戸より遊客多く來る但し列車の中よりフタグの風に翻へるを見るハ右の割烹店ありと知るべし  
旅客ハ更に増田山の西手に當りて鬱蒼たる樹林を見認むべし長田神社とて有名の社頭即ち是あり  
長田神社 當神社は増田山の麓を過ぎ往くこと三四丁の所に在り祭神は事代主尊にして當時官幣小社に列せらる日本記を案するに神功皇后新羅を討ち翌年凱旋して難波津に來るとき御船俄に進まず占ひ問はしむるに事主代誨て曰く我を御心の長田の國に祀れど乃ち

◎増田山 ◎長田神社



葉山姫の第七媛をして此所に祭らしめたり云々攝社二祠末社四社あり鳥居の類は小野道風の筆おして石燈籠は村上天皇の御寄附に係るものなりと云ふ例祭は舊曆八月十八日なり當社は俗に運の神と稱し一月一日は勿論毎月一日には商賈投機師藝娼妓を特に奇利奇福を祈る輩は多く参詣し社頭最も賑はへり此邊は昔し長田の里と稱し名所なりとかや古歌に「雨露も恵みあまねき時にあひて長田の里に早苗とる也」

長田神社の後に當りて高く聳ゆる一山は特に旅客の眼を注ぐ所あるべし是れ則ち鷹取山あり

鷹取山 是其通稱されども本名は神撫山と呼べり神功皇后三韓征伐の歸途此所に來り石に座して其上を撫給ふに忽ち高山と成る依て神撫山の稱ありとかや長田神社より登り十八丁にして山高けれども道敢て峻はしからず登臨すれば兵神の全景眼眸に集まり眺望の妙謂ふ可からず此山の西麓に一禪寺ありて禪昌寺と稱し帝釋神撫山と號せり延文中月庵宗光大和尚の開基に係り山内楓樹多く秋錦の候に

は雅俗遊人の杖を曳くもの少なからず元來神戸兵庫の近傍には楓樹の勝地に乏しく僅かに當山あるのみされば市人の愛賞も亦一入あるべし

扱また車中より南に見ゆる村々は尻池駒ヶ林野田等の諸村にして駒ヶ林村は一ヶの漁村に過ぎざれども昔よりの名所あり此邊名ある松樹多し古歌に「いにしへの駒の林の松見ればうへし古葉もかゝらざりけり」又駒ヶ林村の西に續ける野田村の海濱には盗人松と呼べるあり此松一に楠松ともいふ盗人の名は其の海邊にありて白浪立ち止む隙なきより得たるなるべし又此邊より濱續きなる須磨村の海邊にある

一体の松を磯馴松と稱へ古歌などにも多く其名見ゆたり有名の地は多く有名の歴史と相關係せるものなり攝西の地を過ぎる旅客は其地が曾て源平兩家の大戦場たりしことを記憶せざるべからず往昔壽永の戦平氏は生田森を追手とし一ノ谷を搦手とし其間二里有餘の場所に廣々と陣所を構ゆ居たりとあれば今の尻池長田駒ヶ林等の諸村は恰もその中央に當り此邊にて源平兩軍の合戦最も劇烈き

兵 庫 驛

しものど見わたるれば平家方に名ある武士の此邊に戦没せるも  
の少なからずして現に薩摩守忠度越前三位道盛越中前司盛俊新中納  
言知章等の古塚右の諸村に散在せるよしされども今多くは詳かなら  
ず唯知章の碑は近ごろ有志者が醵金を以て長田神社の鳥居前ある街  
道の南側に新設したれば好事の旅客は試みに之を訪ふも一興なるべ  
し同所は兵庫驛を距ること凡そ二十丁許なり  
愆て列車は天井川を越えて須磨村に入るに此邊より追々海濱に近づ  
き懸波白帆の景色松林の間より漸く眼眸に映々來る四時いづればさ  
けれぬ殊に春夏の候最も晴れたる日に此列車に乗る此所を過ぎるも  
の誰か先づ快哉と叫ばざるものあらんや旅客は次第に進みて須磨驛  
近く來れるとき右手の松林中に一小社のあるを見出すあらん此社は  
即ち  
細敷天神 と稱するものにて延喜の昔し菅公筑紫へ配流の途次此  
浦に船を留め漁者鰯を敷きて遷座さしめたる古跡ありとを網敷と  
は其鰯を敷けるよりの名なるべし天神社を右手に眺めつゝあるらち

須 磨 驛

須磨驛は攝津國八部郡西須磨村にありて山陽鉄道第二次の停車場に  
して東須磨村と併せて須磨と稱し戸數四百餘古へより世に聞わたる  
名所あり村内には名物として味噌を賣る家多く松風村雨磯馴味噌と  
稱せりまた家々の軒先に熊を掲ぐるは殆んど此地の風習なるが是は  
曾て安徳天皇の遷幸ありて行宮を一ノ谷に設け此地を京城に擬した  
るより始まれりときん傳わり此地水清く空氣爽かにして風土頗る脚  
氣病者に適し夏時には兵庫神戸或は大坂京都遊々り轉地療養に出掛  
くる患者少からずして普通の民家にて病客を宿泊せしむる所多  
し是等の患者は別に服薬を要せざるも一週間乃至二三週間にして大  
抵全治せざるは無しといふ此近傍には名所舊跡の尋ねべきもの甚だ  
寡きからず又山林には銃獵者を疲らし海中には漁客を飽かしむべき

須 磨 驛

に汽罐車の進行漸く遅く忽ちに又運轉の止まるは是れ則ち須磨驛な  
り

須 磨 驛

獲物の充滿たれば夫等の癖ある旅客の爲めには最も便利の停車場とも謂ふべし同場より近傍各所への人力車賃を擧ぐれば

須磨寺へ 一人乗 三 錢 東須磨へ 一人乗 四 錢

一ノ谷へ 同 三 錢 境川温泉へ 同 五 錢

鹽屋村へ 同 六 錢 瀧ノ茶屋へ 同 八 錢

上野山福祥寺

須磨に遊ぶ旅客は先づ當山を訪はざる可からず

當山は俗に須磨寺と稱するもの即ち是れにて停車場より三四丁東に

あり街道を北に入ること二丁許にして二王門に達す本尊は楠樹木の

観音にして天長年中和田岬の海底より網に掛りて揚りその靈驗赫著

なるより此事忽ち叙間に達し光孝天皇仁和二年前饒上人に勅して此

寺を創建ありたる也當寺の寶物には青葉の笛弘法大師作高麗笛祐學

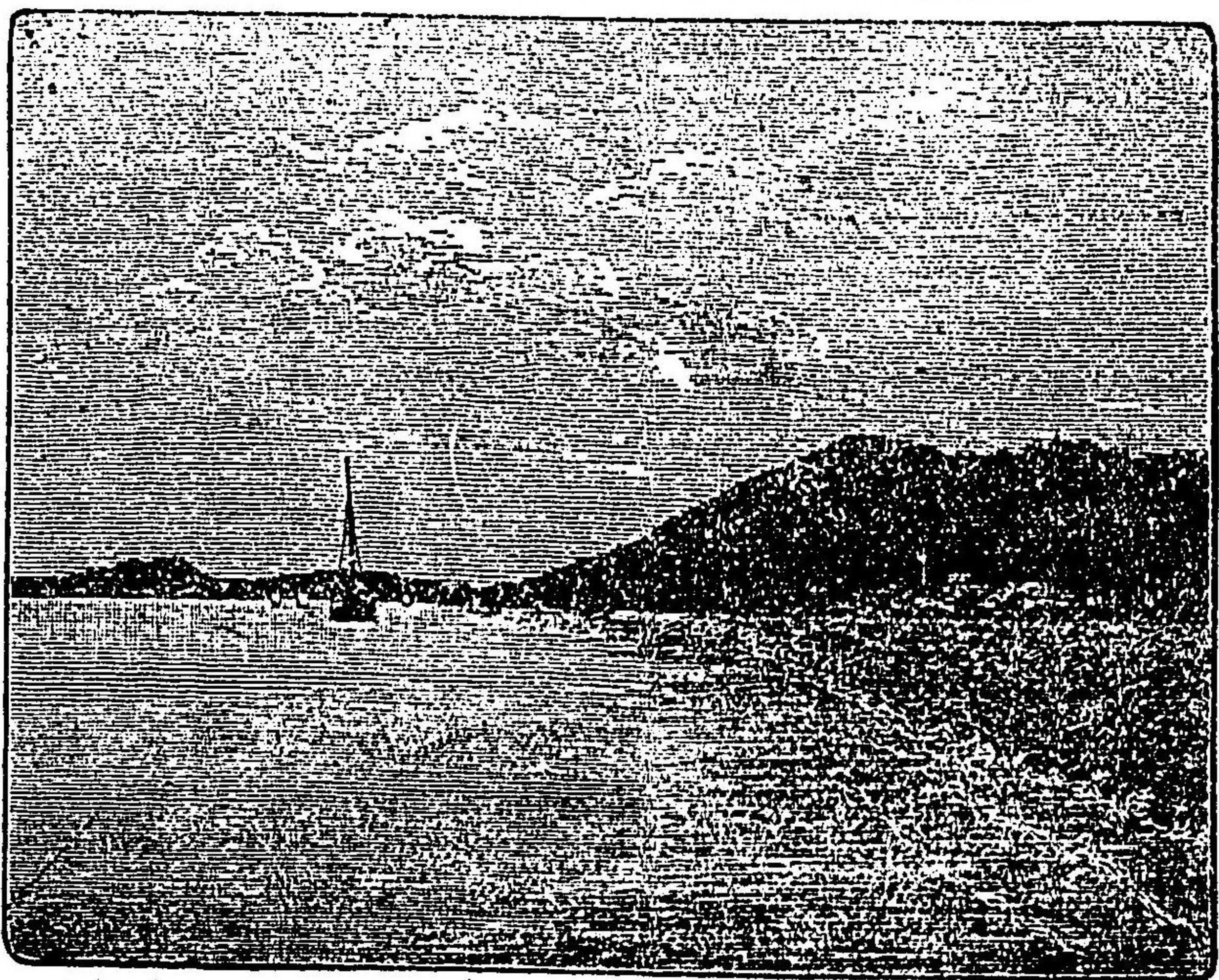
僧正作敦盛赤旗名號法然上人筆母衣絹名號蓮生法師筆敦盛幼時の手

跡和歌二首若木櫻制札武藏坊辨慶筆等ありて見料壹錢を投すれば誰

にても縦覽を許す此寺昔は寺領ありて坊舎十數宇に及び著名の巨刹

ありしが時勢の變今は已に荒廢を極め堂宇傾き伽藍朽ちて坊舎の如

須 磨 驛



きも存するもの僅に二三に過ぎず寺の門前に一株の櫻樹ありて若木の櫻と呼べり是れは源氏須磨の巻に須磨には年かへりて日さくつれくなるに植し若木の櫻はのかに勾ひそめて空のけしきうらゝか也とあるより斯くは名附けたるものありとぞ夫の辨慶が制札に「此花江南所無也一枝於折盜之遺者一任天永紅葉之例二伐一枝者可前二指」といへるは即ち此櫻の事あり左ふ古歌一二を記す

「櫻花誰が世の若木ふりすて、須磨の關やの跡埋むらん 定家  
「ゆき暮て木の下蔭を宿とせば花やこよひの主あらし 忠度  
源光寺 として光源氏の舊跡と稱ふる寺須磨寺の西南にあり此寺の  
門前に芭蕉翁の句碑あり豊後の俳士芳蘿坊の建つる所ありと翁の句  
に「見渡せば春がひれば見れば須磨の秋

須磨關屋 關屋の跡は今健かあらねども源光寺の西街道の左右に  
一堆の臺あり此所即ち其の遺跡ありと言傳へり

行平及松風村雨の古事 須磨といへば行平左遷の古事談を憶  
起す者少からざるべし今其の畧を記せんに光孝天皇嵯峨の芹川に

行幸し御狩の催ありし時在原中納言行平供奉せり行平當年六十九歳  
にて其着たる狩衣の袂に鶴の紋を縫出せしが自から我が齡に適はさ  
ることを憚かりて翁さび人さかめそ狩衣けふ計とそ鶴も鳴ある」

と讀出でけるに帝ことし五十七歳その詞不祥なりとて行平を攝州須  
磨の浦に謫せらる行平配所に在ること三歳にして赦免の沙汰を蒙り  
再び花の都に歸ることを得たり配所の歌に「邂逅に問ふ人わらばす

須磨唐驛

須磨唐驛

まの浦にもしは垂つゝわぶと答へよ」また此地に松風村雨と名づく  
る姉妹の娘あり行平最初その少女等に出會ひ宿はとたづねしに彼れ  
返詞はなくて「白浪のよする渚に世をすこす艇の子あれば宿も定め  
す」と一首の和歌を詠せしかば行平感慕大方あらず遂に彼等と親し  
く語らひたりとぞ松風村雨姉妹の墓は東須磨より西北三拾丁許の奥

ある田井畑村に在り

厄除八幡宮 田井畑村の厄除八幡宮は須磨驛より三十丁許北にあ

りて陰曆正月十八日その祭禮を行ひ神戸兵庫をはなれ近郷より若き  
男女の參詣するもの夥多し

一ノ谷。二ノ谷。三ノ谷 源平古戰場として有名なる一ノ谷は須

磨驛より三丁許西にあり此谷登れば高サ凡そ四丁谷幅二十間兩岸岩  
の高サ拾二間餘ありて夫の鉄拐ヶ峰といへるは二ノ谷の奥に連なる  
山嶽の稜あり壽永三年平家安徳天皇を擁して此所に籠城し假りに皇  
居を設けたる其の土手跡と覺しきもの今も尙は存在せるにより村民  
中有志の者礪金を以て其跡に一の祠堂を建設せんとて當時計畫中な

◎源光寺の須磨の關屋◎行平及松風村雨の古事◎厄除八幡宮◎一ノ谷二ノ谷三ノ谷三十三

りといへり一ノ谷より西の方二丁半許にして二ノ谷あり谷の長サ三丁餘幅八間高サ九間餘また是より凡そ二丁許西に三の谷あり谷の長サ二丁餘幅十九間高サ九間許昔は此の邊の地を總稱して須磨の上野

とは呼べるよし

敦盛塚 俗に敦盛の墓碑と稱する大五輪の石塔は三ノ谷の少し西

街道の右手にあり無官大夫敦盛は壽永三年二月七日一ノ谷落城の時

熊谷次郎直實の爲に討れしこと世人の知る所あり此石塔は何人の建

立に係れるや詳かあらず或は敦盛の靈自から來りて建るなどの怪説

もあり塔の高サは壹丈壹尺壹寸四尺四方ありといへど今は半ば砂中

に埋もれて其の全体を見ること能はず此所の路傍に一軒の蕎麥店あ

りて敦盛蕎麥の名世に高し

海水温泉 一ノ谷の海邊及び攝津播磨の境界ある境川の両所に海

水温泉あり一ノ谷の方は海月館と稱し街道の左手鉄道に沿ふて場

所を設け眺望固より宜しけれども浴場は甚だ狭く境川温泉場の手廣

にして且つ備はれるに若す同所は境川の畔にありて山に據り浴場を

須

磨

驛

設け神戸近傍の温泉場よりは却て大に清潔あり暇あるの旅客は必らず一浴を試みて可かり扱温泉に一浴を試みたる後更に同驛より乗車して西に向ふに右は峨々たる鉄拐の山嶺左は漫々たる青海原にして大小の汽船帆船織るが如く往來し海濱の白砂は雪を欺き磯馴松の翠滴るが如きなど實に畫も及ばぬ風景にて殊に夕照に網を晒し沙上に引揚げたる漁船を圍みて色黒き童子等の遊び戯るゝ漁村の眞景は都會に住馴れたる旅客の目には如何に珍らしく面白く映するならんか尙は此邊より淡路島は漸くその姿を顯はして浦の風光に一段の妙を添へ來る假令風流の道には縁遠き旅客ありとも亦どか其吟情の動かすして已まんや  
列車は夫の一ノ谷の温泉場敦盛の塚境川の温泉場を右に看過して進むに鹽屋村より東垂水村にかゝりては平地甚はだ狹隘と成り左手の街道は直ちに海岸に沿ひ右手の山嶺は近く鉄道線路に相接して列車その直下を走る以前は此邊を通るもの皆干潟を往來せりといへり其の西に至り列車の自ら止まる所は即ち舞子驛あり

◎敦盛塚 ○海水温泉

舞子驛

舞子驛

舞子驛は攝津國八部郡西垂水村にありて山陽鐵道第三次の停車場にして垂水は即ちたれ水にて諸國に同名多く皆水の湧垂るゝところを稱へ此所は昔し渡海船の用水を汲取りし場所ありと今も斷崖より一條の水流れ落ち些少なれども自から瀑水の形を成して夏時に行人の熱汗を洗ふに足るべし此瀑水の前に當り海岸に沿ふて三四軒の料理茶屋あり通稱瀧ノ茶屋と呼び座敷の眺望よろしければ海水浴又は避暑の爲め夏季遊人の諸方より來るもの多し此所須磨驛より一里舞子驛より十五丁あり又舞子濱に遊ばんとする旅客は此驛より下車するを可とす尙近傍各所への人力車賃を擧ぐれば左の如し

舞子濱へ 一人乗 金六錢  
瀧の茶屋 同 金五錢  
鹽屋温泉へ 同 金七錢

海神社 は一に垂水神社とも日向大明神とも稱す住吉明神を祀れるものにて國幣中社に列せり

舞子驛

遊女塚 停車場の西三丁許西垂水村の街道人家の間にあり塚の上に寶篋院塔あり俗傳に云建武のころ宛前博多の商人某江口の遊女が爲めに建つるものなりと又一説には大阪の遊女下ノ關へ往かんとし此海に溺死しければ或人憐れみて此塚を築けりと

五色山 遊女塚より壹丁許西にあり一堆の丘にして其土中に周圍壹尺五寸許の壺數百個車輪のごとく幾重も埋めあり是れ古への荒陵にて諸國に此類のもの少なからず一説に仲哀天皇此地に行幸ありけるとき彼の壺に花を植へ叙覽に供せしと云へり五色山の名は是等の説より起れるにてもあらんか尙は考ふべし

舞子濱 播州の海濱は日本全國中最も名勝に富むの地あり其名勝中又世人の最も賞する舞子の濱は我が山陽鐵道旅客の必らず一遊を試みざる可らざるの場所あり此濱は西垂水村の端より山田村に至る東西六七丁南北二三丁の松林にして古松數千株いづれも梢を等ふし其高さ大抵二三丈に過ぎず枝幹屈曲或は這ふが如きあり或は舞ふが如きあり葉色殊に深く毎樹各別に一種特有の趣ありて自から他所の

◎海神社 ◎遊女塚 ◎五色山 ◎舞子濱

松と同一しからず且つ濱邊の砂は白玉を散せるに似て樹の翠と相映  
 海上の淡路島は正に對座して嫣然笑を含むの状あり造化天然の美術  
 も茲に至てその妙を極むといふべし此地古歌の証すべきものさけれ  
 ども其勝は曾て天下に聞ゆ雅俗共に之れを賞せりこの海邊一体の林  
 中には松露を多く産す街道の南海岸に沿ふて數戸の料亭旅店あり就  
 中龜屋左海屋の二店最も古く且つ大ありとし春夏の候には神戸又は  
 京阪遊より内外人の來て逗留するもの多し此地は名産に舞子焼と稱  
 する陶器あり旅客の土産に妙あり舞子の濱より明石へは其間纔か一  
 里に過ぎず道路最も平坦ければ人力車に乗て往くも二十五分乃至三  
 十分時間を費せば容易に達することを得べし然れども此邊の勝景に  
 尙飽足らずして更に列車中より之を眺望しつゝ往かんと欲する旅客  
 は復び垂水驛に立戻りて乗車するも亦一の興あふんかし同驛を發し  
 たる列車は颯て夫の遊女塚五色山をも左に看過し舞子の濱へ差しか  
 るるに鐵道は恰かも松林の中央を横斷したれば列車の進む所は右も  
 左も夫の這ふが如く舞ふが如く翠色滴るばかりある老幹を見るのみ



右手の丘上に一亭舎を見認む  
 るは是れ有栖川宮が近頃購ひ  
 給ゆる別墅なりと聞ゆ  
 舞子の濱を過ぎて問もあく右  
 手なる街道に沿ひ赤煉火造の  
 一大建物あり數十丈の烟突雲  
 を凌ぎて直立するを見ん是れ  
 即ち大阪神戸の商人某々等が  
 設立お係る關西煉瓦會社の製  
 作場にして明治廿一年の末建  
 築の功を竣へしものあり昔よ  
 り明石近傍には瓦を製造する  
 もの多く殆んど一の物産と成  
 れるが是れは此邊の山に産す  
 る粘土の殊に之に適するが爲

めにして煉瓦會社の此地に設立せらるゝも専ら此事情あるに依るものとは知らる

山田村(舞子の濱近邊)も即ち山田村なりの西端より大蔵谷村を経て明石に至るまで街道に沿ふて人家大抵立續き鉄道ハ即ち其裏手を走れり大蔵谷は明石市街の入口にして以前は有名の宿驛ありしが今は殆ど其跡なく住民三分の一は全く農業を専とせり

斯くて列車は大蔵谷村より人丸山の麓を過ぎて明石に入り舊城廓内に設けたる停車場に留まる是れぞ即ち明石驛あり

明石驛

明石驛は播磨國明石郡大明石村に在りて山陽鉄道第四次の停車場にして播州遊覽の旅客は必らず此驛より下車すへし次項に掲ぐる明石の記を讀で其地形風土を概想すへし當驛に定めある人力車賃は左の如し

細工町	一人乗	二錢	櫛屋町	三錢
-----	-----	----	-----	----

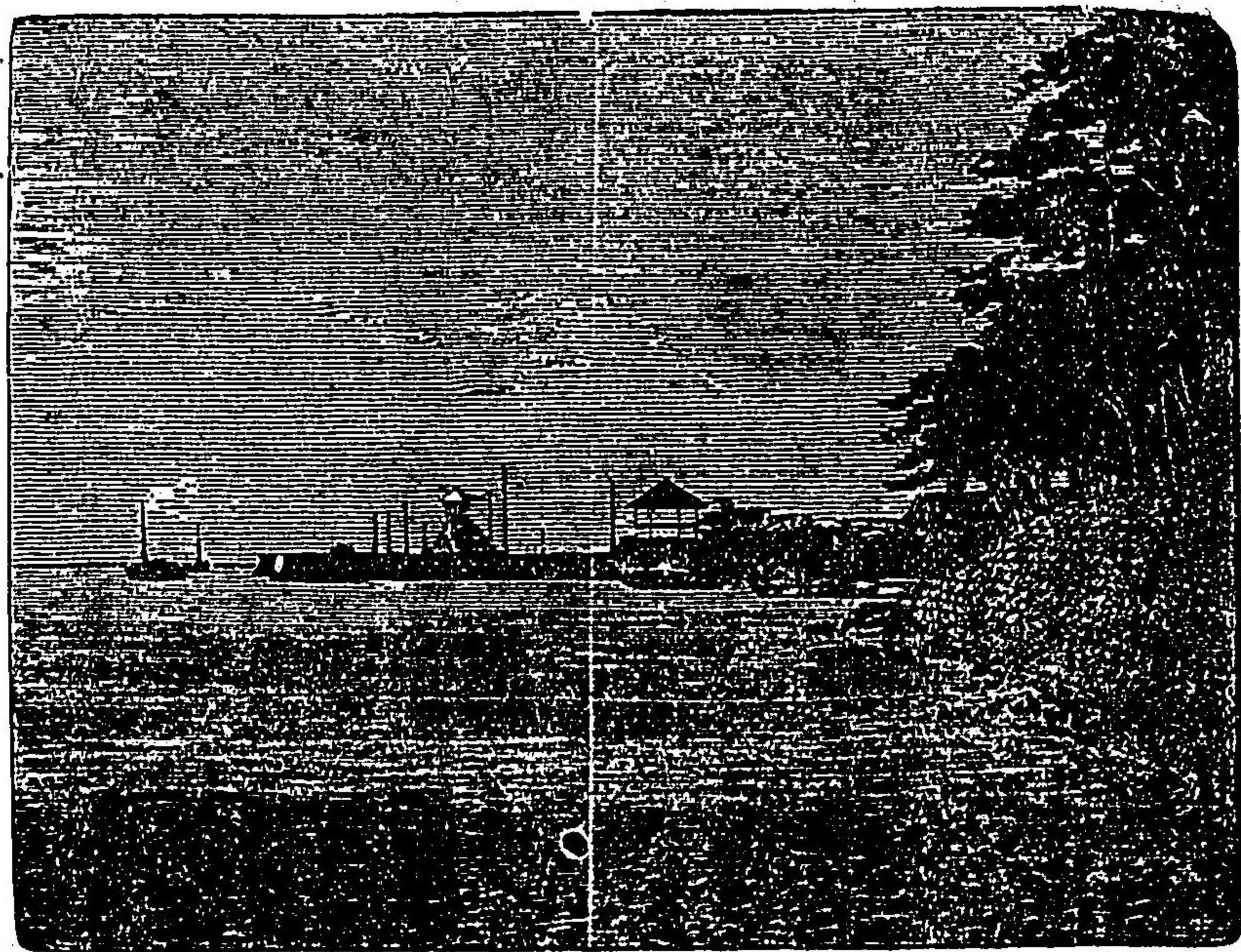
明石の記

東魚町	同	戎町	同
西魚町	二錢五厘	大蔵谷村	同
東西本町	同	材木町	同
中	同	船子町	同
鍛冶屋町	同	王子村	四錢
相生町	同	西新町	同
公園及人丸山	同	波止場	同
三木	廿五錢	大山寺	廿錢
舞子濱	六錢	西戸田	拾四錢

明石の記

明石は元と華族松平氏の所領に属せる八万石の城下にして現在の市街は相生町鍛冶屋町大蔵谷村大明石村東本町西本町細工町東魚町西魚町中町材木町櫛屋町戎町船町當津村新濱西新町王子村の十八ヶ町村より成り明治廿二年四月以降は之を總稱して明石町と爲せり市街の総戸數は四千三百戸人口は壹万九千二百八十人にして諸町の内東西本町細工町東西魚町中町材木町櫛屋町相生町鍛冶屋町等は凡そ中





中央に位し商業相應に繁昌するを見る但し諸種の商業中に於て先づ異  
 服商魚類問屋等を以て盛んなるものとし其他は大抵日用の雜貨を  
 ぐものにして其販路は凡そ在方六歩(明石郡を主とし美斐加東二郡の  
 村落をも含む)淡路三歩(東浦は假屋邊以東西浦は江井浦以北)市中一步  
 位の割合あり舊藩の士族は多く大明石當津の二村に住し王子村には  
 米穀を扱ふ商人多く船町戎町は大抵職人日傭人の類多きを占めたり  
 但し漁船問屋はこの両町にあり又當津村の一半并に新濱は全く漁夫  
 の巢窟にして當市街中の最も下等に属するものと知るべし  
 以上は明石市街の現況一斑を擧ぐるものにして其詳細の如きは旅客  
 が随意の探問に任せ是より更に進んで市街近傍に於ける遊覽地の案  
 内をなさん

舊城址 明石驛の北に當り深林鬱蒼の間に高く疊壁櫓牆の聳ゆる  
 を見るの是れ即ち舊明石藩の城址にして元和年中小笠原右近太輔の  
 始めて築く所なりと云ふ廢藩后悉皆官有に歸したるを市民より更に  
 其幾分を請ふて公園とし庶人遊觀の場所とさせり山上には明石神社

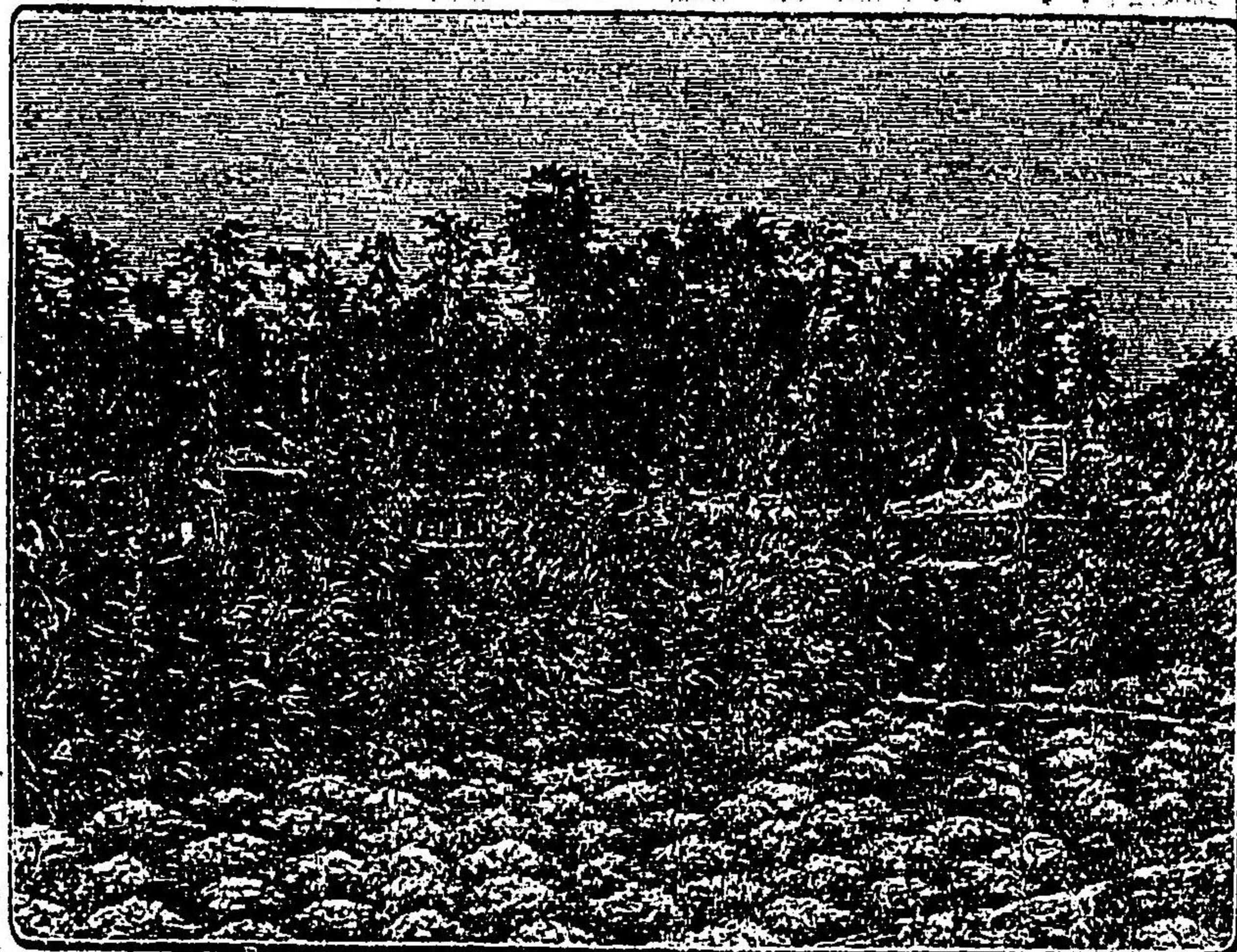
と稱し舊藩主松平家の祖先を  
 祀れる一小祠あり社の四邊に  
 は老樹亭立し且つ近比新に櫻  
 樹を栽る春花秋月は勿論避暑  
 觀雪の如きにも最も屈竟の場  
 所あり尙ほ市民は近來公園改  
 良の計畫を志し明石公園保存  
 會なるものを設けて尽力する  
 所ありといへば遠からずして  
 大に其体面を改むることなる  
 べし

人丸神社 舊城址に續ける  
 東の丘陵は人丸山にして明石  
 に有名なる柿本人麿の祠は即  
 ちこの山上にあり東西に華表

記の石明

立ち西の華表の傍には龍の井と稱するありて清水常に湧出す是れ手  
 洗場あり當社祀る所の木像は丈七寸その勸請の年月は詳かからざれ  
 とも古は城内の地に在りしを後茲に移せしものと言傳へり人磨は持  
 統文武の朝に仕へ歌道の聖神として代々の帝王より奉幣使を賜り享  
 保八年一千十年忌に當りて正一位を贈らるその生國は石見國にて同國  
 高角山にも祠廟あり當所は其石州より京師へ通ふ途次立寄りて浦の  
 景色を眺望し夫の世に聞はたる「はのく」と明石の浦の朝霧に島か  
 くれゆく船を思ふの歌を吟詠せし因縁に由りて之を勸請せし  
 ものならん社前に盲杖櫻と名づくる櫻樹あり昔し築紫より或る盲人  
 の來りて「はのく」と誦あかしの神を祀らば我にも見せよ人丸の塚  
 と詠せしに其目忽ち開け明かに見ることを得しかば今は用なしとて  
 携はたる櫻の杖を地上に突立てたるに不思議にも枝葉生ひ出で花を  
 咲せたりとか言傳ふるものは是れあり此外筆柿又は雲井櫻と稱ふる  
 名樹ありて孰れも其故事口碑に存すれども零す門を入りて左の方に  
 立てる一基の石碑は寛文年中明石城主松平日向守信之侯の建設に係

記の石明



りその文は弘文院林道春之を撰べり其銘に云く

柿本之種	和歌之家
千歳摸範	六義英華
山川艸木	雪月雲霞
託物而感	罩思無邪
言言之葉	字字之花
聯枝以茂	鋪玉無瑕
敷島道通	詞源水縣
涌然而出	詰乎無涯
几鳴高岡	馬生瀝賒
絶類而優	有誰而加
赤石浦曙	白霧舟遮
廟祠認跡	冠盖成衙

明石の記

また社の門前に兩三軒の茶店あり南に面して席を設く此所より海上の眺望は果して如何からん...

明石の記

兩馬川 歴史に薩摩守忠度岡部六彌太と接戦し遂に其殺す所と爲れり...

○月照寺◎權現山◎長壽院◎腕塚◎兩馬川◎忠度墓の休天神◎朝顔光明寺淨土光明寺 四十七

今上皇帝御巡幸の砌その行在所に充てられたり本堂より前を望めば東は舞子の濱より南へ紀泉淡の山々西は遙かに家島小豆島に至るまで一眼の中に落ち風光最も佳絶なり  
水主松山と稱するは茶屋橋を渡れる向ひの海濱にて以前は茶屋ありて藩主遊覧の地たり松青砂白海水浴に適し散步運動にも頗る妙あり  
波戸崎及築山 いづれも明石港の端にありて此所より淡路島への距離は最も近く其間海上纜か廿丁に過ぎず  
岩屋神社 築山を西に下り半丁許の所(戎町)にあり縣社にて當市街第一の大社あり祭神は伊弉諾伊弉册大日靈月讀蛭子素盞鳴の六座例祭は陰曆九月十三日あり  
望海の濱 市外の船上村に属し明石川大歡橋を西へ渡り左に取りて十丁許往きたる所にあり望海樓と稱する舊藩主の遊覧所あり地にて其跡今尚存し淡岫の眺望また一奇なり暇あるの旅客は必らず杖を曳くべき所とす

諸官衙 當地諸官衙の内明石郡役所明石治安裁判所電信局明石警察署の四衙は相生町にあり明石監獄は大明石村に在り明石郵便局は西本町に在り元戸長役場は大明石村大藏谷村西新町西本町當津村の五ヶ所に在り  
銀行及新聞社 第五十六国立銀行は東本町に明石新報社は西本町に在り  
旅店 當地の旅店は大藏谷村及び王子村に多し其内の重立ちたるは大藏谷村にて淺田橋本屋王子村にて山本伊勢屋松本屋等とす  
船便の事 大坂より兵庫を経て播州の諸港に通ふ大坂商船會社の汽船は大抵毎日兩三隻づゝ明具港に寄港し又姫路瀬船會社の汽船も必らず寄港して互に客を争へり然れど當港以西は所謂播州灘にして内海中の難所あれば風浪の日には海路を取るもの甚だ稀れなるが如しまた當港より淡路岩屋浦まで海上一里八丁餘の間には毎日數回便船和船を仕立てゝ往來す運賃は一人前金五錢位別仕立の船を雇へば三十錢乃至四十錢位あり但し右の便船は郵便物の運送を請合ひ居る

◎水主松山◎波戸山及築山◎岩屋神社◎望海の濱◎諸官衙銀行及新聞社◎旅店◎船便の事 四十九

ものあるが風波烈しき折には顛覆の恐れもなきに非ず左なくとも遅延の不都合は免かれざるに付き近なる漁船を以て之に代んどの計畫を爲す者あり斯れば淡路渡航の旅客には此上もなき便利といふべし

**物産** 明石の物産には鯛、章魚、海藤、華、章魚の子の鹽漬、鯛煎餅、小鯛の干物、明石珠及び松露糖、明石の月干菓子ありいづれも土産物に適す

兵庫より須磨を経て明石に至る迄の沿岸には名所舊跡の探るべきもの甚だ多かりしが明石以西は果して如何といふに敢て以東に譲らざるのみか世に聞ゆる播磨名所は其の以西なる加古、印南二郡の地にありて昔より播磨巡りと稱へ京阪より播州遊覽に出掛る者は必らずこの二郡の播磨名所を見物するを以て重なる目的と爲せるもの如し「播磨名所」とは一に別府の手枕松、二に尾上の鐘三に高砂の相生松、四に曾根天神の松、五に石の寶殿是れちり然れば須磨、明石の風色と看て大に其天然美術の心を養へる旅客の更に進んで明石以西の勝を探らざるべからず

明石驛を發したる列車は舊城郭内即ち大明石村及び當津村の士族町

を過ぎて明石川を渡る此川の美藝郡の山中より出で、明石郡を流れて明石町の西部より海に注ぐ川幅は凡そ三十五間許あり常に水甚だ多からずして或は徒歩渡りすべし以前は川の東岸に總門と稱する城門ありて即ち城下の西口ありしかり明石川の西は明石町の西端あり王子村にして村の北手に王子權現の社あり今この王子村の名に付てし歴史上に記憶すべき事實あり其畧を言んに

人皇十八代履仲天皇の御孫市邊押盤皇子の御子に億計弘計の兄弟あり父市邊皇子雄畧天皇の爲めに討れ給ひしより兄弟には禍身に及ばんことを恐れ共に丹波餘射郡に逃れ給ふこれに随ふ日下部連といふは遂に播磨國縮見の石窟に入て縊れ死しけり億計弘計の二王にはこの連の行衛を知り給はざれば明石郡に來りて縮見の屯倉に牛飼と成り給へり茲に伊豫の來目部の小楯といへる者郡縣を巡行して租稅收斂の折柄かの縮見にて新嘗の飲酒の時二王に炬火を乗らしむ夜深く酒酣にして琴を撫し皇子ども知らず二王に舞を勧め辭し給へども聽ざれば弘計衣帯を整へ室壽の歌を諷ひ起て舞ひ

給ふ小楯その歌に由り始めて皇子あることを知り席を離れて再拜し乃ち郡民に宮を造らしめて安置し尙ほ此趣清寧天皇に奏聞せしかば帝大いに歡びて直ちに明石に迎ひ以て御子とあし給へり後に弘計は顯宗天皇億計は仁賢天皇と成り給ひ共に能之下情に通じ百姓の疾苦を憐れみて仁惠徳政の譽高し今の王子村は二王の潜み給ひし所あるがゆゑに斯くは稱せりとぞ

王子村より四五丁許進む程に列車は馳て阪の堀割路を通過すべし此所を和阪かすがさかの詛りかといふ

和阪は一に蟹が阪とも書す昔し大なる蟹の棲みて行人を害せしなどの奇傳存し近傍に蟹塚と稱するものもわり阪上にゐる寺を慶命山阪上寺といふ此所は嘉吉の古戰場にして當時播備美三國の主たる赤松滿祐が將軍足利義教を弑し播州に歸りて其討手を待ち十七八里の間に城を構ふ中にも赤松常陸介則尙和阪の構にあり云々軍記に見ゆたり

舞子濱以西は鉄道線路次第に海を遠ざかれども此邊は尙ほ平田を隔

て青波白帆を南方に望み須磨以來の好伴侶たる淡路島の相變らず我れに隨つて西するを覺ふ列車の左右は松林または田畠相聯あり且つ所々に用水池の散在するを見る中には甚だ小あらざるものもありて其中の一個は鉄道線路その中央を横斷せる所あり列車は小久保森田等の諸村を過ぎ早くも次の驛に達せんとして線路の右手に接し人家櫛比自から一町を成せるを認むべし是れ大久保町にして以前の西國街道の宿驛に當りしものなりとぞ此地の光觸寺といへるに大岡松と稱するあり大岡本陣の跡なりと云ふ但し大久保町とは市町村制實施以前の舊稱にして今は近傍の九ヶ村を併せ大久保村と稱へり

大久保町を右に看過して間もなく大久保驛に着す

大 久 保 驛

大久保驛は播磨國明石郡大窪村にありて山陽鐵道第五次の停車場にして前記大久保町へは凡そ五町許なるべし當驛に定むる所の人力車賃金は左の如し

天郷梅林	金六錢	長坂寺村魚住太子	金五錢
金ヶ崎梅林	金三錢	魚住村	金八錢
江井島村	金七錢	清水村	金九錢
大久保町	金二錢		

大久保驛

天郷及金ヶ崎梅林 天郷の梅林は大久保驛を北に向ひ田間の小道を往くこと二十丁許にあり其地位は小高き丘の半腹より頂上にかけて廣がり老幹七百餘株二町歩餘の畑地の間に横に斜にヒシく枝を交へて立列び其樹はいづれも俗に「りんし」と稱する八重の海紅梅にて花候は尋常單瓣の白梅より十五日乃至二十日も遅く大抵三月中旬より下旬を以て盛りと爲すべし丘上より南望すれば例の淡路島山前に横はり尙は眼下に萬頃の麥畝を看る左きぎだに坐るに吟情の動くべし好風景なるを況して開花の候には紅雲林を埋め暗香人を襲ふの妙あり誰人も一遊を試みずして已み得べき所にわらず此所より十四五丁西の金ヶ崎村といへるにもまた梅林ありて其花の皆天郷と同様薄紅梅あれども樹は若く林は狭く連も同日には論ずべからず

大久保驛

江井ヶ嶋村 大久保驛の南方海濱に接して江井ヶ嶋村あり葡萄酒を産し其量少あからず品質は灘酒に劣らざるよしにて専ら東京地方へ輸出すといへり

大久保驛を發して西に向ふに金ヶ崎村の梅林を右手に看過し馳て清水村に入りて清水河原を通る此河は野中の清水とて清水村の街道より二十四五丁北の森林中にある池より流れ出るものにして以前は水常に絶ざりしといへど今は乾涸して唯一の小石河原に過ぎず昔は播州には十水と稱し清水の湧出する所明石印南飾東飾西掛東掛西佐用の諸郡に都合十ヶ所ありて右の野中の清水は其第一位に在りしものと傳ゆり去れば古歌數多ある其中に

はりまの書寫へ参るとて野中の清水を見ける事一昔しに成にける年経て修行すとて通り見るに同じさまにてかはらざれば

ひかし見し野中の清水かはらねば我影をもや思出らん 西行  
列車の窓より彼所此所見渡すに此邊一体松林多く或は小丘脈の所々

○天郷及金ヶ崎梅林 ○江井ヶ嶋村

土 山 驛

に起伏するが如きを認むべし此邊は其昔し印南野と稱し漢々たる曠野にして萬葉以下の諸集に此野を詠ふたる歌少なからず其後次第に開墾の業を全くして今は見るが如き平田と成たれども他所に比すれば土地甚はだ瘦せて且つ水利に乏しく爲めに頃日淡河川疏水の計畫を見るに至れるありと云ふ現に加古郡の東部に野谷草谷野寺野村野口良野等原野に縁ある村名の多きは夫の印南野の名残なるべし恣て列車へ明石郡より加古郡に入り早くも次の驛に着く之れを土山驛と稱す

五十六

土 山 驛

土山驛は播磨國加古郡土山村にありて山陽鐵道第六次の停車場にして美夔郡三木へは此所より三里なり當驛に定むる所の人力車賃金は左の如し

二見	港	一人乗	金六錢	別府村(手枕松)	金十三錢
尾上	同	同	同廿錢	高砂	同廿五錢

土 山 驛

(別府尾上高砂石の資殿會根を巡覽して當驛へ歸るまで)  
二見港は古より二見の浦とて此邊の名所なり今は東二見西二見の兩村に分れ播州灘渡航の和船又は漁船も時々寄港して風波を避くることあり古歌多けれども伊勢の二見の浦と混同して分明ならず其内確証あるもの一二を擧げんに

名所めぐり 金五十五錢

但馬の湯へまかるとして二見の浦といふ所あり  
古今の昔は夕月夜はつかささを玉くしげ二見の浦はわけてこそ見ゆ

美作の國へ下るに播磨の二見の浦にて時鳥をさきてよめる  
名寄玉くしげ二見の浦のほととぎす明方にこそ鳴わたりけれ

海濱に天満宮の社あり沖の眺望最もよろし  
土山驛より次の加古川驛に至るまで途上見る所は只例の松林と平野とのみ旅客の注意を惹くべき程のもの少なし其内南方に當て遠く見ゆる一大松林は名に負ふ尾上の松原にして近く鐵道線路の左に接する一樹林(野口村にある)は念佛山教信寺とて當國巨利中の一に在るも

◎二見港

五十七



のあり  
 念佛山教信寺 是人皇四十九代光仁天皇の皇子教信上人の開基に係り清和天皇の御宇には封疆廣大にして僧院五十餘坊あり寺領八百石に佛供料三千貫を賜ひ其後崇徳院後深草院の御宇にも數百石の賜ありて未派五拾餘寺に及び諸堂壯嚴ありしが度々の兵火に罹りて亡滅し今は僅かに本堂其外二三の堂塔を遺すのみ教信寺を左に看過して間も亦く加古川驛に達す

加古川驛

加古川驛は播磨國加古郡加古川町にありて山陽鐵道第七次の停車場にして加東郡小野(四里)美盛郡社(六里)加西郡北條(六里)等へ趣かんとする旅客は此所より下車して縣道に由るを便とす當驛に定むる所の人力車賃は大畧左の如し

高砂町	五人乗	五錢	國包村	拾錢
北在家村	五人乗	五錢	加東郡小野	廿錢

加古川驛

加古川の記

加古川町の記

別府村	十錢	加西郡北條	卅錢
大野村	五錢	曾根村	十錢
日向神社	五錢	曾根天神	十錢

名所巡り 凡そ金卅五錢  
 (別府より始め石の寶殿曾根に至りて更に當驛へ歸るまで)

加古川町 加古川驛より下車して南に往けば一の市街に出づ是れ加古川町にして元と市街中央の小川を境界とし東を加古郡の寺家町西を印南郡の加古川町と稱せしが明治二十二年四月以降之れを改めて更に加古川の水流を郡界とし且つ從來の寺家加古兩町を合して加古川町と改稱せり此地は昔し加古の驛といひて人馬を大久保の驛より此所に繼ぎ御着の驛(備前郡)に至りしものなり現時戸數は七百三拾餘人口二千三百七拾餘にして町内に加古郡役所高砂警察署加古川分署治安裁判所加古川出張所等あり戸數人口等は固より高砂町に及ばざるよと遠しと雖も其位置國道筋に當り往來の要路を占めれば

◎念佛山信教寺 ◎加古川町

加古川の記

市中の繁榮は當町の方を以て勝れりとすすべし町内の藥王山常住寺といへるに加古の松と稱するあり初代の樹は已に腐朽し今存するは第二世ありとぞ旅店は警察分署の西隣ある舛田屋を第一とす先年今上御巡幸の節御晝食ありし所あり加古川驛より下車したる旅客は一應當町の模様見物の上次に追々案内するところの各所に是非足を運ばざるべからず夫の播磨名所の如きは即ち其中に在るものなり

日向神社 加古川町より北凡そ三十丁許ゆける大野村に在り一日向明神ともいひ又氷丘とも書す鵜茅不書命尊と玉依姫との間に生れ給ふ伊佐々彦即ち彦五瀬命神武天皇の御實兄を祀る所にて郡内の大社されども今は大に荒廢を極めり陰曆正月亥の日より巳の日まで七日間亥巳籠りの祭とて村中謹慎の古例あり今尙その風を存すと云

大野山 日向神社の上なる小山を大野山といふ景行天皇后稻日太

八十石階 加古川より七八丁上舛田村にあり山の麓東より西南に

加古川の記

向ひ登ること二丁余にして一山一石自から嶮嶮として疊みたる石階ありゆゑに八十の岩はしといふ山上の眺望頗ぶるよろし古歌あり

夫木の雪ふればあまの羽衣白たへに風さへ渡る八十の岩はし前大納言源朝

刀田山鶴林寺 加古川町より東南廿五丁許北在家村にあり卿創

は人皇三十一代敏達天皇十二年聖德太子十二才の時佛法興隆の地あり天文博士に卜はせ給ふに其考文に曰く播州鹿子郡山海の中間に廣大の平原あり是れ万代不朽佛法繁榮の地ありといふ故に大和國盤余雙槻宮より行幸有て遂に三十二代用明天皇十二年三月上旬太子十六歳の時此地に精舎を建立せんと秦川勝に命じて三間四面の梵宮を營み釋迦三尊四天王の像を置き内陣の四柱には八大金剛童子の影を圖し四壁には三千の佛像を畫き右の方の厨子には太子十六歳の尊像あり即ち太子の頭髪を植へたるものなりとて世に植髪の太子と稱す用明天皇十二年より今日まで實に千六百八十四年を経たれども曾て回祿の災なく其儘現存するは寧ろ奇と謂ふべき乎但しこの精舎は聖德院一に太子堂と稱するものあり爾後年を逐ふて建物漸次に増加し坊

加吉川の記

舎のごときも一時三百の多きに達し播磨の四天王寺ともいひて奈良の法隆寺大坂の天王寺と並び稱せられたる名刹なりしが織田豊臣氏より降つて徳川氏に至り寺領追々減少し維新後は僅かに壹丁七反余の地面を無代價にて下渡され之を以てその維持費に供する事と成りたれば伽藍の荒廢に赴くも亦偶然からずして往時寺内なりし所も今は多く耕地に變て坊舎の存するもの三個に過ぎず伽藍の如きも太子堂の外本堂鐘樓三層塔其他一二あるのみ鐘樓の古鐘は攝州長柄鶴満寺の鐘播州尾上の鐘等と均しく千數百年前のものにて今帝先年山陽道御巡幸の折寺家町の行在所に於て天覽に供したり

尾上

鶴林寺より南の方十餘丁にして尾上に達す尾上神社とて住吉大明神を祀れる祠あり社記に據るに昔し高砂と名くる所東は池田より北は此所に續き人家多くして船の往來も程近く漁獵の便りもよろしきに世變り年積りて泊の波も遠淺となり船の出入も宜しからずとて又數年を経て今の高砂といへる所へ家どもを移し同所ながら高砂尾上と相別ちて隔つること八丁あり云々然れば尾上高砂は元と同一の場所にて古歌亦どに高砂の尾上の浦とつりけたるは即ち此所を指せるものと見へたり

加吉川の記

一の場所に於て古歌亦どに高砂の尾上の浦とつりけたるは即ち此所を指せるものと見へたり  
尾上の鐘 一舎に吊しあり其高サ三尺二寸周圍七尺二寸厚サ一寸九分徑二尺五寸流三六個花形四寸在昔神功皇后の三韓より持歸り給ふもの由にて之を撞けば盤沙調の響ありといふ看る者皆之を磨擦するが由鐘面の光澤耀々として鏡のごとし其製造の年代は今得て詳かにすべからざれども千四五百年以上のものたるは亦疑ひあかるべしとぞ  
尾上の松 とは尾上神社の後手にある四丁四面の松林をいへるものにて其全景舞子濱に類し萬株の翠色滴るがごとし此所四季共に松露を産し殊に春秋の候を多しとす松露取の遊びは優雅にして且つ面白く都人士女の遊興には最も妙ありまた相生の松と稱するは尾上神社の境内にあり雌雄の兩種一根より生じ枝葉繁茂して四方に廣がる但し此樹は三代目のものにて初代の樹は其幹を社務所の床に安置せるが其質の堅硬ある殆ど化石に似たり又相生の松の側に都戀しき片

◎尾上 ◎尾上の鐘 ◎尾上の松

枝の松といへるあり枝葉東方にのみ廣がりて西方には無し亦一個の  
奇木といふべし  
別府の手枕松 別府村は尾上より壹里餘東の方の海岸にあり同  
村住吉明神の社内にある古松は手枕松とて枝幹蜿蜒四十歩に亘り一  
種の靈木とも稱すべきものあり此邊一体に沿海の眺望佳絶あるは更  
に細説を要せざるべし  
高砂 尾上より西の方八丁許相生橋加古川の下流に架す二百間餘  
の長橋なりを渡りて其西にある市街を高砂町とす全市二十九ヶ町よ  
り成り戸數凡そ一千七百戸人口八千人あり此地は元と姫路藩の所領  
に属し廻漕舟運を主とせる所にて同藩の米廩あり領内の米は一旦此  
地に輸送し夫より兵庫に差廻すことと成居たりといふ現時漁船も  
大阪商船會社姫路船會社等のもの二三隻は毎日必らず寄港し其他  
和船の回漕は大抵舊時に異なることなく住民殆んど舟運の爲めに生  
計を立てるの姿なれども鉄道敷設おのの影響を蒙りて其業漸次不景  
氣と成り市街は近年益々衰運に傾くを免かれず當地の旅店は本町の

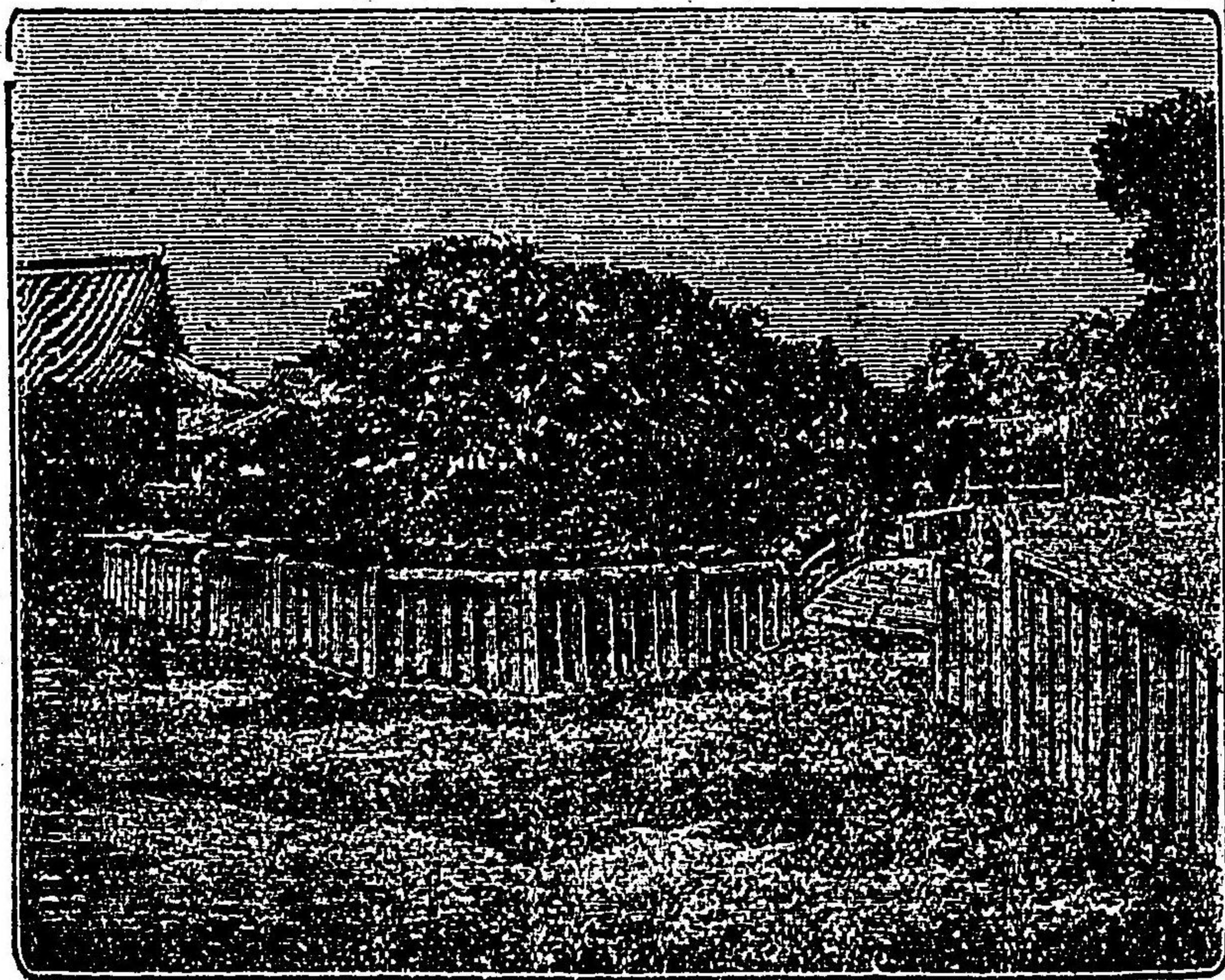
志方屋を第一とす  
高砂神社 高砂町海岸の方にあり素盞烏命と稻田姫大日貴命と合  
せて三座の神を祀る社内にある相生の松は高砂の松とて世に名高く  
尾上にあるものよりは枝幹尙能く繁生し一層の美觀あり初代の松は  
天正年中羽柴秀吉三木城攻の折三木の救援として越州より馳向へる  
小早川吉川の惣勢二万餘騎尾上高砂の邊に陣を取りかの松を伐て簞  
とす夫より枯朽ちて慶長九年領主池田輝政の沙汰として枯根の上に  
神祠を移せるよし社記に見へたり松の側に尉燒の祠ありその古像を  
藏す  
高砂城址 今の高砂神社は昔時高砂城の在りし所あり該城の由来  
を尋ぬるに其城主は梶原平三兵衛景行にして別所長治に属しこの高  
砂の手を守る時に中國の毛利輝元三木の別所に應援し吉川元春小早  
川隆景に二万餘騎を添へ三木城へ兵糧を送らんが爲め此浦二三里の  
間に在陣す羽柴秀吉高砂より三木までの間に關所を多く構へて通路  
を塞ぎ織田信忠は三万餘騎を以て三木城を圍む毛利梶原三木に通ず

別府の手枕松 高砂 高砂神社 高砂城址

加古川の記

ること能はず空しく此浦に月日を送れり然るに天正八年三木とにも  
 に當城も路も其後慶長五年池田輝政播磨備前淡路三國の主として此浦  
 原の城址を取立て家臣中村某を目代とし輝政の嫡男輝貞の代に至り  
 て又日置豊前守を此浦の守護職とせり羅郭石壁堅くして木戸を十一  
 口に定む其後元和年中本田忠政之を破却し午頭天王の社を造營すと  
 云へり今の高砂神社即ち是れあり  
 曾根村 是れ加古川驛より西南凡そ壹里半許にありて海濱に接し印  
 南郡役所の在る所あり戸數七百餘人口三千二百人餘印南郡中にては  
 尤も繁昌の村落とす此村より以西の海濱には製鹽の業盛んにして即  
 ち當地に十州鹽田組合上灘目支部を設けり上灘目との曾根大盤西濱  
 的形木場白濱吉美新在家の八濱をいひ其地印南郡東垣東の三郡に亘  
 りて鹽田反別四百七十丁に及ぶと云ふ  
 曾根天満宮 曾根村にあり菅公の靈と併せて天穗日命猿田彦命  
 とを祭りこの村の氏神とす延喜元年菅公築紫へ左遷のとき御船を伊  
 保の湊今の伊保崎村にて昔は大船の泊ありしと云へりに寄せ社より

加古川の記



一丁許西なる榎笠の岡に登  
 りて四方の景色を眺望あり  
 しゆゑに此宮を榎笠の天神  
 とも稱せり天正六年豊臣秀  
 吉の再營に係るといふ境内  
 攝社等多し本宮に天穗日命  
 を祀るは菅家の祖神をれば  
 あるべし  
 曾根の松 夫の播磨名所  
 の一として世に聞へたる名木  
 は天満宮の正門を入りて其  
 右の方にあり此樹の由来と  
 て言傳ふるものを聞くに菅  
 公休息の砌小松の苗を此所  
 に栽て我に罪あくば榮ゆよ

と誓言ありしが果して年と共に繁茂し天正の頃はよく蔓りて樹の周囲一丈八尺に及びたり然るに夫の秀吉三木征伐の乱に社頭兵燹に罹りて爲めに枝葉を損後一旦繁生せしかど天明三年の春より長に當れる枝大に損傷し終に寛政十年全枯果てめ茲に不思議あるは天明元年の春老樹の未だ枯れざる時其樹の下に自から寶生出來り生長最も速かにして今日まで百七年の星霜を閱し樹の大さ三圍に餘り高さは凡そ三丈許其枝葉伸の方より良の方へ世間西東十七間に茂合へり播磨名所は松を主とせるが中にも殊に曾根の松を以て秀群とあすべし老樹の幹は側に一舎を作りて齋祀れり

之を横にしたるにて四方三間半棟二丈六尺屋根は西手に傾き拜する人は其底に面す土臺と屋根との間は四方ともに切かけて狭く上に成りたる所には自から土留まりて松を生ず寶殿の周囲の鑿りて窪きがゆるに自から水溜り一見すれば宛あがら水面に浮ぶが如し傳言ふ其古大已貴命少名毘古の二神此所にありて一夜の中に石の御殿を造らんとし給へるに未だ事終らずして夜明に及びしかば其儘打置き給へるありと兎に角其年代の甚だ古く意匠の甚だ奇あるは好古家の歎賞する所あるべし萬葉集に生石村生真人の詠とて「おはあむちすくちひこそこのいましけん静の岩屋は幾世経ぬらん」といへる歌あり寶殿を一に静ヶ窟と稱するはこの歌を證とせしものと見たり此邊の山は一体石材多く昔より今に至りて穿鑿尙は絶えず世に龍山石と稱するは即ち是れにて其質粗弱かれども溝川の石垣又は石壘の類には適當し細長く切りて麓の小川より海船に積み四方に出すこと夥多し

◎檜笠山 ◎石寶殿 ◎觀瀟處

加古川の記

に海を望み風光最も明媚あり石の寶殿に來れる旅客は必らず登臨の  
勢を厭ふべからず又此邊の山には櫻樹多く花時の眺め殊に美事なり  
以上案内し來れる諸名勝のうち曾根の天神石の寶殿等は加古川驛よ  
りは寧ろ阿彌陀驛の方その距離近けれども遊覽の順序より云へば高  
砂より直ちに曾根に到り右の寶殿を見て阿彌陀驛に出づるを便利と  
すべければ斯くは續けて記せるなり旅客惑ひ給ふこと勿れ前記の如  
く石の寶殿一見の上は直ちに阿彌陀驛に出づるが捷徑あれば尙ほ途  
上見物の爲め再び加古川驛に立戻りて乗車するとせば生石村より同  
驛までは遠くも壹里半乃至二里には過ぎざるべし  
加古川驛の列車は加古川町を左にして直ちに加古川に達す此所架橋  
の長さは凡そ二百間にして其下手に國道筋の橋あり  
加古川 是れを播磨第一の大河にして源を丹波國氷上多紀の二郡  
及び播州多可郡に發し同郡を始め加東加西美美の諸郡に於て九條の  
支流を合せ加古川町の西手にて更に二流とあり本流は高砂港に支流  
は荒井村に至りて海に注ぐ此川筋にては鮎の漁獲多く加古川驛より

七十

阿彌陀驛

川に沿ひて溯ること七里加東郡龍野に於ける鮎漁の如きは特に著名  
にして五六月の交には旅客の遊覽に赴くもの夥からず加古川以西  
は即ち印南郡に属し北手は大小山脈の起伏するを見れば南方は概  
ね平坦にして幾頃の青田を隔て遙かに伊保崎曾根の海濱を望むべし  
其うち鉄道線路を距ること甚だ遠からざる所にて石質の一小山脈を  
見るは是れ赤ん夫の生石山にして旅客は果して車中よりその半腹に  
石の寶殿を祀れる生石神社の社頭を見認むるからん此邊にては國道  
の位置また右手と成り生石村へ至る小徑の入口に石の寶殿道と記せ  
る小石標あり國道を往く人はこの道より入て同所に到るを宜しとす  
馳て列車の留まる所は阿彌陀驛あり

阿彌陀驛

阿彌陀驛は播磨國印南郡阿彌陀村にありて山陽鉄道第八次の停車場  
にして昔は北原といひしを文永十年近傍の時光寺に阿彌陀の像を移  
し祀りしより旅人結縁の爲めとて今の名に改めたりとぞ神戸在留外

◎加古川

七十一

阿彌陀驛

國人が西方に於ける遊歩區域は即ち此村を以て限りとし特別旅行券所持の者に非ざれば是より以西に往くことを得ず當驛に定むるところの人力車賃は左の如し

會	根	石の寶殿	金七錢
高	砂	尾	金拾三錢
御	着	上	金拾三錢
			金三錢

時光寺 阿彌陀驛の南にある一寺を遍照山時光寺と稱す人皇八十  
七代後嵯峨院の勅願所にして本尊阿彌陀如來開基は時光上人あり上  
人の俗姓は多田滿仲九代の孫源賴經にして天福元年發心して時光坊  
と號し漸く高德と成るに及んで感徳の阿彌陀を祀り建長元年會根天  
神の西に精舎を建て後文永十年に至りて今の時光寺に移せり  
旅客は又阿彌陀驛を發して西に向ふに忽ち北に當りて突元たる石山  
の聳ゆるを見るべし之を高御位山と稱す  
高御位山 山上に祠あり是れ石の寶殿に祭るところの一の高御位  
明神を祀るものにして全山殆んど石より成り一の門二の門かん丸

阿彌陀驛

を稱し曲折峽をとして大古神座の遺跡今尚は存すとかや  
列車は進みて天川加西郡王子村に發し印南郡曾根村に至りて海に注ぐ  
を越ゆるに右手街道に沿ふて人家多き一町村あり此所は即ち  
御着村にて以前は御着と稱し人馬を加古の驛に繼で茲に到りし  
ものあり御着の名稱に付ての數説ありて昔花山法皇書寫山御幸の時  
此所に御滞留ありしに依るともいひ又後醍醐天皇還幸の時御着場  
ありともいへり村中に御着古城の遺跡あり村上源氏守野家の末葉に  
て大永の頃姫路の城を守りし小寺加賀守則職の舍弟同藤兵衛職職の  
居城ありしとぞ  
牛堂山國分寺 と稱するは古來播州有名の大寺にして御着村の  
北國分寺村にあり人皇四十五代聖武天皇十四年天平詔して國毎に國  
分寺を建るとある即ち當山は其一あり寺記に據るに此寺南大門より  
奥院までの間南北二里餘東院西院の間東西六十余丁なり南大門は本  
堂より二十丁下の三野の二階堂といふ是れあり本尊藥師如來長廻廟  
あり奥院は八重島の長谷にて本尊觀音本院阿彌陀大日山の物は是れな

◎時光寺 ◎高御位山 ◎御着村 ◎牛堂山國分寺



阿彌陀拜

り西院の市部にありて本尊薬師如来あり本堂本尊の座像丈六の薬師  
佛なり釋迦阿彌陀十一面大威徳日月二天十二神將又寺内に七佛の薬  
師あり云々昔は斯る大寺にて炎上の後にも造営あり年中行事等相續  
せしが別所等の乱に兵燹に罹り其後一字を建て即ち今に及べるも  
のなり地面に大礎の跡残れる所甚だ多し又當寺を牛堂山と號くるは  
其造營の時寺の東の火山といへるより靈牛顯はれ大なる材木をも  
皆この牛一匹にて運びしよりの名あるとし寺記に見たり堂内に牛  
の像ありて幼童此下をくれば諸疫を除くと言傳ふ又かの靈牛を葬  
りし所とて當寺より四丁斗北の田中に牛塚と稱する小丘あり  
前記の天川は印南飾東兩郡の境を流れ御着村は即ち飾東郡の始め  
り去れば列車は飾東郡に入りて御着村國分寺村等を右手に看つゝ走  
るに間もあく一の大河に達す是れを夫の加古川につゞきて播州に關  
ぬたる市川の流と知るべし

姫路

街を夾み本流は麻生山の麓を過ぎて阿成村の南に注ぐ川幅廣きは百  
八十間に及ぶ所もあり支流は御碓川又ハ妹脊川船場川とも稱し姫路  
市街の西部を貫きて飾磨津より海に入る  
列車の市川橋を渡るとき向ふに巍然として天主閣の聳ゆるを見るは  
是れ間はでも著き舊姫路鎮城にして旅客は之を仰ぎ望みつゝあるう  
ち聴て橋を越へ列車の留まる所之れを姫路驛とす

姫路驛

姫路驛は播磨國飾東郡姫路市街の南裁判所の裏手にありて山陽鐵道  
第九次の停車場にして神戸停車場より凡三十五哩神戸元標を距るこ  
と十五里あり驛前の新道を真直にゆけば直養へ出で右手の道を行け  
ば北條口又は京口へ出づべし當驛に定むる所の人力車賃金は凡そ左  
の如くなり

- 舊城内陸軍練兵所 一人乗 金四 錢
- 船場本徳寺 全四 錢
- 船場薬師山 金六 錢
- 龜山本徳寺 全六 錢

市川

飾磨津 全十錢 松原八幡宮 全十一錢  
 白國梅林 全七錢 増位山下 全六錢  
 書寫山下 全十五錢 鹽田村温泉 全二十五錢

今や我が旅客は神戸より十五里の道程を経て播州第一の都邑に着しぬ勿々車を下りて先づ市街の模様より海濱又は山邊に於ける近傍の名所を探問せざるべからずいざ來札案内者に隨て來れ

姫路の記

姫路市 酒井氏十五万石の城下にして山陰山陽の要衝に當り有名  
 の都邑あり其市街は從來九十六ヶ町より成立ちたるを明治廿二年四月より市制の施行あるに付き近傍より更に四ヶ町村を加へ俗に船場内町神谷野里の四大部に分ち凡て百ヶ町村と成れり

姫路の士族 姫路市街の戸數は凡て七千餘戸人口は二万六千餘人なり藩政の頃は士族の數三千戸に及び外城に大名町櫻町小櫻町清水町案内社桐の馬場等有名ある士族町のありしが是等は孰れも陸軍

練兵場又は射的場等とありて現在士族の住所は五軒邸北條口下寺町裏を主とし五郎右衛門邸同心町坊主町鷹匠町増位町景福寺前栢山伏小姓町十二所前光源寺前直養等の各所に散在し其數一千餘戸に過ぎずして前時に比すれば其減少實に驚く可し而して此減少は士族の困迫に基くものありと雖も他の都市例へば神戸の如き又は近傍村落へ其居を轉せし者も亦寡あからずと云ふ

姫路の市街

姫路市人の職業は商業凡そ總体の六分を占め工業

一分、勞力二分、他の一分は雜種にして農業を執る者亦此中にあり而して市街商業の中心は城外第二面に當れる國道筋に在りて即ち東の方神谷町より國府寺町一丁町大黒町東魚町平野町元盤町豎町二階町俵町福中町を経て西の方船場町に達するの線路なるが就中福中町を以て盛んなりとし巨賈富商多く茲にあり之に次ぐは俵町豎町二階町にして一般に商業はこの國道線路に依ると他に依ると著しき異動を見らるものと知るべく諸會社詰問屋等は大抵此線路中に於て營業せり之に續きては第三面の線路即ち茶町古二階町吳服町惠美酒町西魚町及

姫路の記

第一面の本町、綿町、阪元町等を推すべきも其の商業を営むものは半數にして工業又は勞力に頼るものか但しは料理茶屋、惠美酒、西魚町は姫路の花柳境さりの類他の一半を占めたり第四面の和泉町、伽屋町、大工町、紺屋町、西塩町第五面の龜井町、新身町、白銀町等は最も下等の町々にして勞役者八分を占め他の二分は小商人と雜種業者なり又船場、神谷、野里の三分は孰れも郡村に接近せるを以て可なり商業繁昌されども多くは鹽物、干物、飲食店の類にして之を内町に列せしむるものとせば第四五面線路の上にあるものと謂て可ならん乎

諸官衙學校及び商社 姫路市中にある諸官衙及び學校は

- 姫路市役所 船場龍野町六丁目
- 元結町外九十五ヶ町戸長役場 同 上
- 姫路地方及治安裁判所 直 後 城 内
- 姫路監獄署 今宿村 京 口
- 姫路郵便局 中二階町 南 町
- 兵庫縣尋常中學校 京 口 東二階町
- 姫路城東尋常小學校 全 上
- 姫路城北尋常小學校 野 里 福中町
- 陸軍第八旅團 同 上
- 姫路警察署 京 口
- 縣立姫路病院 南 町
- 郵便電信局 東二階町
- 姫路高等小學校 全 上
- 姫路城南尋常小學校 福中町

姫路の記

また商社銀行結社等の重なるものを擧げんに

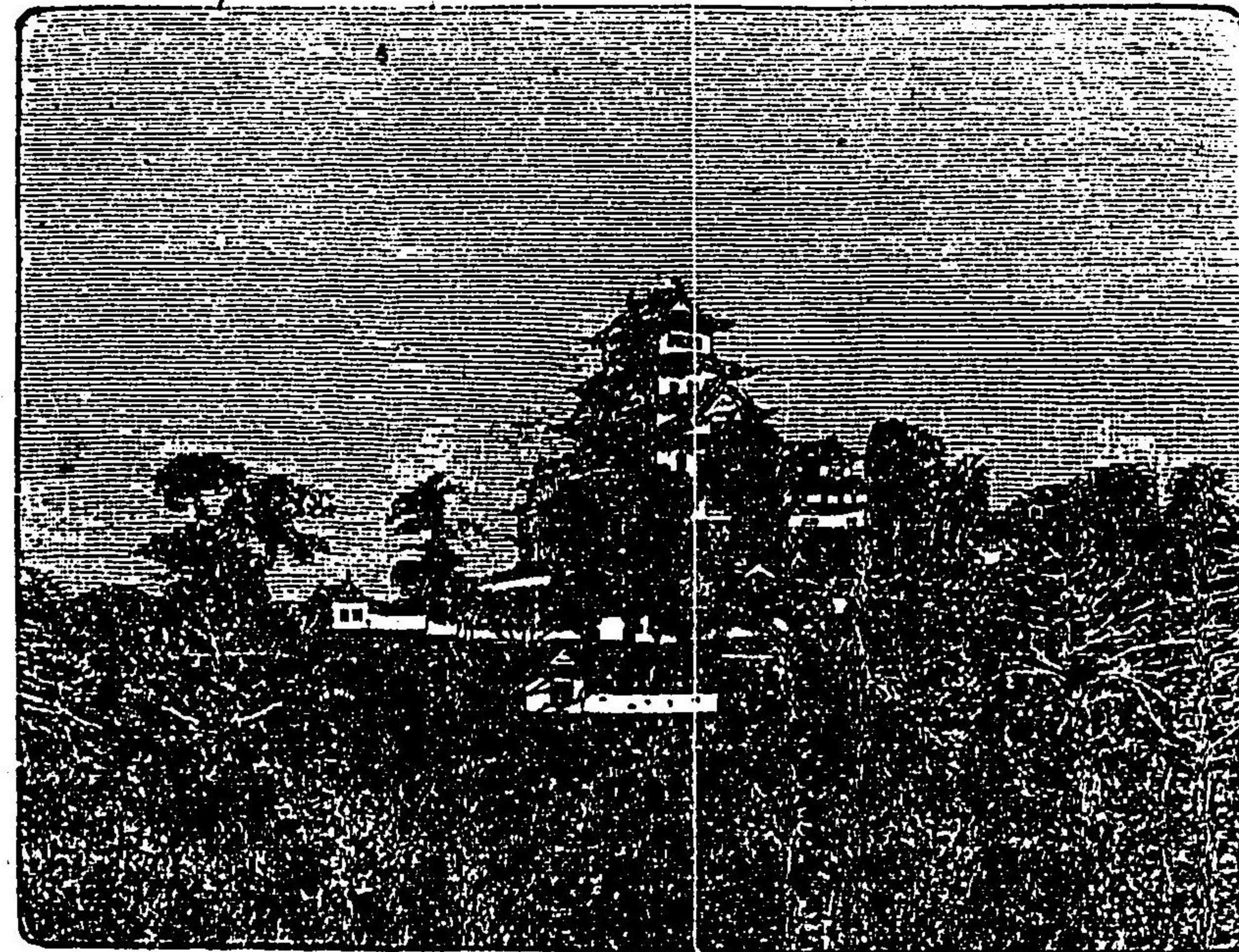
- 姫路紡織會社 八代村
- 姫路汽船會社 後 町
- 矢内吳服商社 福中町
- 木綿商社 本 町
- 兒島精米所 野里健町
- 姫路私立銀行 後 町
- 姫路俱樂部 忍 町
- 播磨俱樂部 下白銀町
- 播磨時計會社 全 上
- 陶器製造永世社 船場相生町
- 姫路織物會社 綿 町
- 今井精米所 材木町
- 第三十八國立銀行 本 町
- 姫路新報社 東二階町
- 播磨俱樂部 西吳服町

物産 當地に於ける物産の著名あるは革細工、野里の鑄物、晒木、綿陶器、高砂染等にして是等は昔時の如く隆盛ならずと雖も近頃に至り各その同業組合規約を設け改良製作に力を用ひんとする趣あれば漸次いづれも好結果を見るよしあるべし但し右諸品の内革細工は福中町の革細工店、中二階町の小野商店、鑄物の野里大野町の尾上久平、木綿は俵町の馬場幸二郎、吳服町の松野猪三郎、本町の木綿商社、陶器の船場下片町の永世社、高砂染は紺屋町の相生屋等を以て其の販賣店の最たるものと爲す

姫路の記

旅店料理屋貸坐敷 當地旅店の重立ちたるは福中町の米瀬か  
 ちごこんしよう綱干屋儀町の山田屋京口の中井屋すゐたにや本町の  
 藤井橋元新町の龍萬大黒町の化蝶亭野里のふくろや等なり其中壯大  
 なるは米瀬すゐたにや中井屋等にして閑静に清潔あるは龍萬とす藤  
 井化蝶亭も閑静なれど壯麗を欠けり宿泊料は大抵二拾錢以上三拾五  
 錢位あり又料理茶屋は西魚町の井上樓旅店兼業丸萬樓を最とし之に  
 次ぐは同町の福島樓橋本新町の龍萬樓旅店にして料理屋とも兼ぬ等  
 あり西魚町には遊妓の檢番あり又遊廓は野里梅ヶ坪に在りて貸坐敷  
 三十餘軒その中いろは樓大黒樓西川樓の三軒は稍々大あるものなり  
 姫路城 鐵道の停車場を出で先づ旅容の目を驚かす者は正面に  
 巍然として屹立する姫路城の五層閣なり城郭は總て塗るに白堊を以  
 てし世に白鷺城と名づく又一説に白鷺城の稱は城内の林樹に白鷺の  
 群生せしことあるより起りしとも云へり此城今は陸軍省の所轄に属  
 し郭内に歩兵第八旅團の兵營ありて特別の許可を得るに非ざれば自  
 由に登臨すること能はざれども北には増位廣降書寫の諸山相連あり

姫路の記



東には市川の流蛇々として長  
 蛇の如く西は飾西郡の野を望  
 み南は飾磨津より海上の島々  
 沿岸の浦々に至るまで悉く一  
 眸の中に集まる閣上四方の眺  
 望は雨時頗る奇に晴天固より  
 好し今ま古記に據りて此城の  
 沿革を尋ぬるに古城主は村上  
 帝第七の皇子具平親王十五世  
 の苗裔赤松播磨守則村圓心と  
 號す二男筑前守貞範貞世と號  
 すにして初め後醍醐天皇に従  
 ひ營館を姫山城の立つ所の小  
 山を即ち姫山といふに構むて  
 爰に居す是れ最初の主也其後

建武の頃より足利家に属し一族小寺相模守頼秀目代として當城を守  
護す頼秀の子小寺藤兵衛尉景治同豊後守景重嘉吉元年に赤松滿祐に  
附隨し木山城に籠りて武功を顯はし終に討死す此時赤松家斷滅し當  
國は山名宗全が所領と成る應仁元年赤松正則當城を奪取し即ち爰に  
移る文明元年置鹽山に新城を築きて移轉し此城は舊主の子孫たる小  
寺伊勢守豐職に守らしむ天正五年織田信長平天下の時に及んで播磨  
國を羽柴秀吉に賜ふ秀吉三木の別所を亡ぼして後此城に移り同八年  
に英賀城を落し同九年に毛利の出城因州鳥取城を陥れこの姫山に三  
重の天守を築く後に太閤丸といふ同十年六月二日明智光秀弑逆の變  
あり依て當城は羽柴小市郎秀長に護らしめ上洛して光秀を滅し同十  
三年天下一統の後秀長は大和に移り當城は木下家定守護せり慶長五  
年池田輝政に當國を賜はり播磨淡三州の大守たり姫山の麓に三村の  
り所謂宿村中村國府寺村是れあり輝政入府の後此三村を都て姫地と  
號す(後姫路に改む)即ち當城を再營して舊に復し後慶長十三年始めて  
五重の天守を築き九ヶ年にして成就すといふ當時城外を七十八町に

區分し東西三十六丁五十間余東は橋本町西は龍野町六丁目南北三十  
三丁二十間余南は飾磨津門北は威徳寺町と定まり其後交代連綿の居  
城とありて市店軒を並べ子民街に歌ふ(播磨古成記に據る)降て徳川氏  
の世に至り酒井家の所領と成り遂に維新改革の時に及びしものあり  
但し當城山と姫山と稱するは西に雄山あり之に對しての名ありとい  
ひ又一説には白國神社の祭神國方姫の茲に鎮坐ありしが故とも云へ  
射楯兵主神社 姫路城の東南に當社あり通稱惣社といひ舊名を  
惣社伊和明神と呼べり祭神は東殿五十猛命西殿大已貴命中殿九所神  
あり社傳の記する所に據れば人皇四十七代淡路履帝天平寶字七年當  
國の一宮(安栗郡伊和社)に軍戰勝利を祈誓せし時大已貴命水尾山に降  
臨わり正曆二年六月朔日正一位を授け奉り全年神託ありて九所の靈  
神を合せ祀る其後養和元年正月廿三日草上郷射楯兵主神社二座の内  
五十猛命を併せ祭り同年六月十一日末社を封宏同十一月十五日延喜  
式神名帳播磨國五十座の神(大七座小四十三座)を大已貴命の左右に併

姫路の記

世願の銘に軍八頭正一位總社伊和大明神と書す是より總社の名は興  
れり當社例祭は陰曆十一月十五日にして臨時祭は廿一年目に執行し  
此大祭には宍粟郡の白倉山高尾山華崎山の三假山を絹もて飾り作る  
（今は蚊帳を用也）又陰曆七月十三日より十五日まで神踊あり之を修羅  
踊と稱すいづれも古式あり社内に影向松血池清水等の名跡あり  
刑部神社 惣社の門を出で南の方元盤町に刑部神社といふあり昔  
の城主池田輝政の時より城内本丸に祀りありしが維新の後に及んで  
今の所に移せり祭神は輝政の産靈神美濃刑部村大巳貴命ありと  
船場本徳寺 當地に有名なる大寺にして地内町にあり東本願寺  
の別院あり元和三年教如上人の開基本尊阿彌陀如來新鸞上人の畫像  
七高僧聖徳太子の御影を安置す寺内に雅致ある一大松樹あり  
景福寺 船場にある一禪寺にして舊藩主酒井氏代々の菩提所なり  
其近傍の士族町を景福寺前といふ  
圓光寺 五軒邸にあり寺内に有名なる一大櫻樹ありて周圍八尺許  
枝四方に垂れ開花の候は頗る美觀にして市人の來り賞する者多し

姫路の記

藥師山 船場本徳寺の西に當る一個の丘陵にして山上に明治紀念  
碑を設く眺望甚だ好く市人遊散の場所あり  
雄山 は古名を長彦山といひ姫山の西にある小山あり両山の間を  
流るゝ川は即ち市川の支流にして俗に妹香川といふは姫山雄山の名  
に因みての稱なるべし  
三左衛門渠 と稱するもの姫路市街の南北條村にあり南北長サ  
二百間余幅廿四五間余の大池にして昔し池田三左衛門が飾磨津と姫  
路の間に舟運を通ずるの目的を以て開鑿せるものに係る両堤に松林  
あり林中に羽林塚とて存するものは即ち三左衛門の墓なりと云ふ  
旅客は以上の所記に従ひ略ぼ姫路市内の巡覽を了りし上は更にその  
市外へ歩を進め南は飾磨津の海濱より北は廣峰増位書寫の山々小至  
るまで餘暇の許さん限り勉めて遊覽に出懸くるこそ善けれ案内者の  
足は屈竟あり山とも謂はず海とも謂はず敢て奔走と説明の勞を辭せ  
ぬどかし  
去らば是れより姫路市街を離れて先づ海濱の勝を尋ねん

龜山本徳寺 姫路より飾磨津に至るの途中飾磨町の内宇龜山町にあり親鸞上人より第八代蓮如上人の開基にして第九代實如上人の男實玄上人を以て住職とせり故に本願寺連枝を以て代々爰に止職せしめ西本願寺の別院として最も由緒ある大寺あり

飾磨津 姫路を距ること凡そ壹里許の南に在りて大抵町續きあり其名は古より世に聞は良港といふよ非ざるも姫路市街を控ゆるを以て港内常に商船輻輳せり此地は町村制施行の時より十一町二ヶ村を以て飾磨町と稱せられ戸數凡そ四百人口一千五百人許ありて住民の概ね漁業を勉めとす町内に天満宮あり濱の天神と名づく又御幸橋あり白河法皇の御幸所ありと云へり又宇宮町に姫路精米會社の工場あり壯大なる煉瓦造あり料理店旅店等も相應のものなきに非ず港内繁榮にして近海には家島丹鹿島松島鞍掛島坊勢島等ありて海濱の眺望甚だよろしく舟遊魚釣貝拾ひなどの遊び最も妙なり此地に一泊して近傍諸所を見物し更に小船を雇ひて島巡りをすすも一興あるべし飾磨は古書に鹿間とも書き昔よりの湊にて古歌にも多く讀めり又飾磨

の市とて魚酒雜貨などを商ふ市場の開け居りて是れまた古歌多しまた飾磨の搗染とて昔より歌によみ名高き染物のありたるよし亦れども其染法今精しくは傳はらず按ずるに唯幾度も藍につけて白にて搗き濃く染めあしたるものあらんか濃き藍染のことは左の歌にても知るべし

通經 我こひはあゐそめてこそまさりけれしかまのかちの色ならねども

倭成 新緑古 たのますは飾磨のかちの色を見よあゐそめてこそ深くなりけれ

信定 新六侍 播磨なるしかまに作る藍畠いろあかちの濃染せんとは

よみ人不知 名寄 しかまづに鳴のこゑこそ聞かなれ伊保のとまりに鶴やなくらん

倭成 千載 こひをのみ飾廣の市に立民のたねぬ思ひに身をやかへてん

海邊の諸名所 飾磨津より東の方妻鹿の渡(市川)の下流を渡り其

以東の海邊には會松原戀の濱八幡宮木場明神八家の地藏など名所甚

姫路の記

少かからず會松原にある八幡神社は有名の社にして境内樹木多  
く砂白松青望海の景色殊に宜し散步運動には最も妙なるの地あり此  
地古歌多けれども畧す  
麻生山 市川の海に注ぐ所より少し溯りその東岸奥山村にあり一  
に播磨富士と稱するものは是れあり山下に麻生神社とて大己貴命を祭  
るものあり  
又手海濱の遊覧は先づ此位を以て足れりとし是より更に城北の山邊  
に向て歩を轉ずることとせん  
白國村梅林 春初の候姫路に遊ぶものは必らず白國村の梅林に  
杖を曳かざるべからず同村は姫路市街野里の北端より北に往くこと  
凡そ十丁許にあり姫路停車場よりは凡そ三十丁の距離あるべし山に  
據りて幾千株の梅を栽じ花の種類は紅白色單重瓣相交りて三月開花  
の節には香雲空を掩ひ異芬林に満ち夫の攝州荊原郡の岡本村と併び  
稱せらるゝ觀梅の勝地あり梅林の傍に白國大明神の祠あり開化天皇  
第一の姫宮國方姫を祭るといふ

姫路の記

石室 白國村に一個の石室あり深サ八間口二間許是れ古人の石棺  
ありと云へり村の一名を厩櫃谷と稱するは或は之れに因縁するもの  
あらん乎  
廣峰山 白國梅林の勝を謂ふものは廣峰山の景と併せて之を賞す  
るあり故に一たび梅林に杖を曳かば又必らず此山に登ることを要す  
否らずんば未だ以て觀梅の興を尽し得たるものといふべからざる可  
し梅林の傍に登山道あり頂上までは凡そ十八丁許ありて一丁を登る  
ごとに景色亦一變し遠近河海の眺望實に奇絶妙絶あり頂上に廣峰神  
社あり素盞鳥尊を祭る當社の鎮座は聖武天皇天平五年三月十八日吉  
備大臣唐土より歸朝の時此地に於て素盞鳥尊の神託を蒙り京師に還  
て上奏し勅を奉て同六年に神社を造營す其後圓融院天祿三年西峰  
より廣峰に遷し其後貞觀十一年山城國に移す京都祇園の社即ち是れ  
なり又本社殿の後面に九部の神穴とて九ツの穴あり其上に支干の給  
をかけり是れ如何なる用意のものにや判然せざれと參詣者ハ之を拜  
し穴より賽錢を投すと云ふ祭禮は陰曆三月三日同八日にして御神樂

◎麻生山 ◎白國村梅林 ◎石室 ◎廣峰山



競馬御田植遊子等の古式あり之を五穀祭と稱す當社は作物の神として農人の信仰殊に厚く昔より近國の人民伊勢參宮の downward には必らず爰に參詣するの例なりとかや社の近傍には社家數多ありて自から一村を成せり又境内に酒を賣る小店もあり

**増位山隨願寺** 廣峰山の山つゝきにして白國村の奥の方に在り有名ある古刹なり當山は今より千六百餘年前聖德太子の開基に係り太子自から其像を巖に刻み給ひしとて今に太子谷の名残り其後聖武天皇天平七年僧正行基朝廷に奏して此寺を建立し仁明天皇の代に至て増位山隨願寺の勅號を賜ふ天正年中別所長治の兵火に罹り堂舎灰燼と成りて衆僧僅かに本尊及び行基の像等を奉きて姫路の西に遷れ同十三年に及んで秀吉に願ひ寺院を舊地に修補し即ち今に至れる

ものさり

**風羅堂養塚** 是れ孰れも芭蕉翁の遺跡にして増位山の麓にあり翁の畫影及び其旅具蓑笠杖袈裟旅硯旅篋等を藏す養塚の側に姫路侯の句碑を建てたり曰く

**書寫山** ばせを葉や風にやれても名は幾世に傳へたるは飾西郡の播州の山嶽其數多しと雖も就中世に聞ゆるは山上には杉樹多し書寫山にして姫路を距ること西北凡そ壹里許にあり山上には杉樹多し中にも一老樹の四圍許あるものありて蔚然空に聳ゆ俗に書寫山の一本杉と稱せり頂上に一伽藍ありて圓教寺といふ西國二十七番の札所に於て一條天皇永延二年性空上人の開く所本尊は如意輪觀世音菩薩の像安鎮の作なり寛和二年七月花山法皇上人の徳を感てこの山に行幸ありまた其後長保四年三月にも臨幸ありて上人の行狀を記し且つ其像を寫させ持歸らる後醍醐天皇隱岐國より還幸の折にも當山に行幸して先年の宿願を果され諸堂巡禮ありたりとぞ又山麓に王院の馬場車寄女人堂引雲岡紫雲堂などの古跡あり其外ゑぼし岩辨慶學問所の硯水池如意輪の瀧等山中名所甚だ多し

**夢前川** 其一名を青山川といふ美栗郡の山中より流れて書寫山の西を廻り青山の東を経て英加村より海に入る此川鮎を産すること夥多し

○増位山隨願寺 ○風羅堂養塚 ○書寫山



網 干 驛

網干港 網干とは新在家。余子濱。興の濱。濱田。大江島の五村を總稱したる名にして戸數千五百あり住民の職業は一樣あらざれども概して廻漕を主とするものゝ如く其他漁業製鹽を營むもの若干あり然れども其港頭は揖保川の河口にして年々填塞し舟楫の利次第に減少すれども其上流には龍野。山崎等の名邑ありて其物産を輸出し需用品を輸入するを以て播州海港著名なるものゝ一なり

林松寺の松 林松寺は網干興の濱にあり境内の古松一株繁茂して一奇觀をなす其形恰も曾根の松に似たり

宇須幾津八幡宮 網干驛を南に距る拾町にして松林あり林中に宇須幾津八幡宮の祠あり祭神は應仁天皇玉依媛神功皇后の三座にして當那の大社かれは毎年舊曆八月十五日の祭禮には近傍の士女群集し其雜沓班鳩寺の太子祭と相伯仲す現今の社殿は永正年中苦瓜助五郎元道あるものゝ再營ありと

天徳山竜門寺 是網干濱田村にある禪寺にして播磨の一大伽藍

網 干 驛

あり開基は盤珪和尚にして西國禪宗の本山と稱せられ其盛時にありては結衆千餘人ありしとぞ四周の松樹依然として翠を垂れ是れ亦一個の幽境あり殊に同寺は阿波蜂須賀家肥前大村家の菩提所ありしを以て寄附の器具少からず多くは天下の珍器ありと云ふ

雞足寺の遺趾 峯相山雞足寺は西播第一の大伽藍にして其名古史に在り天正の頃は堂塔猶ほ莊麗にして寺院七八坊ありしが其後皆燒失せりと然れども今猶ほ伊勢村の山中に經塚を遺し石鞍村等に礎石の散在するを見れば其廣袤貳三里に跨りしものあらんか此地は山陽鉄道網干驛を距ると四五十町尙古家の一遊すべき遺蹟あり

刈谷の投石 網干港の西刈谷の沖合に沿岸三四町の間に岨々たる大巖石の縦横に散在するあり之を投石と云ふ此邊一体海水の眺望に富み且つ漁獵の地あれば近傍士女の遊山場として春暖の時節最も賑へり其由来を知ると能はざるも古人の歌に

いつの世にかあるもゑの投石と  
いひしとは今にあらはる

◎網干港の林松寺の松◎宇須幾津八幡宮◎天徳山竜門寺◎雞足寺の遺趾◎刈谷の投石 九十九

神のさちさはへあらしとみそあはし

海の投石八千矛の神

### 家島の群島

播磨灘の西北部陸地を距る三里若くは五里の海上

東西八里南北三里の間に數十の群島点綴す其状恰も陸奥の松島に似て風景の絶佳を以て稱せらるゝものは家島群島あり其一ツを家島と呼ぶ家島とは江灣の形状停泊に便あるを賞したる名ありとぞ家島一に御牧の浦と云ふ島中に家島神社あり延喜式神名帳によれば播磨大社二十四座の一あり

### 林田川

其一名を片吹川と云ふ源を宍粟郡西志溪より發し南流して南西に向ひ揖西郡に至り揖保川に會合す山陽鐵道西行の列車網干

驛を發して間もあく通過する鉄橋は則ち林田川鉄橋其長六十五間あり之を涉りて第二の鉄橋あり之を揖保川鉄橋とす其長百二十七間あり

### 揖保川

は其源を宍粟郡の山中より發し山崎町の東部を南流して漸く大河とあり宍粟川と稱し揖東郡に入り新宮の東を過きて揖西郡

## 龍

## 野

## 驛

に流れ龍野町の東南に於て鐵道を横きり林田川と相會し下流分水して揖東西兩郡の海に入る其流域十五里あり舟揖の通ずるは宍粟郡出石村より網干港に至る七里間にじて山崎新宮龍野は沿岸の名邑あり此川鮎を以て名あり世に龍野鮎と稱するものは是なり鐵道列車の揖保川鉄橋を渡るに際し北に當りて白壁の家屋の簇りたるを見るは龍野町あり而して此鉄橋を西に超へ列車の停車するは龍野驛なり

### 龍野驛

龍野驛は播磨國揖西郡正條村宇神戸にありて山陽鐵道第十一次の停車場なり龍野町を距ると五十町室津港を距ること貳里半あり

### 正條村

山陽道の一驛にして其名著しきも戸數百八十を有する寥寥たる宿驛あり警察分署村役場あり又履信教校とて佛教徒の設立に係り普通學を教授する學校あり

### 龍野町

は揖保川の西岸にある名邑にして脇坂淡路守五万石の舊城下あり戸數千五百あり土地の名産は醬油にして世に龍野醬油と稱

◎家島の群島 ◎林田川 ◎揖保川 ◎正條村 ◎龍野町

龍野驛

するものは是れちり龍野醬油の特長は其色淡くして其味甘きにあり之に次く物産は揖保川の鮎ちり其漁獲の盛あると其風味の香しき龍野鮎の出色さちり龍野町にある官署は揖西郡役所治安裁判所龍野警察署收税部出張所龍野町役所龍野郵便局等なり學校に高等尋常の両小學校あり高等小學校は舊城の本丸に新築したる洋風の校舍にして建築の莊麗を以て名わり殊に其位置は山腹にあるを以て遠く之を望めは巍然たる白堊の樓閣あり

聚遠亭

龍野町高等小學校の西に相對したる山腹に神祠あり龍野神社と云ふ舊藩主脇坂家の祖先を祭りたるものなり社殿の石階より北に入る少許にして聚遠亭あり脇坂氏の別業にして山水の風致に富み最も眺望に妙あり揖保川は長江一帯素練を揖穂の平野に敷き播磨灘の雲烟糶糊の間に一面の水鏡を開く蓋し聚遠亭の名ある所以歟境内に櫻の大樹あり花時の風致最も佳なり

室津

其一名を室の泊又は室の浦と稱し山陽鐵道龍野驛を南に距る二里半の所にある海港なり其港灣は東北西の三面岡陵を負ひ金崎

龍野驛

岬西南に向つて斗出し海水深く東北に灣入して停泊の便利安全あると播州各港の最たり左れば往時封建の世にありては四國中國九州の諸大名參勤交替の折着船乗船の場所ありしを以て島津細川等諸家の陣屋ありて播州の一繁華地なりしが王政維新の後は此地頗に衰頽し一時其盛あるや千三百戸以上の戸數を有したるも爾後漸く減少して今は僅かに四百戸に過ぎず然れども古來著名の海港なれば室津の名は古き諸書に散見せり万葉集に

室の浦のせとの崎ある鳴島の

いそこす波おぬれにけるかも

山のはにはてりせぬ夜の室の海に

あまはひよりといつる舟人

又藤原爲雅周防守とありて下向の時此地の風景を見て

曉入長松之洞 巖泉咽號嶺猿吟

夜泊極浦之波 青嵐吹號皓月白

室の明神 社は室津の明神山にあり正殿は加茂別雷太神宮あり正

◎聚遠亭 室津 ◎室の明神

龍野驛

殿の東に片岡社。太田社。貴布禰社。若宮杉尾社。河合社等あり。西に權堂二層樓あり。其他八幡宮。棚尾祠。岩本祠。橋本祠。梶田祠。白髭社。鐘樓等あり。て播磨の一大神社あり。遠く之を望めば。雜木繁茂の林中に社殿の散在するを認め。其風景盡くが如し。當社の世に著名あるは。小阜月の祭とて。當町の傾城數十人か二人づゝ二行に連り。錦の袴に紫の帽子を冠り。雌子ものとして。棹の歌と云へる歌を。諷ひながら。神輿の供奉を爲す。とにて其壯麗あると。京都の祇園會にも比すへきによると。然れども。王政維新以後之を行ふたると。さし當社に秘藏しある寶物は。平重衡の琵琶。狩野法眼之信の畫馬あり。

遊女の權輿

世に傳ふ傾城の始めは。室津ありと。其信偽未だ知るべからざるも。室の遊廓尾野町の記等に依れば。往時此津に花漆と云へる婦人あり。美にして。艶あり。能書にして。和歌を詠し。歌舞音曲の遊戯を業とす。是れ即ち遊女の始めなりと。元來當所の長あれば。室の君と云ひしと。あり。或ハ云ふ。室の君とは。青葛の長。大磯の長と云へる如きものに。當時の宿驛にある本陣の類あるべし。昔し其家主は。皆女にて。公卿。殿

那波驛

上人又は。諸大名の宿泊に。酒宴に侍へり。色香を以て。身を立くしか。後には。其家に。夥多の遊女を抱へ。置き。旅客一夜の友とせしものならんと云ふ。花漆の外。昔し此地の遊女にて。著名なるものは。宮城野友君。大柄杓杯。あり。其他。普賢菩薩化身の話し。われども。之を畧す。遊廓は。尾野町に。わりて。西尾。但馬屋。かんといへる。娼樓は。一時數百人の遊女を抱へ。其名を。海内に轟かしたりといへど。今は。則ち之れなし。

那波驛

那波驛は。播磨國赤穂郡陸村あり。て。山陽鐵道第十二次の停車場あり。驛を南に。距る五六町にして。一部。落あり。那波と云ふ。

那波港

は。室津。阪越の中間にある。一海港にして。海水遠く。陸地に侵入す。然れども。港内水淺く。岸遠くして。大船巨舶の停泊に。便からざれば。商業亦た。從て。盛からず。戸數僅か。六七十あるのみ。那波港の南に。突起したる。大嶺あり。鷹取嶺と云ふ。赤穂町への街道に。當たる。難所あり。其北麓に。阪越港あり。

○遊女の權輿 ○那波港

那波郡

坂越港 は那波港を距る一里にあり海港にして戸數三百あり室津と港口相對し陸地は山岳屏列して御崎岬港口に斗出し海水數仞泊船に便にして播州の良港なり灣内に一嶋あり生島と云ふ雜樹繁茂し古來嘗つて斧を入れたるとかし其風景の佳あるのみならず爲に風濤を防ぎ港内の安全を護る嶼中に一祀あり大酒明神の旅所あり

大酒明神 は市後の山腹にあり秦川勝の靈を祭りたるものにして坂越の産神なり

妙見寺 坂越の寶珠山妙見寺は元と大酒明神の別當なりしか王政維新神佛混合を禁するの際之と廢したり當時一の草菴を存するのみされども其盛時は十六坊ありて播州の巨刹ありしと境内に櫻樹あり備後三郎の墓地ありと云ふ此地亦た眺望の勝を以て稱せられる

赤穂町 坂越の西南一里に赤穂町あり元と加里屋と云ふ千種川の河口にある一市街にして森家の舊城下あり戸數壹千赤穂郡役所赤穂警察署等ありて赤穂郡第一の繁華地なり此地方多く食糶を製造し世に赤穂産と稱するもの則ち是れなり然れども地名の人戸に附矣するは

那波郡

製鹽にあらすして四十七士復讐の擧にあり大石良雄等の遺蹟猶ほ處々に存在せり其最も見るべきは蓋雲山華岳寺あり

華岳寺 は淺野家世々の菩提所にして四十七士の遺物最も多し皆寺に詣て、開帳を依頼すれば寺僧は之を寺内の西部にある義士木像堂に誘ひ木像を指して義士の畧傳を講ず其雄辨滔々奔水の如し聞くもの感せざるはなし堂を出て、之と相比ひたる門に入れば碑あり忠義塚と云ふ其文に曰く

忠義塚序

元祿十五年十二月十四日故内匠頭淺野長矩朝臣臣大石良雄等四十六人相與謀爲其君報讐夜襲殺吉良義英朝臣東身歸官官分拘各處踰年議成越二月四日有命遂賜自裁云今不具其事蓋候自祖考三世得君赤穂恩惠之洽巨民一体遺愛之深其事且五十年語一至此猶潸々然泣下近年 府臣某爲之營諸君墓於城北花嶽寺中刻石表焉民莫不悅今茲春三月遂重伐巨石立碑於墓道之東屬廉爲辭夫諸君之烈譬如日月之麗天万世罔隊列不假人言與彫刻然非此無以慰思焉則不有斯舉又

◎坂越港 ◎大酒明神 ◎妙見寺 ◎赤穂町 ◎華岳寺

將爲何誰也郡人不可辭謹爲之銘 (銘畧之)

寛永三年庚午三月十四日郡人奥藤利榮 松木善宣 柴原救長

奥藤利敬 田淵春元 柳田吉甫等建之

碑の後部に大石櫻大野柳とて二個の門扉を護るあり之を義士塚に詣つるの正門とす門に入りて正面に三個の石塔あり中央は淺野内匠頭長矩の墓にして其兩側の大石父子の墓なり之を中央にして周圍に立ちたるは義士四十五名の石塔なり石塔を拜し木像を禮し大石始め義士の手蹟等の摺物を購ふて千載の下英雄を吊するも一事なれども又之を土産として朋友に贈るも一興ならん

赤穂城は廢城にして天主閣城櫓悉く之を毀ち只四周の石垣と處々に老松を存するのみ然れども大石屋敷等の遺址ありて元祿の故事を追想せしむるもの少からず殊に大石屋敷には大石神社設立の嚆矢ありて其遺蹟を保存せんとするもの如し當城は備前岡山城主宇喜多直家の當郡を領せし時始て之を築き慶長五年池田輝政一統の後姫路より郡代を置き其後淺野永井森の三家之を領えて以て王政維新に至

那波驛

有羊驛

御崎明神 御崎は阪越の港口に斗出する岬頭にして其角東に向ひ金ヶ崎と相對峙す岬頭に神社あり伊和郡比賣神社と稱す世に之を御崎明神と云ふ此地前に播磨灘の群島を控へて東西に播磨の山海を眺め其風色の絶佳あると比類少し殊に盤田の景色は都會人士の想像に及ばざるものあり赤穂に遊ふもの必す曳杖をへき一勝地あり赤穂の見物を終りたるものは鷹取峠の舊路に飯るも興あければ更に道を通じ須世坂より山陽鉄道有年驛に出て東行の瀛車に乗れば有年驛と那波驛の間に在る岩山を切開きて鉄道を通したる鶴龜の開鑿を見るを得へし若し又備前地方に赴かんとするものあらば赤穂より西北に三里を距たる三石驛に出るも可きれども案内者は先づ有年驛に誘ふへし赤穂町を出て二里にして山道に掛る須世坂と云ふ其阪路險ならざるにあらざるも人力車の往來自由されば鷹取山に勝る万々なり嶺を超へ國道に出づれば則ち有年停車場あり

有年驛

○赤穂城 ○御崎明神



有年驛は播磨國赤穂郡横尾村にありて姫路驛を距る十七哩山陽鉄道第十三次の停車場なり西に千種川を隔て、有年宿あり千種川を渡らず流に沿て廻ること五十町にして上郡あり俱に當地方の繁華ある部落あり

有年宿 は山陽道の一驛にして戸數二百あり封建の世ありては本陣等の設けありしも諸大名參勤交替の廢絶と共に土地の賑ひを減し今は只寥寥たる一小村あり

上郡 は赤穂郡の北端にある一部落にして戸數三百あり住民盡く商業を營み近傍村落の需要品を供給す且つ因伯街道として千種川の沿岸にわれば往來交通自ら頻繁あり千種川に沿て廻ると十五六町にして渡船場あり河の東岸に當りて巍然一山の秀づるを見る之を白旗山とす

白旗山 は赤穂郡赤松村にあり峰巒嶮峭として蒼樹鬱蒼たり西麓は千種川の水環流して巖巖屏立す實に天險の地あり天永年中源季房此險によりて城を築き建武年中赤松圓心之に據りて南朝に叛し其名

有年驛

史上に歴々たり其人を知らんと欲するものは寶林寺を訪はざるべからず

寶林寺 白旗山の西麓千種川の東岸に一小村あり河原村と云ふ村中に一草菴あり金花山寶林寺と云ふ寺は圓心の別法禪師に飯順して建立する所あり圓心父子の像并に別法和尚の像其他赤松家の遺物あり

苔繩の古城 赤松則村圓心の其始め大塔宮腹良親王より朝敵退治の令旨を受け二千人の義兵を擧げ王事に勳勞し播磨を一掃して其威名を天下に耀したるは河原村と相比んだる苔繩村の苔繩城なり今猶は其遺趾に圓心の肖像あり

千種川に沿て更に遡れば久崎佐用平福等の宿驛ありて美作因幡に通すれども案内者は旅人の疲勞を恐れ再び有年驛に立戻り更に浪車にて千種川の鉄橋を渡らんとす  
千種川 其一名を赤穂川と云ふ其源を宍粟郡千種村より發し南流して佐用郡に入り上月を経て赤穂郡に流れ白旗山の西麓を繞回し上

◎有年宿 ◎上郡 ◎白旗山 ◎寶林寺 ◎苔繩の古城 ◎千種川 百七

那の下流にて鉄道を横ぎり有年宿にて國道を貫き加里屋の東に至り  
 二流とありて海に入る此川亦た鮎を以て名あり千種川の鉄橋は有年  
 驛の北二哩八十鎖の處にありて其長百六十五間半あり千種川を渡り  
 暫くして又橋あり安室川なり更に西に進み山腹を迂回し隧道に達す  
 是れを播磨備前の國界なる舟坂山の隧道と云ふ  
 舟坂山の隧道 舟坂山は赤穂郡舟坂村にあり東は播磨にして西  
 は備前あり元弘の其昔し兒島三郎高德が後醍醐天皇の隱岐國遷幸を  
 此地に要せんとして其目的を達せず空しく其衆を散せしは史を讀み  
 たるもの、能く知る所なり太平記に曰く延元の頃備前には田井飽浦  
 内藤頼宮松田福輪寺等のもの共石橋兵衛佐を大将として甲斐川三石  
 二ヶ所に城を構へて水陸の兩路を支へんとす蓋し三石は山陽第一の  
 天險なり云々と其天險の要害も今や六百間の隧道を貫き僅に瀛車三  
 四分時の間を以て安臥中に之を通行するを得文明の利器眞に驚く  
 へさか舟坂隧道の起工は明治廿二年六月にして其竣工は明治廿四  
 年一月あり其工費概算二十四万圓あり文明の利器亦た高價あるかな



隧道を出て、停車する所は則ち三石驛にして右に見下す人家は三石宿あり

三石驛

三石驛は備前國和氣郡三石宿にありて山陽鐵道第十四次の停車場なり當驛より岡山驛に至るの間を備前國とす備前地にありて第一に案内すへきと三石宿あり  
 三石宿 は山陽道の驛路にして戸數三百山間の一小部落なり土地に生ずる物産は蠟石にして種々の細工を爲し見る

へきもの少からず世に三石蠟石と稱するものは是れなり然れども三石の世に著名なるは此等の産物にあらすして其地の要害を占めたるにあり平家物語に倉光三郎妹尾を相具して備中の國に馳下り備前國三石の宿に止りたる夜妹尾を知りたる者ども酒を持せて來り集りて終夜酒盛しけるが倉光の勢三拾騎はかりをしよせておこしもたてず倉光三郎始として一々差し殺したり云々とあるは此地にも戦争ありしとは語りあり其後元弘建武の頃又應仁の間度々此地にも戦争ありしとは諸書に散見する所あり就中兒島高德か此地によりて後醍醐帝を奪はんとして其目的を達せざりしは兒童も熟知する所なり宿の東端に瀑布あり深谷の瀧と云ふ

深谷の瀧は國道より北に入る五六町の處にありて其高拾余丈之を二段に分ちて流る盛暑炎熱の頃一遊すべきの勝地あり

和氣の關三石村に和氣の關ありしとは古史に散見すれども今其位置を知ると難し土人の傳ふる所によれば播磨の國界にありしと山陽鐵道線は神戸を發してより多くは國道に沿ひ之を距る遠からざる

くしが三石驛より國道を離れ山手に入りて二十哩を走り沼村に至りて再び國道を横ぎり夫れより長岡驛を経て岡山市に達す則ち三石驛より列車に乗り山の切取お沿ふて超ゆる所の陸橋は國道あり國道を西に往けば片上港に出つへきも列車は吉永驛に直馳す

吉永驛

吉水驛は備前國和氣郡山陽鐵道第十五次の停車場なり驛前に散見する部落は則ち吉永中村なり

吉永中村は戸數五十寂寥たる一村落實なり然れども昔は一に之を宿と稱し官道の驛路に當り人家多く地方の繁華ありしと云へども今は宅地變して田圃となれり驛より南に入る壹里にして閑谷新田あり是れ有名なる閑谷學校の設けありし地あり

閑谷學校は寛文庚戌の年舊藩主池田光政(新太郎少將)が碩儒熊澤蕃山翁を聘し子弟の教育を委託せんか爲め建築したる校舍あり其後延寶二年聖堂を建て元祿十四年聖像を鑄造して之を安置し堂を大成

吉 永 驛

殿と稱す同十五年講堂を造くる其建築は支那風に模擬し結構の壯麗  
 天下に冠たり寶永元年光政の肖像を鑄造して祠を建て之を芳烈祠と  
 云ひしか後改めて開谷神社と稱す神社の東隣に對土の山陵に似たる  
 ものありこれ光政の膺の緒を埋めたる地なり路傍燕子花盛に開き清  
 閑愛すべきの風致あり王政維新以後中學を此地に置きしが土地偏僻  
 あるを以て之を廢し今は西穀一氏此校舍に於て私塾を開けり之を一  
 見するに規模の廣大にして用意の周密なる古人の苦心を付度すべき  
 ものあり此地方を旅行するもの一遊すべき遺趾あり  
 開谷學校を通り抜け南壹里にして國道に出づ國道を行く西壹里にし  
 て片上湊あり  
 湊より二十餘町にして一村あり伊部村と云ふ  
 備前燒 世に備前燒と稱する陶器は數百年來伊部村にて製造する  
 ものにして一名伊部燒と云ふ今も尙ほ盛に製造し居れり伊部の西數  
 町にして大内村あり  
 臥龍松 大内村に一大松あり臥龍松と云ふ其形の似たるを以てあ

和 氣 驛

和 氣 驛

り其幹枝蜿蜒々屈曲し枝葉鬱々繁茂して翠綠滴たるが如きの風致は播  
 州の名木も恐くは一步を讓るならん歎  
 片上湊を見物して臥龍松に廻り國道を案内する一輿あれども案内  
 者は再び吉永驛に戻り汽車に乗して西行せんに最初に通行する鉄橋  
 は八十寺川にして次ぎは日笠川あり上流に藤野の櫻あり次ぎに金剛  
 川を渡りて列車の停止する所は和氣驛なり

和氣驛は備前國和氣郡和氣宿の南六七町の地にあり神戸驛を距る七  
 十二哩にして山陽鐵道第十六次の停車場なり近傍に案内すへき名所  
 の和意谷の墳墓藤野の櫻天神山の城趾及和氣宿あり猶ほ美作因幡伯  
 耆等に赴かんとするものも當驛より下車して便利を得る地方少から  
 ざるべし  
 和氣宿 は吉井川の沿岸にある一部落にして戸數二百農商相半ば  
 す此地方の名邑あり吉井川を遡ること壹里にして川に臨み松樹の繁

○臥龍松 ○和氣宿

和氣驛

茂したる一山あり天神山と云ふ  
 天神山 備前國和氣郡岩戸村にあり吉井川の流に臨み奇巖怪石  
 峨然として一大山を爲し青松綠樹岩石の間に雜生し風致清雅を極む  
 津山地方より舟にて流を下る者此美觀を賞せざるはあし天正の頃浦  
 上宗景此地に城を構へ威を振ひしか其臣宇喜多直家の爲に滅された  
 り今猶ほ山上に楓櫻の大樹城櫓の礎石等を存し春秋の眺め最も佳なり  
 天神山より更に遡ると六里にして周匝村あり此地にて吉井川二流と  
 あり一は六里にして津山に至り津山川と稱し一は三里にして倉敷に  
 至り倉敷川と稱す倉敷町の下流拾五六町にして温泉あり鷺の湯と云  
 ふ  
 鷺の湯 美作國勝南郡湯の郷村にある鷺の湯は中國著名の温泉に  
 して避暑適當の地あり和氣宿より吉井川を遡ると七里にして之に達  
 す之に入浴せんとするものは和氣宿より下車すへき道順なれども有  
 年宿より下車し人力車にて上郡に出で上月を経て土居峠(一名万の峠)

和氣驛

を越へ土居宿より江見宿に至り江見川に沿て倉敷町に出で湯の郷に  
 着するもよし其行程十三里道路は敢て平坦と云ふにあらざるも人力  
 車の通行を妨ぐるものは只一の土居峠あるのみ土居峠は海面を抜く  
 と八百尺の高嶺なれども登降僅か十二三町にして敢て苦慮する程の  
 ともあし然れども往返道を異にし往くには上郡に出づるも返るには  
 湯の郷より河舟を雇ひ吉井川を下れば清流に棹して天神山の風景を  
 眺むるの爽快あり平水あれば三四時間にして和氣驛に達するを得べ  
 し諸湯の郷は鹽垂山の麓倉敷川(吉井川)の上流の岸にあり戸數百二十  
 中に就きて百戸は温泉の爲めに生活するものあり古史によりて其起  
 原を尋ねるに大古少名彦尊始めて此湯を發見し名けて勝田の御湯と  
 云ふ(美作國分國以前は此地一体勝田郡と云ひしとぞ)中古地變に際し  
 温泉埋没また浴客の顧みるものあかりしか清和天皇の貞觀二年(叙山  
 の僧圓仁法師文珠菩薩の宣托により再び之を改修し現時の浴場を開  
 きたり傳へ云ふ文珠菩薩白鷺に化して法師を此地に誘ひしより鷺の  
 湯と唱へたりと尤も當時の浴室は明治二十一年工を起し廿三年の春

◎天神山 ◎鷺の湯

和 氣 降

落成したる西洋風の二階樓にして地方稀に見る所の壯觀なり其樓下は之を四室に區別し一番より四番に至るの浴場とす此外蒸湯とて特に一浴場を設け浴客の依頼に應ずるものあり樓上は椅子テーブルの備へありて浴客の休憩に供へ西洋酒。ラム子。茶。菓子等の用意あり欄干に凭りて四望すれば鹽垂の秀峰頭上に聳ゆる吉井川の清流眼下に流る瓢を携む杖に倚りて山中の涼を掬するも一快きれども夏時は舟を呼び網を荷ふて吉井川の香魚を漁るも妙あらんか旅店は柏屋。龜屋。加茂屋。和泉屋。若見屋等を上等とし其他數十戸あり旅籠料は十三銭より三十銭までにして其價の廉あるもゑか上等の評を下すべからざるも自炊貸間の法もあれば浴客自ら料理するの便あり吉井川の年魚を始め鱒。鮭。鱈の川魚は命に應じて膳に上り殊に鳥類は其價廉にして味美なり夏時多少の閑暇ある人は一遊するの價値あるべし温泉分拆表并に醫治効能左の如し  
無色透明にして微々たる鹹味を含み中性あれば之を蒸發して得たる殘査は極めて微弱ある亞爾加里性の反應を呈す温度は卅七度

和 氣 降

半華氏百十六度 硫化水素瓦斯の甚た過量を抱有す

- 比重 攝氏十五度の 二、〇〇九
- 固形物 總量に於て 二、四四〇六
- 格魯兒化那篤留酸 一、一三三四
- 硫酸加兒爾酸 〇、〇七四九
- 硫酸加兒爾酸 〇、九二九五
- 硅酸 〇、〇六九五
- 格魯兒化麻州涅斐酸 痕跡
- 磷酸 僅微
- 礬土 全
- 鉄 痕跡

醫治効能

打撲、金瘡、惡性潰瘍、脈の硬結及他の頑腫、慢性頑固の皮膚病、水腫病、痔、中風、慢性リウマチス、關節病、神經性頭痛、腰痛、水脈管弛緩其他官能萎微、神經弛緩、頭振、摺、麻痺、變、癩、疥、消食不其、食慾調、慢性胃加太兒、貧血症、慢性子宮病、及腫粘膜炎、月經不調に適し含嗽劑としては小兒驚口疳、咽喉腐爛内服劑としては慢性氣管支炎、膀胱病に適し

驚の湯數日の入湯に倦きたらば近傍を散策するも妙あらん湯の郷より西北六里にして津山町あり

津山町 是松平三河守十萬石の舊城下に於て美作國東西北條の兩郡に跨り吉井川の北岸にありて戸數三千三百余人口壹萬四千余あり市街は吉井川に沿て東西に長く南北に狭し因幡伯耆の各地より産出する貨物にして吉井川の水利に頼るものは概ね津山町に輻輳し來るを以て市中商業の繁昌今も藩政の昔に異ならず美作第一の都會あり此地山陽鉄道和氣驛を距ると拾里兩山驛を距ること十五里あり物産は米穀を主とし銅鉄薪炭等あり

津山城 是市街の北部に在り西南は老松林を奇し北麓は竹林塚を蔽ひ東の懸崖數段林田川の小流に臨み眺望秀絶あり元來當城は元和二年森忠政が豊前の小倉城に擬して建築したるものにして建築の落成するや小倉城主細川忠禮鐘を贈りて其成を祝す忠政之を天主閣に置く其狀牽牛花に似たるを以て朝顔の半鐘と云ふ城の天主閣は五層にして高十一間あり徳川幕府五層の天主閣を築きたるを聞きて忠政を詰る忠政答へて四層ありと云ふ森更之を信せず臨檢せんとす忠政の臣伴唯利從つて江戸にあり主人の密旨を受け急行津山に飯り一

層の庇を徹し檢視を待つ幕吏來りて咎むること能はざりしと云ふ森氏國除かれ松平宣福之を領し明治維新に至れり

院の庄の遺蹟 津山町より壹里にして院庄に到る院庄は元弘の其昔し後醍醐天皇隱岐遷幸の時行在所とありし所あり元弘二年三月七日車駕京都を發し播磨より杉坂を踰へ豊國莊鹽湯郷和氣の莊長岡を經て十七日院庄に達す北條の將小山秀朝兵數百人を率ひて警固す是より先備前人兒島高德車駕を奪ふて義兵を擧げんと欲し之を舟坂の切所に待つ既にして車駕美作に出つと聞き馳せて杉坂の切所に至れば車駕既に過く是衆散す高德單身院庄に至り夜潜に行在所を覗ふに警固殊に嚴かり因て門前の櫻樹を削り天莫空勾踐時非無范蠡の十字を題し其衷情を上奏す明治二年其遺趾に社殿を建立し作樂神社を奉祀せり

美作の名勝古蹟を探ぐれば釋源空の誕生寺神場の瀑布湯原温泉等あれども悉く之に曳杖せんも旅客の疲勞を慮り再ひ和氣驛に立戻り第一に案内すへきは藤野の櫻あり

○津山町 ○津山城 ○院の庄の遺蹟

和

氣

驛

藤野の櫻 藤野村字日笠村日笠川の沿岸に猿目神社あり其社殿は  
 壯麗と云ふにあらざるも境内の松林蒼鬱として清雅掬すへし祠前の  
 圮橋を渡り日笠川の堤防敷町の間は皆櫻樹にして千本櫻の稱あり其  
 樹多くは若木にして十二分の風致なきも花時は遠近より花見の人集  
 ひ雑沓云はん方なし和氣驛にて下車すれば人力車二十分時にして達  
 するを得べし

和意谷の墳墓 和意谷は和氣驛を距る東北二里の山間にあり道  
 路險惡十五六丁の間は人力車通せず此地池田家世々の墓所にして墳  
 墓の結構甚だ壯麗あり殊に山川の風致に富み當地方の名勝あり  
 藤野の櫻和意谷の墳墓を見物して復た和氣驛に戻り列車に乗して西  
 行し曾根川の橋を渡りたる頃大河の滔々として南流し今にも軌道  
 を侵さんとして其水勢を轉し更に西流するものは吉井川なり此方の  
 岸に高く水に臨む數多の人家は和氣村あり列車は川に沿ひて走ると  
 三哩弓削村に至りて吉井川の鉄橋を渡る其長二百五十間あり對岸の  
 地を二日市村とす

瀬 戸 驛

吉岡一文字の遺趾 二日市の北十五六町に鍛冶屋村あり此地  
 は備前の名治吉岡一文字吉光の名刀を鍛ひたりし所ありと云ふ  
 菊一文字の遺趾 備の名治菊一文字國重は大内村字鍛冶屋谷に  
 居住したりと其地は二日市の南十五町の山間に在り

吉井川 其一名を西大寺川又東大川と云ふ水源を美作國四ヶ條郡  
 上齋原村の恩原澤に發と南行東折して津山町の下を過き頓に南折し  
 斜に東南に流れ備前國邑久郡西大寺町の東を流れ九番に至りて海に  
 入る水源より此に至る廿七里余中に就きて美作國四ヶ條郡中谷村よ  
 り邑久郡の海口に至る十七里餘は舟楫極めて便利なり其貨物は津山  
 より出す所のものと英田郡等より出づる所の茶最も多し然れども本  
 流は沿岸各村落の灌漑に供するを以て夏秋の間は五ヶ所に堰を設け  
 舟運の途を壅塞す水産ハ鮎鮎鰯鰯鰯等あれども就中若名あるは院  
 庄宮尾地方の鮎なり

吉井川を渡り次に列車の停止する所ハ瀬戸驛あり

瀬 戸 驛

○藤野の櫻○和意谷の墳墓○吉岡一文字の遺趾○菊一文字の遺趾○吉井川 百二十一



瀬 戸 驛

瀬戸驛と物理村字瀬戸の北端にありて山陽鉄道第十七次の停車場あり物理村は瀬戸下村沖村江尻村等を総稱したる名あり内に就きて下村は近傍の商業地にして小賣商を營むもの少からず其戸數は瀬戸と相伯仲して共に百戸ばかりなり西大寺の觀音に詣んとするものは當驛より下車すへし其里程は二里強あり

**西大寺町** は上道郡の東南部吉井川の西岸にある名邑にして戸數六百余あり吉井川の海口に枕み物貨輻輳の土地あり警察署郵便局等あり此地に西大寺と云ふ大寺あり

**西大寺の會陽** 金陵山西大寺の吉井川の西岸にありて當地方有名の巨刹あり就中著名あるは毎年正月元日より二七日の間修正の法會あり國家安全五穀成就の祈禱をあす十四日の夜に至り法會了り牛王を參詣人に投與す是れ所謂會陽にて參詣の人々裸體被髮とあし先づ身体を吉井川の水に清めて之を拾ひ取らんとを競ふ或は他人の頭を踏へ或は肩を踏み人々相重り躓りて之を咎めず倒れて之を救ふもの亦く境内人の山を築き喧譁の聲一二里の外に聞へ其雜沓云ふへか

瀬 戸 驛

らず既にして一人牛王を得能く群を脱し之を一葉家に投する者あれば其場開散す此一大競争を見んとして近傍の老幼男女は勿論山陽山陰四國等の人々相會するもの凡二万人と稱す來集の旅客村中の各戸に充滿し主客安眠すると能はざるを例とせり實に日本の一大奇戲にして一奇觀あり抑も當寺は天平勝寶年中周防國久河莊藏の女皆足の創造する所にして古は金岡莊中島にありしを寶龜八年僧安隆兒島の海樵の戸にて龍神より犀角を受け之を投せしに今の地に落らたるより此處に更めて堂を建立し犀戴寺と名けたりしが後醍醐天皇之を改めて西大寺と稱したりと或は云ふ改稱者は足利尊氏なりと

**巨勢金岡の墓** 畫伯巨勢金岡は備前金岡の莊より出てたる人なりと西大寺村に金岡の墓あり又金岡筆すゝきの井と云へる古蹟あり然れども一説には畫伯にあらすして笠の臣の祖たる金岡からんと云へり

**裳掛の天神** 西大寺村の南隣金岡村に裳掛の天神とて地方に著名ある天滿宮の祠あり其由來を聞くに今は昔し菅丞相筑紫に左遷の

○西大寺町 ○西大寺の會陽 ○巨勢金岡の墓 ○裳掛の天神

時金岡の海上にて日暮波荒く船の進退に難みしに此所の松原に火影の見えたるより舟を寄せ陸に上りて休憩し此松に裳を掛けしより此松を裳掛の松と云ひ後世其地に祠を建て裳掛の天神と云ふ西大寺の會陽を覗て裳掛松に廻り岡山に赴かんとするもの人力車にて直行せば其里程二里半且つ道路も平坦なれば一時を費さずれども案内者は再び瀬戸驛より乗車し鉄道線路を見物すへし驛を距れて鉄橋を通過するは砂川あり次に停車する驛を長岡と云ふ

長岡驛

長岡驛は備前國上道郡宍甘村にありて山陽鉄道第十八次の停車場あり驛の東北七八町の地にある部落は山陽道藤井宿にして西南五六町の處にある村落は長岡村あり而して驛の西北に當り人家の散点するは宍甘村あり驛の西北十五六町の處に國府市場あり國府の遺趾 國府市場は寂寥たる寒村あれども往古吉備の國府を置きし繁華の土地ありしとぞ平家物語に松殿配流の時國府の邊湯

長岡驛

迫と云ふ所に流すどあり今猶湯迫と稱する村落あり其妹尾太郎兼光を殺せし時備前の國守十郎藏内の代官國府にあり云々と見へたるは則ち此の地のとあり

關白屋敷 國府市場の北ある湯迫村に關白屋敷武士屋敷と云へる地名あり是れ治承の往時關白松殿(基房)の配流せられたる遺趾ありと武士屋敷は恐くは松殿配流の時誓固の武士等の居住せし所あらん

帝子墓 又同村淨土寺の境内に墳墓あり土人は之を御廂と稱す鳥羽院皇子の御墓ありと

長岡の停車場を獲し將に鉄橋を渡らんとする頃列車の左傍に森林を見るは世にも名高き岡山の公園地後樂園にして岡山市に赴きたるもの必す一遊すべき名勝あり而して鉄橋を架したる河流は岡山縣三

大河の一なる旭川あり 旭川 其一名を西大川と云ひ源を美作國大庭郡の龍王池に發し眞鳥久米北條久米南條の諸郡境を經過して備前に入り津高赤坂御野上

◎國府の遺趾 ◎關白屋敷 ◎帝子墓 ◎旭川

道四郡の間を環流し岡山の市街を貫き三番あ至て見島灣に注ぐ水源より海口まで三十二里余岡山縣第一の長流あり其水運は眞島郡高田村より海口迄廿六里余舟楫自在に通す尤も夏秋の候は河中所々に堰堤を築きて舟行を遮断す水産の鮎鯉鮒鱈鰻鱺等あれども高田垂水の鮎岡山の鯉最も有名あり旭川の鉄橋を渡り岡山市街を左に見て列車の停止する所は岡山市の西端上出石に在る岡山驛なり

岡山驛

岡山驛は神戸驛を距る九十哩大阪驛を距る百十哩山陽鉄道第十九次の停車場あり驛は中央繁華の土地を距ると凡七八町にあり岡山市を案内せんには先づ次に掲ぐる所の岡山の記を讀んで其風土を暗し而して後各々好む所に從つて駕を枉げられなば或は誤り少からん歟

岡山之記

岡山市 は池田家三十万石の舊城下にして山陽鉄道沿道第三に位

岡山の記

する都會なり地は備前國御野上道兩郡に跨かり市の中央を流る大川は旭川にして枝別したる二つの小流は西川及柳川あり市區の廣さ東西二十町南北一里街衢縱横に通し町數八十三あり市中最も繁華あるは橋本町西大寺町榮町紙屋町上の町中の町及下の町あり是れ所謂大道にして東西と南北に通して一直角を畫く戸數九千六百八十一人口三萬三千七百七十九あり官衙諸會社及學校の位置

- |           |      |           |      |
|-----------|------|-----------|------|
| 岡山縣廳      | 弓み町  | 岡山始審裁判所   | 全    |
| 岡山郵便電信局   | 上の町  | 岡山登記所     | 全    |
| 岡山市役所     | 東中山下 | 岡山監獄      | 二日市  |
| 第三高等中學醫學部 | 内山下  | 岡山縣尋常師範學校 | 西中山下 |
| 岡山縣尋常中學校  | 西中山下 | 岡山高等小學校   | 小橋町  |
| 岡山尋常小學校   | 西中山下 | 岡山普通學校    | 東中山下 |
| 岡山醫藥學校    | 東中山下 | 山陽英語女學校   | 門田村  |
| 孤兒院       | 門田屋敷 | 感化院       | 小原町  |
| 岡山紡績會社    | 網濱   | 第廿二國立銀行   | 船若町  |
| 岡山倉庫會社    | 天瀬   | 岡山精米會社    | 網濱   |
| 稻垣煉化會社    | 天瀬   | 山陽鐵道岡山驛   | 上出石  |

○岡山市

岡山の記

岡山縣廳は市中最高の地位にあり西洋風の建築にして前縣令高崎五六氏の在任中新築したるものなり縣廳の管轄は備前備中美作の三國にして廣袤東西の直徑廿七里南北廿六里其面積四百四十五方里戸數廿二萬人口百三萬あり

岡山城 は一に鳥城と稱す天主閣及城櫓の外壁を掩ふに燒板を以てし其色黒きか故なり又播州姫路の白鷲城と相對して雄城とも云へりとぞ其創業は何人なるか詳かならざるも天文弘治元祿の頃は金光家岡山上に居城せり天正の頃宇喜多和泉守城主金光を殺し城廓を造營し此城に居したるもの如し其後秀家關原の戰に敗れて封土を失ひ小早川秀秋徳川の封を受け代りて岡山上に治し卒して子亦く國除かれ慶長八年池田忠繼之に居し光仲に至り因幡に徙り光政代りて封を岡山上に受け更に備中五郡を併領し後相承けて明治維新に致る當時は廢城として之を池田家に買受け舊時の觀を存するものは只一の天主閣

あゝのみ 神社佛閣 市中に在る神社の數は拾餘にして佛閣四十ヶ寺あり

岡山の記

中縣社。岡山神社は石關町に伊勢神社は畑町に春日宮は七日市にありて俱に市中有名の神社なり遠昌寺は東田町に國清寺は小橋町に藥師院は磨屋町に妙勝寺は船頭町に大雲寺は大雲寺町に隆涼寺は瓦町に光清寺は小原町にありて俱に有名の巨刹あり

三勳祠 は上道郡操山にあり山腹は則ち借樂園あり其祭神は和氣清麿楠正成兒島高德を合祀したるなり祠の南に東照宮玉井宮の二社あり  
宗忠神社 は御野郡上中野村にありて岡山停車場を距る十二三町の地にあり當社は神道黒住教會の本社にして社殿の莊麗建築の宏壯あると地方稀に見る處なり然れども創設日淺く翦翳たる樹木の社殿を擁護する亦く蟻雲の社殿平地に挺立したるは或は少しく莊嚴を欠くの憾みあり抑も黒住教の起因は安永の頃備前國御野郡上中野村に黒住左京と云へるものあり父宗繁に繼ぎて同郡今村今村宮の神宮と爲り資性正直にして孝心厚く言行人の則とあるもの少からず殊に大陽を信し天照皇大神より天地生々の靈機を授かり日神の大道を覺悟

◎岡山縣廳 ◎岡山城 ◎神社佛閣 ◎三勳祠 ◎宗忠神社 百二十九

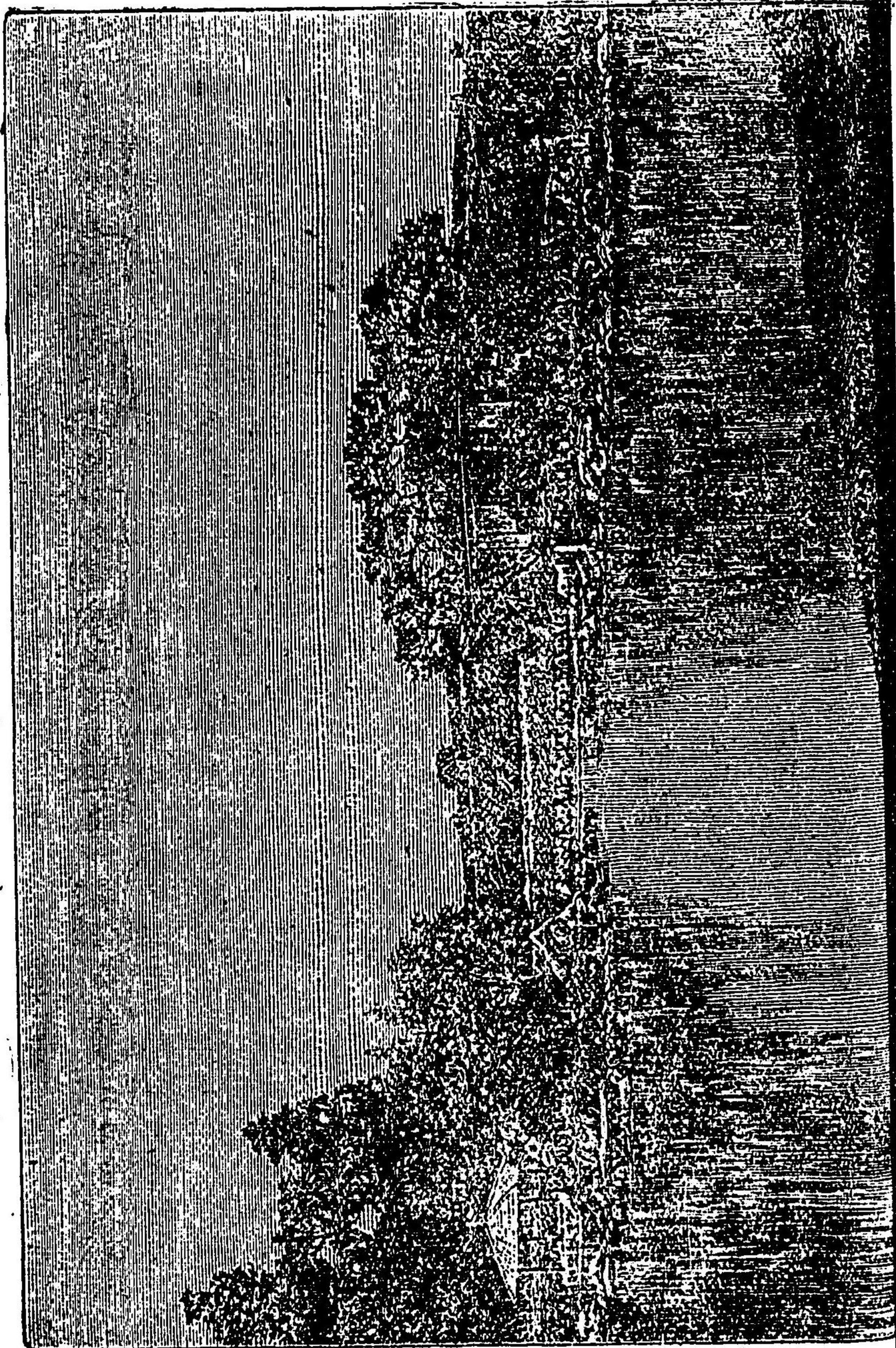
したりとて禁厭の術を行ふしに之に馴依するもの多く遂に黒住教ある一派を創基し布教傳道すると三十七年七十一歳を以て嘉永三年二月廿五日死去せり其後安政三年三月八日宗忠大明神の神號を賜り文久二年洛東神樂岡に鎮座せしか慶應元年十二月勅願所とせられ従四位下の宣下あり明治九年十月神道黒住派として一派の允許あり十二年宗忠神社の稱號を賜り十三年冬至祭翌日を以て本社神饌所守札所式を行ひ同十六年四月遂に落成せり現時の社殿は本社神饌所守札所拜殿等あり其大祭は三月廿四五兩日七月三十日并に冬至祭なり  
岡山寺 は磨屋町にあり當寺は孝謙天皇の天平勝寶年間に報恩大師勅を奉して建立し其後村上天皇の天曆年間に信源上人七堂伽藍を興し岡山市中著名の一太伽藍なり  
偕樂園 一に東山公園と稱し上道郡操山の山腹を開きて新に設けたる公園地なり境内に招魂社ありて明治十年西南の役に戦死せし志士の忠魂を吊するの所たり此地新開にして境内風致に乏しきも旭川

の一帶眼下に素練を敷き鳥城の櫓閣近く雲表に秀て殊に彌生は候は菜花の眺め最も佳なり猶ほ杖を操山に曳けは三勸祠あり東照宮あり玉井宮あり此地市街の東端に突起して西北南の三方を開き眺望の絶佳ある後樂園の遠く及ぶ所にわらず岡山市の地宜を知らんとするもの必ず登臨すへきの勝地あり  
後樂園 園は日本三公園の一にして春花の長秋月の夕夏陰冬雪以て娛むへく以て詠すへきの名園あり地は旭川を隔て、岡山の東北に位し岡山市古京町に属す抑も此園は舊藩主池田綱朝公の創設する所にして貞享四年十二月土功を起し壹万七千七百三十歩の地を劃して園地とし其後元祿三年更に園地四千三十坪を増加し總計貳万七千十三坪に及ぶ周囲九百三十二間東西の長さ園の中央にて百九十七間南北百十七間あり園の四面は塙を設けて圍繞せしめ竹を植へて屏風に代へ門を四方に開きて道路を通す西あるを西門とし往時藩主園に往來するの道とす西門の北にあるを北門とし衆庶出入の道とす今猶然

岡山寺の偕樂園の後樂園

岡山の記

東にありと東門南にありと南門とす此他小扉の園外に往來するもの敷所あり園中池沼を監つもの四ヶ所澤池花葉池花交池廉池是れあり其水は旭川上流より溝渠を通し所謂公園用水を経て園中に導き迂回繁曲或は溪澗とあり或は池沼とあり其終り又旭川に落つ一脈の水流千狀萬態變化して風致を添ふ各所の水流には石橋若くは圮橋を架し以て徑路を通す徑亦た縱横往來轉便利あり園中の地形西南は岡阜の狀を爲して土地高燥雜樹翁鬱として深山の致あり北は松林森茂し中央は平衍宏敞にして東は開豁以て園外の諸峯を望むへし之れ是を園の概景とす園は元舊藩主の或は稼穡の艱難を視察し或は藩士の武技を演習し或は儒臣を延て經典を講せしむるの用に供し其他近隣諸藩親戚懇交の侯伯を招延接待し且つ諸藩の使節を饗する所なり其名始めは御茶屋を敷と稱し後單に後園と呼びしを明治四年後樂園と更め池田侯の私有とせしが明治十七年之を土地と爲し岡山縣廳の管理に属せしめたり蓋し後樂園の名聲を四方に喧傳せしは明治十九



岡山の記

年山陽道御巡幸の際園中延養亭に玉座を設け駐籠わらせられ其結構の觀處に副ひ歎賞ありしか爲あり猶園中十勝の二三を抄録すべし  
延養亭の鶴 亭は草葺板葺相交りたる結構にして位置東南に面し眺望最も濶く鳥城の城橋南に聳人天主閣を軒外に望み園中最勝の風致あり亭前の芝生には飼養の白鶴常に來りて此間に逍遙し俛仰飲啄能く人に馴る園中に十勝の設けあり延養亭の鶴亦た其一なり  
二色岡の花 此地往時は花卉樹木に富むを以て此名ありしものちらんも今は滿地皆楓樹にして晩秋の候霜葉燦爛錦繡の如し二色岡の花亦た十勝の一あり  
唯心山の月 全山樹木鬱葱寸地亦しと雖も大率矮樹にして喬木稀れあり石亦た重沓石間に徑を通す山頂樹木崢嶸にして遠望を恣にすへく園中の勝景一目過るゝ所なし小亭あり東北に面す欄に倚りて園外を望めは山野の風光亦た來りて雙眸に入る此地觀月に可あり故に唯心山の月亦た十勝の一あり

岡山の記

流店の水 流店は樓閣なり樓下棧板左右に相對し中央に一條の水道を設け其水中に奇石を布置して雅致を添ふ樓を用ひて客を宴するに當りては或は魚を放ち或は鰲を浮へて歡娛を助く賓客左右に對座し流を隔てて燕飲する一奇あり流店の水亦た十勝の一あり  
其他花交の瀑布千入の紅葉境澤の選常盤の松等ありて皆十勝の一に居る  
劇場及び寄席 高砂座ハ大雲寺町に在り岡山第一等の劇場にして野田屋町の柳川座西中島町の旭座は之に次くの劇場あり寄席は何れも新築にして其結構の美他地方に多く見ざる所なり天瀬の巴王座東山下の千歳座西中島町の常盤座は其重なるものなり之に次くは東田町の開導座弓の町の陽氣亭あり  
旅店及び料理店 旅店の上等あるは上出石の三好野花壇上之町の自由舎西大寺町の三好野紺屋町の魚嘉とし之に次くを紙屋町の池田水田中山下の武藏野石關町の魚春等とす料理店の重あるは石關

◎延養亭の鶴◎二色岡の花◎唯心山の月の流店の水◎劇場及び寄席◎旅店及び料理店 百三十五

町の大黒屋(西洋料理兼業)東中山下の山左西大寺町の三好野旅店兼業  
紺屋町の魚嘉(旅店兼業)上出石の三好野旅店兼業(紙屋町)の丸佐上の町  
の丸敬山崎町の藤久等あり

貸坐敷 是東西の両中島町に限りて之を許可するの制あり今其由  
來を聞くに天正年間羽柴秀吉宇喜多直家に謀りて旭川の寄洲に二筋  
の市街を造り之を中島と稱して石切半人に與へ遊廓免許の地とあり  
是より先き備中高松の役秀吉手兵の少くして毛利氏と共に角するに  
足らざるを知り兒島郡瑜珈山の山伏尊龍坊に援助を乞ひしかど坊之  
に應せさりしを以て秀吉小舟に轉し下津井より岡山に歸るの際石切  
久兵衛あるもの其郷導を爲せり故を以て其賞として中島を久兵衛に  
與へたるあり蓋し半人とは久兵衛の剃髮したるより秀吉の紳名した  
るものあり今此地貸座敷の重立ちたるものは金花樓中富魚吉竹亭金  
光亭花虎等なり

物産 岡山著名の物産は紋越熊野染金華堂の調布(菓子)中町口の黄

庭瀬度

微園子玉川銘酒等にして正阿彌の金屬鑄造逸見東洋の木具彫刻は美  
術品として最も有名なるものなり然れども産物の重なるものは米穀  
にして備前備中(美作)の三國より産出するもの凡そ八十万石其過半は  
備前一國より出す麥亦た三十万石の産出あり之に次くは銅鉄あり吹  
山の銅山最著名にして一ヶ年の製出凡百万貫あり此等の物貨旭川に  
頼らされば吉井川若くは高梁川に頼りて各地に輸出す  
岡山市の近傍にて案内すへき名勝は備前備中の兩吉備津神社吉備中  
山細谷川の古跡高松の稻荷高松城水攻の遺趾等あり然れども岡山よ  
り案内すれば二里以上は人力車にて馳行するの不便あるを以て寧ろ  
庭瀬驛より案内すべし岡山驛より瀛車に乗して西行するに鐵道は國  
道に沿ふて奔らす所謂濱街道と併行す驛を發し間もかく渡る所の鉄  
橋は笹ヶ瀬川なり列車の停止する所を庭瀬驛とす

庭瀬驛

◎民生數の物産



吉備津神社の記

庭瀬驛は備中國賀陽郡庭瀬村にありて山陽鐵道第二十次の停車場也

庭瀬及撫川 庭瀬は一小流を距て、都宇郡の撫川村と相接し連

鑑の一市街を爲す其戸數凡五百あり都宇郡役所治安裁判所出張所登

記所警察分署郵便局高等尋常の兩小學校等は撫川にありて其繁華庭

瀬に勝るものゝ如し殊に撫川は撫川團扇とて一種の團扇を出し其名

高し此邊一体今は海岸を距る數里の内地をれども二百年以前は沿岸

にてありしものゝや用水筆記を見るに天正十四年日岡越前守千原九

右衛門に命し新開を爲さしめ庭瀬城に居す其頃は海岸に城を構へたり

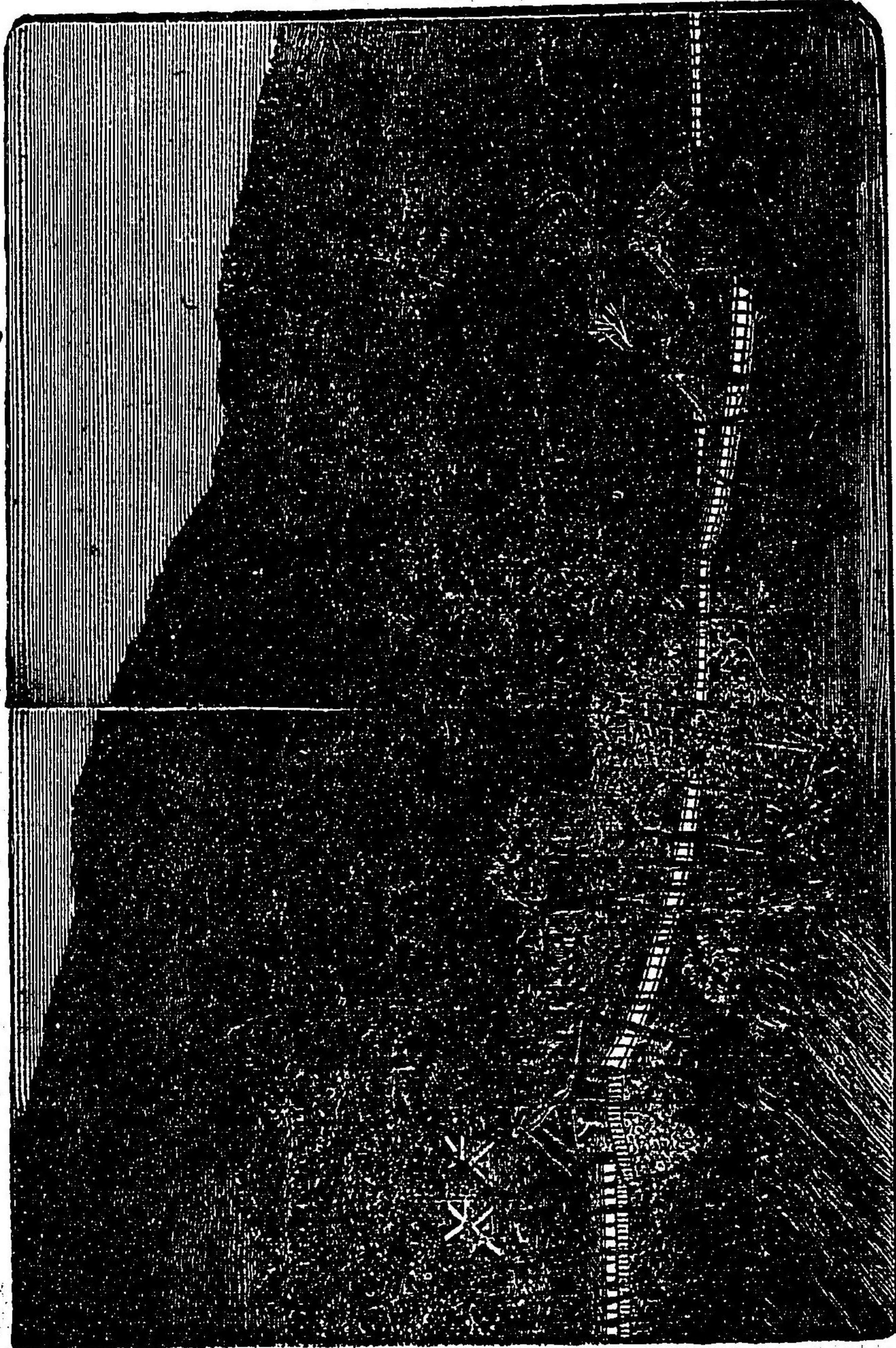
しか寛永年中井手方へ提出來し云々と又正保四年の頃庭瀬の入海は

船入廣さ四十五間滿潮には二百石の船舶を入るれども干潮には入る

と能はず云々と以て沿岸の地たりしとを証すべし庭瀬驛より下車す

るものに案内すへきは第一宮内村の吉備津神社あり其距離一里

吉備津神社の記



吉備津神社の記

吉備津神社の備前備中備後の三ヶ國各別に之を奉祀し各々吉備津神社の神號を用ひ之を稱するに其國名を冠し某々の吉備津神社と稱して孰れも世人の敬崇淺からざる神社なれども世に著名ある吉備津神社は備中國賀陽郡真金村守官内村吉備の中山に鎮座する國幣中社吉備津神社即ち是れなり抑も吉備津神社の仁徳天皇の朝敕して之を建立し爾來舊様を守りて再造し嘗て其結構を變したるとなれば其規模の宏大建築の壯麗あるとは山陽道中程に見る所なり先づ境内を案内せんに國道の側に吉備津神社の扁額を掲けたる華表あり華表は華崗石にして日本無類の大華表ありと華表より本社に至る數町の間平坦の行路あり老松の行樹森々繁茂し翠色滴りて神徳の彌高さを示す之を櫻の馬場と云ふ馬場より石階を登り總拜殿に至る(其梁三間桁十五間之と接して拜殿あり東西三丈四尺南北二丈七尺又之に接して本殿あり南北六丈貳尺東西五丈六尺遠く之を望めば宛然たる一字にして巍然たる結構なり拜殿の西に接して廻廊あり細谷川の古蹟に至る其長百八十間廻廊に接して二三の末社あり其盡くる所に碑あり文

百四十

吉備津神社の記

に曰く吉備中山細谷川之古跡と裏に古今集の名吟を鐫む碑の左は本宮の社宇にして右は細谷川に至るの徑路あり細谷川に沿て廻ると五六町にして茶臼山に至る是れ則吉備津彦命の山陵あり細谷川は源を有木の別所に發し備前の境に落つる溪流ありとは古史に散見する所なれども今細谷川の古跡として保存する所の名勝は吉備中山の山中より發し宮内村に注ぐ一小溪流あり此地敢て風光に富むと云ふにあらざるも古今集大歌所に左の名吟あるを以て其名世上に噴々たり

まかね吹く吉備の中山おひにせる

細谷川の音のさやけさ

此他細谷川の名歌少からず然れども必ずしも吉備中山の細谷川を指すにはあらず今吉備中山の味に係るもの二三を左に録す

御集

後鳥羽院

真金吹く吉備の中山うちどけて

細谷川に岩そくあり

○細谷川

吉備津神社の記

夫木抄

權僧正公

百四十二

苗代に細谷川をせきかけて

吉備の山田は帯を引くあり

御釜の鳴動 吉備津神社に詣つもの、記聽すべきは御釜の鳴動あり廻廊の中央より西に分岐したる小廻廊あり其盡くる處を御釜の御殿と稱し安原備中守の建立なり抑も御釜の御殿は吉凶禍福を占ふ所にして二十五錢以上を投すれば其吉凶を驗するを得即ち阿曾女と稱する女人柴を竈に燃し供米を節に入れて御釜の蒸氣にむすと暫時にして御釜鳴動す願主吉されは其聲雷の如く嘗つて國道往來の諸侯をして聲を恠しみ馬を立しめたることわり若し不吉なれば其聲低くして茶釜の沸くに似たりと今其由來を聞くに垂仁天皇の其昔し吉備津彦命温羅征討の勅命を受け温羅を誅して其首を討たるに顔色依然其貌を變せず於是命供米を用意する隨の下に埋めしめたり然れとも猶は時々叫聲を發す今の御釜の鳴動は則ち此聲なりと云ふ

吉備津彦命の略傳

垂仁天皇の朝に百濟の王子温羅なるもの

吉備津神社の記

あり容貌魁偉眼光炯々電の如く鬚髮赤く頰骨秀で身の丈壹丈四尺幼より大志あり性勇悍膂力人に過き細行を修めす仁義を守らす國郡を畧奪するを以て事となす嘗て日本を窺はんとするの志あり本朝に航して諸州を遊歴し遂に居を備中加屋郡新山に占め大門を起し城壁を築き大山即ち今の岩尾山を以て遊戯の場と爲し貢賦を奪ひ人民を憊す時人之を稱して鬼城と云ふ天皇征夷大將軍を遣して之を征す官軍利あらずして還る天皇吉備津彦命を遣して之を征せしむ命乃ち吉備中山今の宮所に陣し片岡山今の楯築山に石楯を築き之と相戦ふ兎徒變化の術を得て進退自在あり命自ら軍陣に臨み天矢二筋を發す其一矢は空中に於て敵矢と相中り飛んで海中に落つ後世其處に祠を建て矢嚙の宮と云ふ今猶は路傍に存せり宮内村を距る里許一矢は温羅の左眼に中り流血河の如し後世其下流を血水川と云ふ於是温羅雉子に化して山中に隠る命鷹とありて之を追ふ温羅又鯉に化して血水川に入る命又鵜とあり嚙んで之を傷く後世其處に祠を建て鯉嚙の宮と云ふ今猶は血水川の邊にあり矢嚙の宮の西南數町にあり温羅神力の

◎御釜の鳴動 ◎吉備津彦命の略傳

百四十三

吉備津神社の記

角すへからざるを知り鋒刀を棄て面縛して降を請ふ之を温羅征討史の抄畧とす命齡二百八十餘歳にして薨す之を吉備中山即ち今の茶臼山に葬る仁徳天皇の朝一宮大明神の神號を賜ひ勅して神殿及末社七十二宇を創立せしめらる是れ即ち吉備津神社あり  
備前吉備津神社は縣社にして備前國津高郡一宮村にあり三備吉備津神社の一あり其位置吉備中山の山後に當れり社殿は推古天皇の御宇に創業したるものにして往時其壯麗あると西國第一の美觀なりしと鎌倉將軍の時社領壹万余町を寄附せり一條院白河院鳥羽院高倉院后深草院より社殿の敕營あり其後宇喜多秀家并に金吾中納言秀秋再興を謀りしも全からずして中廢したりしが慶長九年池田照直造營を成就し元祿十年池田綱政の再建したるもの則ち當時の社殿なり當社も備中の吉備津神社と同じく一の奇跡あり舊曆六月某日夜半神田に挿秧を爲すに神主一苗を投すれば滿田直ちに挿秧を了るとぞ尤も近時は只幣帛の天降るのみありと云ふ是れ亦九吉備津神社三奇の一あり

吉備津神社の記

高松の稻荷 吉備津神社を西北に距る一里にして稻荷村あり村の正北ある山腹に稻荷山妙教寺あり境内に正一位稻荷大明神を安置す世に高松の稻荷と稱するもの是れなり其社殿は壯麗と云ふにわらざるも世人の信仰淺からず一ヶ年三百六十五日香火の絶ゆる間なく之に捧ぐる線香は幼童の專賣にして參詣人を強いて之を買ひしむ其人員百名以上あるに毎月二十五日の緣日には一人に付七八拾錢の賣上代ありと境内石階の兩側に料理店茶見世等ありて岡山市を始め近傍士女の四時の遊山場あり  
高松城水攻の遺趾 高松村より稻荷に詣つるの途中左傍に當り水田の中に一小草庵あるを認むあるべし是れ即ち高松城の遺趾あり草庵の南にある堤防は高松城水攻の時秀吉の築きたるものあり城趾の北に一小丘あり八幡山と云ふ山上に腰掛け松あり秀吉の之に倚り號令したるものありと抑も高松城の水攻とは正親町天皇の天正十年豊臣秀吉兵を移して高松城を攻むるに城主清水長左衛門宗治固く守りて能く防禦し月を踰へて下らず城は平地にして側に池沼多く阿部

◎備前吉備津神社

◎高松の稻荷

◎高松城水攻の遺趾

吉備津神社の記

川其西を流る秀吉於是堤を築き足守。長野兩河の上流に堰を設けて水  
流を湛へし。史に甲邊川の水を引くとは。則是れなり。時偶々霖雨洪水  
氾濫して滔々天に漲り。城中水に侵さるもの僅かに三板然れども。宗  
治少しも屈せず。益防禦を嚴にす。秀吉の軍。百方之を攻むれども。降すと  
能はず。此時偶々織田信長京都本能寺に於て。明智光秀の爲めに殺され  
たりとの急報至る。秀吉俄かに僧惠瓊を吉川元晴。小早川隆景に遣し。和  
を議して曰く。宗治一人自殺して城を致さば。吾直ちに退去せんと。二帥  
聞かず。宗治之を聞きて曰く。吾一死以て。閩城の人を救ふを得は死すと  
も。餘りありと。五月四日。近親隸屬と與に舟は。船し。秀吉の軍に至り。命を  
待つ。秀吉置酒して。其勞を慰し。宗治絶命の時を作りて。自殺す之を高松  
の役と云ふ。

倉敷驛

倉敷驛は窪屋郡倉敷町にありて。山陽鉄道第二十一次の停車場なり。當  
驛より案内すへき名勝古蹟は北は粟津。高梁。南は藤戸。瓊珈神社なり。又  
四國に渡らんとするものは。當地より下車し。陸路五里。兒島郡下津井港  
に出れば。丸龜若くは。多度津へ海上五里なり。丸龜。多度津には。讃岐鉄道  
ありて。琴平神社の參詣自在あり。

倉敷町は備中國窪屋郡の東南部にありて。戸數千四百。人口七千あり。往時  
は。幕府代官所の在りし地にして。巨商軒を聯ねて。市街を爲し。人  
民の過半。商工業に従事すれども。海口遠く。南方運輸の便は。只一の潮人  
川に依るを以て。商業萎微振はざるの歎ありしが。今回山陽鉄道停車場  
の設置は。此地の商業を一新するの媒介とあるからん。當町に窪屋郡役  
所。倉敷警察署。收税部出張所。倉敷郵便局。高等尋常の兩小學校あり。其他  
倉敷紡績會社。倉敷精米會社。倉敷煙草製造會社等。は。著名なるものあり。  
此地當時は。海岸を距る數里の内地に。おれども。往時は。海中にして。市後

○倉敷町

倉敷 縣

の妙見山は一の島嶼ありしなりされば天正十五年の薩摩征伐天祿の朝鮮御陣寛永の島原追討には當地より水夫を出せしと古史に見ゆたり又慶長十四年小堀遠江守より水夫屋敷若干を檢地帖に除地したるとあり蓋し倉敷とは御藏米を此地より船積したる故に御藏の敷地と云ふ意義あらんか

妙見山 市街の中央東部に聳立するを妙見山と云ふ其昔は海中の一嶼なりしも今は田間の小丘にして倉敷の産神阿知神社を祭れり此山眺望の勝あり水流の南より搖々として侵入するは潮入川にして北より蜿蜒流下するは高梁川の分派酒津樋の溝渠なり

高梁川 其源を備中國阿賀郡花見村の山溪に發し東南流して阿賀哲多川上上房下道賀陽の郡界をちし窪屋郡古地村に至りて二派とちる山陽鐵道の鉄橋は其下流にあり一派は淺口郡を経て海に入り一派は窪屋郡を通過し兒島郡南畝村に至りて海に注ぐ其流域二十九里余舟楫の通すると凡二十里新見村より高梁に至るの間は蟻瀬蜂瀬と稱する急湍ありて舟行甚た危険されとも高梁より下流は貨物運送の輕

倉敷 縣

舟皆帆を須つて上下す舟運の便至れりと云ふべし然れども此河せたる沿岸の田圃に灌漑するを以て夏秋の期は各所に堰堤を設けて舟行を壅塞す就中其著名なるは賀陽郡井尻野村の堰堤にして一に之を灌井の溝渠若くは十二ヶ郷と名く以て其灌漑の廣さを知るべきあり世に傳ふ昔源平争乱の世妹尾兼康此堰を築きて地方の田圃に灌漑せりと

其他下道郡に上原の堰あり窪屋郡に酒津の樋ありて俱に其灌漑する所甚た廣し又淺口郡に水江の堰ありて溝渠を玉島港に通す其用は灌漑にあらずして専ら水運を開くにありし玉島港今日の繁盛或は與りて力ありしからんか山陽鐵道玉島驛は此溝渠の沿岸に當れり此川の水産は鮎鮒鰻鮠等あれども就中著名あるは新見地方の鮎なり

倉敷より高梁川に沿ひて遡ると三里にして井尻野村に至る尙遡ると二十町にして一小橋を渡る榎谷川なり川に沿ひ道を轉し山溪に入り遡ると壹里余にして榎谷村に臻る是れ則ち豪溪の奇觀あり

豪溪 賀陽郡榎谷村に巖石の聳立するあり名けて豪溪と云ふ溪は榎谷川の流に枕み巖殿十數頭峯然として雲中に屏列し矮松綠樹巖石

◎妙見山 ◎高梁川 ◎豪溪



の間に維生し風景奇絶前面の  
 一大巉石の中央に天柱の二大  
 字を刻するあり備前の人某曾  
 て此地に遊び奇観を愛し自ら  
 天柱の二字を大書し後之を鏤  
 刻したりと岩面は藓苔蔽ひ遠  
 望蔽ひへからざるも共に併せ  
 て好事の一奇観と云ふべし  
 高梁町 粟溪より再び本道  
 に立戻り高梁川を廻ると四里  
 にして高梁町に達す高梁は備  
 中国上房郡の西南部高梁川の  
 東岸にありて板倉氏の舊城下  
 あり戸數千五百人口六千あり  
 地勢山に沿ひ流れに臨みて軒

連ね南北に長き一市街あり土地固より狹隘なるも運輸自然に便利に  
 して山間の名邑たり市中に上房郡役所治安裁判所高梁警察署高等尋  
 常の兩小學校郵便局町役場等あり此地元と松山と稱せしが明治廢藩  
 の時高梁と改稱せり  
 松山の城趾 高梁町の東北に松樹鬱蒼たる一山あり臥牛山又城  
 山と云ふ往時元弘の頃高梁英光此地方の守護とありて始めて松山に  
 治す後足利尊氏山陽道を徇ふるに當り高師秀を以て守護たらしむ正  
 平年間州の豪族秋庭重明南朝に應し兵を起して師秀を逐ひ自ら守護  
 代とありて松山に據る永正六年上野頼久秋庭氏に代り守護代とあり  
 亦松山に治す天文二年猿掛の城主莊爲資上野氏を滅し移りて松山に  
 居り以て小田下道上房の三郡を併す永祿三年三村家親毛利氏の援を  
 乞ひ莊高資を殺して松山に據る天正二年家親の子元親毛利氏に叛き  
 て其滅す所とあり城邑皆毛利氏に歸す既にして復羽柴氏の有となる  
 秀吉之を宇喜多氏に與ふ關原の役後徳川家康秀家の故地を収めて小  
 早川秀秋に與ふ秀秋卒して後小堀政次徳川氏の命を受けて松山に居

倉敷驛

り州事を治す元和の初池田長幸封を松山に受け後板倉勝澄の治所と  
あり以後相承きて明治維新に至れり豊前たる一小城主を代る十三蓋  
し亦た頻繁なりと云ふべし  
高梁町より倉敷玉島等高梁川下流の地方に赴かんとするには固より  
人力車の運行自在にして道路平坦砥の如く只些少の勾配あるのみな  
れども高瀬舟に乘し水流を下るも亦た一奇あり備案内者は再び倉敷  
に立戻り夫れより南方の名勝を案内せんに藤戸瑜珈神社神楽泊等あり  
藤戸の古蹟 今昔し元暦の頃平家は小松新三位中将祐盛同少  
將有盛丹波侍從忠房を大將として兵船數百隻を織して兒島郡粒江村  
にあり舟津原に上陸して陣營を張り源氏は三河守範頼三万騎に將と  
して備中國日岡山の邊に陣を取りて戰を催し佐々木盛綱藤戸を渡り  
先登の名聲を耀かせり蓋し盛綱の先登せしは日岡山の東南小瀬の近  
傍一枚畑一名佐々木谷と云ふより兒島郡粒江村舟津原の邊へ渡りし  
ものにして當時は海面凡二十町斗りありしからん

倉敷驛

平家物語に曰く佐々木盛綱壽永三年九月二十五日夜に入りて浦  
の男を一人語ひ直垂小袖大口白袴巻などを取らせすかしれば  
せて此海に馬にて渡しぬへき所やあると聞きければ此男案内は  
能く存候譬へり月の瀬のやうなる所候か月の頃には東に候大脇  
の渡りを云ふ月の末には西に候即ち藤戸の渡し件の瀬のわわひ  
海の面十町も候はん是れお馬杯にては容易く渡らせ給ふへしと  
申しければ佐々木いさゝらば渡しに見んとて彼の男と二人紛れ  
出裸体にあり件の川の瀬の様なる處を渡りて見るに實にいと  
深ふはさかりけり膝腰の立つ所もあり髪の濡るゝ所もあり深き  
所を泳ぎて淺き所に泳ぎ付男申すは是より南は北より遙かに淺  
ふ候敵矢前揃へて参らせ候所へ裸体にては如何にもかきはせ給  
ひ候まし唯之より販らせ給へと云ひければ佐々木實にもと歸り  
ける下臈はとこともあさものにて又人にも語らはれて案内もや  
教へすらん我計りこそ知らめとて彼の男を殺し首掻切りて捨に  
ける



倉

敷

驛

按ずるに往古は今の八軒屋黒石粒浦等の地は海中ありしも年経て漸々干瀉とあり今は悉く開墾して村落とあり藤戸の跡を没せり菅茶山其變遷を詠するの詩に

戰場全入壘田中 江沙猶餘一線通

底是先渡渡馬處 南村北巷綠秧風

藤戸の遺趾として考ふべきものありも佐々木の遺蹟には粒江村の鞭

木浮列岩引馬か潮天城村の笹無村廣木村の濁川等あり

瑜伽神社 は兒島郡林村にありて倉敷の南四里にあり瑜伽山遺

台寺は新熊野三山の一にして熊野權現を奉祀す昔日は社僧之を祠掌

し寺院に五流公卿の格式ありて新熊野山々伏の威權は諸侯をして憚

からしめたるとありしも王政維新神佛混淆を禁し縣社瑜伽神社と改

稱して神主の祠掌するとあり此社神徳の靈驗あると山水の眺望

に富みたるを以て遠近の士女之に參詣するもの多し抑も新熊野權現

の縁起は文武天皇の三年役優婆塞伊豆國大島に流さるゝや高弟義學

三百余人の弟子と共に害を避けんか爲め紀州熊野本社之神輿を奉し

倉

敷

驛

海に浮んで四國九州の邊を漂泊すると三年大寶元年に至りて備前國兒島郡柘榴濱今の下村に鎮座せり聖武天皇天平二十年兒島郡を賜はり孝謙天皇天平寶字五年大に社殿の造營あり又木見村に社殿を建立し諸興寺と云ひ山村に社殿を建立し那智山を移して新熊野山瑜伽寺と稱す後改めて瑜伽山遺台寺と云ふ之を新熊野の三山とす

韓琴泊 は兒島郡の西南田口港の東ある引網村あり海邊四五町の地を稱したるの名にして海水の眺望に富みり此地往古の西國往來の埠頭にありしものによ古人の名吟少からず今二三を左に抄録す

古今 波の音の今朝から琴の聞ゆるは 安倍清行

同 都まで響きかよへる唐琴の 業性法師

同 波のを残風のかけたる唐琴は 知家

同 けふもまた泊りやせまし唐琴の 後嵯峨院

名寄 唐琴のきこゆる波に船とめて 通ふは浦の松の夕かせ 中 務

見島郡の名勝古蹟を探り復た倉敷驛に立戻り漆車に搭して西行すれば二回長さ鉄橋を通過す是れ即ち高梁川の二流に分派したるものあり次に停車する驛を玉島驛とす

玉島驛

玉島驛は備中國淺口郡長尾村に在りて玉島港の北壹里強山陽鉄道第二十二次の停車場あり當驛より案内す入るは玉島港圓通寺大谷の金神赤れとも金神は次々の鴨方驛より案内すべし

玉島港 は備中國淺口郡東南部の海岸にあり玉島とは玉島阿賀崎

乙島柏島の四ヶ町村を總稱したる名あれども四ヶ町村人家軒を聯ぬるも各其經濟を分離し個々特立の町村あり其戸數二千餘あり港口は正南に向ひ東西の濱岸遠く海上に突出し左右相對して港頭を造り東

玉島驛

西三町南北十五町設岐の多度津を海上十里の南に望み備中の一要港されども遠淺にして大船巨船の停泊に便ならず大坂商船會社の漁船及北國廻りの和船は港外に繫泊するの不便あり然れども玉島は備中第一の商業地されば其市街年々に繁昌す市中には淺口郡役所玉島警察署治安裁判所登記所郵便電信局高等尋常の兩小學校あり會社の主なるものは

玉島紡織所	乙島村	玉島精米所	柏島村
共益社	阿賀崎	榮盛會社	玉島村
廿二國立銀行支店	阿賀崎	盛江銀行	阿賀崎
有信銀行	阿賀崎	山陽鐵道玉島驛	長尾村

其他一個の商店にして盛大の商業を營むもの少からざれども之を畧す輸入の重なるものは肥料にして其量五十万俵あり輸出は鉄銅米煙草等を主とす

圓通寺 玉島港の西南海口に突出したる一高丘に巨剎あり圓通寺

と云ふ老松蒼鬱として四境を圍み園庭には巨巖累累々として起伏し躡其間に雜生して風致の美花時を觀を以て最とす此地東南海上に臨

みて内海數十里の間一瞬の中に集り帆船漁船の來往するもの皆園庭坐視の景と爲り烟靄耕芳の春に宜しく清陰爽涼の夏に宜しく水天明月の秋に宜く瓊林雪朝の冬に宜しく四時の觀國中第一の勝を以て稱せらるる玉島驛を發し少時にして列車の停止するは鴨方驛なり

鴨方驛

鴨方驛は備中國淺口郡六條院村にありて山陽鐵道第二十三次の停車場あり驛を距る東一里にして金光教會の本部あり世に大谷の金神と云ふものは是れなり

大谷の金神 は吉備村字大谷にありて神道金光教會の本部あり

其社殿は左まで莊麗あらざるも近頃一字を新築せり大阪京都神戸等の派手者連か尊信する金神の本社にして現時信徒の數は六万人以上教會の支部四十余ヶ所あり其信仰者の多きは京阪地方にして數百人隊伍を爲して參詣するは珍しからず尤も大祭日は四月十日(教會の大

鴨方驛

笠

岡

驛

祭)九月十日(教祖の大祭)九月二十二日より四日迄(金神大祭)にして祭日の混雜一層甚しとぞ縁起の精細あるとは之を知る由なきも嘉永の末年赤澤文吉と云ふ人日月及金の三神を崇敬すへきとを唱へ之を天地金の三神とし自ら金光大神と稱して力を弘敷に尽せしむ信徒日々に多く今日の盛大を見るに至れりと云ふ而して金光大神赤澤文吉は前年死去し今は金光某之を奉祀すとか

道通神社 鴨方驛の西南里餘の地に横島村あり村内に道通神社の

祠あり其祭神は詳かあらざれども蛇を祭りたるものにて吉凶を托するの神ありと神籙教會道通講社は之に參詣するの結社にして三備地方に流行すれども信者は多く貧民にして社殿亦た見るべきものあり然れとも毎年舊曆六月十一月の祭日には其雜沓混雜此地方の一奇觀あり

鴨方驛を發し田圃の間を馳すると暫時にして開豁なる海水を認め神氣を爽快あらしむるは笠岡灣にして列車の停止するは笠岡驛あり

笠岡驛

◎大谷の金神 ◎道通神社

笠岡驛

笠岡驛は備中國小田郡笠岡市街の中央海濱に在りて山陽鉄道第二十  
四次の停車場あり  
笠岡港は備中國小田郡西南部の海濱にあり港口水淺くして船舶  
の往來に便ならず内海通ひの小漁船にても一里以外の海上に停泊す  
るの不便あり戸數千六百人口六千市中に在る官署會社は小田郡役所  
笠岡警察署治安裁判所出張所登記所高等尋常の兩小學校笠岡郵便局  
明十銀行恒心社吉備土木會社笠岡倉庫會社山陽鐵道笠岡驛等なり  
古城山の眺望 笠岡の東端に一小丘あり古城山と云ふ山腹に稻  
荷神社の鎮座あり之に登臨すれば近くは笠岡の市街を脚下に眺め遠  
くは海を距て、鞆浦の諸山を烟波の内に認む其風色頗る絶佳あり山  
東一帶連篠の市街あり富岡村と云ふ今は笠岡町の一部あり  
金崎の隧道 笠岡の西端に一脈あり遠く海中に突出し一の岬角  
を爲す之を金崎と云ふ山陽鐵道は此山脈を貫きて隧道を開き笠岡よ  
り西濱村に直行す其長さ二百八十間なり  
桃山 新庄村桃山は鴨方驛の西南二十余町にあり全山悉く桃樹に

福山の記

花時の風光最も美なり殊に若干の梨花ありて之に点綴すれば紅白  
の花相映して一層の風致を添へ桃李言はさるも人自ら蹊を爲して遠  
近の士女之に曳杖するもの多し  
笠岡驛を發し隧道を通過すれば西濱の港灣鏡面を開き轉た壯快を覺  
も夫れより列車は陰鬱ある山間を經過し福山驛に達し眼界亦た快満  
とある

福山驛

福山驛は備後國深津郡福山舊城内にありて市街の西部に属す之を備  
後第一次の停車場とす兵庫驛を距る百二十五哩山陽鐵道第廿五次の  
停車場なり福山は阿部家拾一萬石の舊城下にして其境域廣からざれ  
の地形風土を知るに難からざれども福山の記を讀んで市街を巡覽せ  
ば或は一層の興味あらん歟

福山の記

◎笠岡港 ◎古城山の眺望 ◎金崎の隧道 ◎桃山

福山の記

福山 備後國深津郡の西部にあり一市街にして阿部氏拾壹万石の舊城下あり此地海を距る里餘稍々運輸の便を缺く憾なきにあらざるも海水遠く溝渠に斗入し滿潮の時は二三百石の和船を出入せしむるの便あり溝渠に二橋を架し西を木綿橋と云ひ東を本橋或は天下橋と云ひしとぞ然れども近頃本橋の位置は埋立て陸地と爲し之に郵便電信局を建築し残るは只木綿橋のみ溝渠を入川と稱し又濱と云ふ濱の北を東町と云ひ南を西町と云ふ市街中最繁華あるは入川沿岸以北なり以南の過半は舊士族屋敷にして桑園の間に人家の點々たるを見るのみ東町中最も繁華あるは胡町大黒町笠岡町本町府中町鍛冶町桶屋町深津町等あり船町亦た繁華ありとす西町に在りては船町霞町福徳町蘭町等あり然れども福山停車場を舊城内則ち西町に創設し九るを以て他日必ず繁華の位置を轉するにあらざるへきか福山の戸數三千八百八十三戸にして人口一万五千四十人あり

福山市街の重なる官署並に會社

治安裁判所出張所 深津町

福山の記

福山城 は明治七年士族の授産として舊藩士に拂下けとあり士族は授産所あるものを設けて之を開墾し尽く桑園と爲したり然れども本丸は公園として之を存し管理人を置きて今猶は庶人の縦覧を許せり抑も福山城は水野日向守勝成の元和年間備後の太守に任せられ領内各地を巡見して要害の地宜あるとを相して此地に建築せり當時は茫々たる葦原にして固より市街の地にあらざりしも地勢南に開きて北に山を負ひ他日繁昌すへき地宜を有するを以て假りに天神山下に

福山警察署	下市	收税部出張所	霞町
福山町役場	米屋町	郵便電信局	船町
尋常中學校之館	霞町	福山尋常小學校	米屋町
高等小學校	中の町	第六十六國立銀行支店	霞町
福山爲替會社	本町	福山綿糸社	掛屋町
操綿取締會社	深津町	福山製糸場	鍛冶屋町
機械織物工場	全上	田中製絲場	胡町
福山織物會社	笠岡町	魚島會社	深津町
授産會社	府中町	精米所	新地
福山士族養蠶所	船町	山陽鉄道福山驛	舊城内

福山の記



屋敷を誂へ之に移住して建築  
のとを幕府に出願し僧宥仙に  
命じて地祭を爲し既に土功を  
起さんとするの際山城國伏見  
城取毀しのとあり乃ち幕府よ  
り三層櫓世に伏見櫓と稱する  
もの極形櫓月見櫓鉄門大手門  
風呂屋を拜領して之を移した  
り其繩張は日向守自ら之を  
せしも工事は台命にとりて小  
川土佐守花房志摩守奉行せり  
元和六年工を起し元和八年全  
く落成したりと本城は南北七  
十間東西四十三間帯廓は南北  
百二十六間東西百十間あり天

福山の記

主間本丸二丸三丸あり總櫓は二十五個あり城下の市街は領内の人民  
に命じて移住せしめ其居村に因みて町名を命したり則ち笠岡町吉津  
町府中町福徳町深津町神島町等あり水野氏嗣氏を断絶するや之を  
阿部氏に賜ひ阿部氏世々に居城し明治五年遂に藩籍を奉還したり  
福山の水道 福山市街の地は元沿岸の低地芦荻繁生の地ありし  
を以て一旦開きて市街の地とあすも飲料水に供すへさもあさや必  
せり於是乎水野氏は市街創設の時に於て葦田川の水を引き市中に水  
道を設けて飲料水に乏しからざるを得たり今猶は其遺澤により登万  
五千の人口恙なきを得るなり  
福山公園 は舊城の本丸にして五層の天主閣雲表に聳ゆる三層の伏  
見櫓英雄の末路を吊し割烹店清風樓は月見櫓とて其始め伏見より移  
したる遺物を其儘に使用したるものあれども葦陽館は福山人士の俱  
樂部にして近來の建築あり此地平面より挺出すると拾數間にして登  
臨の勝あり殊に天主閣は石階より棟に至る百二十五間貳尺五寸にし  
て福山市街を一眸に収め北に青葉山を眺めて西は葦田川に臨み南は

◎福山の水道 ◎福山公園

福山の記

一面福山灣を開き山川の風色縮めて指點の間に在り山中には古松の  
蒼鬱として琴瑟を鼓するあり櫻楓の春秋によりて媚を献するわり北  
にある石牌ハ明治十年の殉難志士を吊するの紀念碑にして西南にあ  
る古井は黄金水とて土地に有名ある其水あり足下は山陽鉄道福山驛  
にして旅客の往來するもの最も多し  
阿部神社 公園の北に一丘あり社殿山と云ふ松樹繁茂して一小林  
を爲す丘上に阿部氏の祖大比古命を祀り阿部神社と稱す縣社にして  
當地方の名社あり此地亦風景を以て名あり  
八幡宮 阿部神社の北に又一小岳あり八幡宮を祀る福山市民の産  
神なり之と相並んで構造を一にしたる八幡宮あり今は昔し四民の階  
級嚴重にして祀すべからざりし封建の時代に在りては士族と平民と  
同一の八幡宮を奉祀する能はざりしより同一の構造なる八幡宮二  
社を建立し一は百姓町人の産神とし一は舊藩主士族の産神と爲した  
るものありと云ふ  
福山の寺院 是大小三拾個寺ありて伽藍の見るべきものありに

福山の記

あらざるも旅客の杖を曳くへきものは左の寺院からん歟  
常福寺 是西町字袋町にあり舊藩主阿部氏の菩提所あり本尊は阿  
彌陀如来にして開山は圓覺上人なり  
賢忠寺 是東町字寺町にあり開基は存仙にして水野氏の菩提所な  
り日向守勝成始め二三の墳墓あり  
妙法寺 是西町字福徳町にあり寺中に領主水野勝俊の位牌并に此  
君に殉死せし家臣七人の位牌あり之に詣て封建武士の忠義談を聞  
くも蓋し亦旅行中の一快からん歟  
福山誠之館 是東町字霞町にあり舊藩主阿部伊勢守正弘公が藩  
士の子弟に文武の道を講せしむる爲め創業したるものあり講堂は文  
を講する所にして先勝堂は武を練るの地あり館の東西四丁南北二丁  
其規模の廣大にして制度の整備したると中國中稀に見る處にして備  
前國開谷費と東西に相對せり其創業は嘉永七年にして阿部氏領地増  
加の頃あり傳へ聞く當時一万石の加増は誠之館の爲めに費すの意に  
てありしと爾來時勢の變遷と俱に學校の規模も亦邊迂縮少したりと

◎阿部神社◎八幡宮◎福山の寺院◎賢忠寺◎妙法寺◎福山誠之館 百六十七

百六十八

雖然れども猶尋常中學校として之を存し子弟の就學するもの少からず館中に書籍館あり庶人の縦覧を許す案内者書籍館に就きて備後地方の珍書を一讀するの榮を得たり館の正面ふ掲けたる誠之館の扁額は水戸黄門光國卿の筆にして館に藏する誠之館の記は福山儒官江木哉氏の撰あり

**旅店及料理店** 料理店の主あるもの船町の風月樓公園の清風樓西町の大梅とす旅店は風月樓(料理兼業)を最とし粟定松村大瀬亭等あり娼妓貸敷屋は新地にあり

**備後吉備津神社** は福山の北二里強なる品治郡宮内村虎睡山にあり其由来を聞くに推古天皇の時有鬼某吉備津神社の宮所を定めんと普く靈地を相し當山に至り其山勢猛虎の睡れる粧ひあるを見て之を朝廷に奏し吉備中山に準して社殿を建立し虎睡山と號けしとかや往古は其結構を中山に擬せしも兵火の後領主水野氏再興して社殿を改造せり其規模固より吉備中山に比すへからざるも當地方の大社あり

**足利義昭の館趾** 福山の東北五六町にして蒜山あり此地は天正の頃足利將軍義昭織田信長と戦て勝たず河内に徙さる窮かに安藝に走り毛利氏に懇りし時其館を構へたる所あり蒜山の西にある翁鬱たる松林は其遺趾あり朴翁の詩に

將軍落泊寄孤蹤 想見當時憔悴容  
 館趾猶餘松數株 森々皆作老蒼龍

**山野の鑛泉** 福山の東北六里にして山野村あり村中に鑛泉湧出す汲んで之を暖め浴客の入湯に供すれども其地山間に僻在し道路險悪なるを以て來浴するもの甚た少し尤も備中國井原驛に出成羽川を逆れば迂回して里程を増すも道路消平易ありと云ふ

**蘆田川** 福山市街の西を流る大川あり蘆田川と云ふ列車の福山驛を發して直に通過する百二十間の鉄橋是れあり水源は世羅郡天神嶽の山脈より發し甲山を過き東流して矢田多川を合せ蘆田品治の兩郡を経て御調神谷及高屋等の諸川を合せ草戸村に至り分れて三派とあり箕島に沿ふて海に入る平時の水量甚だ少きも一朝霖雨に際すれば

◎旅店及料理店◎備後吉備津神社◎足利義昭の館趾◎山崎鑛泉の蘆田川百六十九



福山の記

尾と云ふ  
ば水勢滔々當るべからざるの激流とある其上流神谷川に金鑛あり藤  
尾と云ふ  
藤尾の金鑛 芦田那藤尾村の金鑛は古昔有名の金山にして繁盛  
の市街ありしか四百年以前寛正の頃霖雨の爲め山崩れ鑛口埋没して  
死するもの一万餘人其翌年市中大火數千の家屋焼失し住民四方に離  
散して鑛事遂に全く廢せり然れども近來再興の舉ありと  
草戸の稻荷 蘆田川鉄橋の下流數町に木橋あり神島橋と云ふ福  
山より尾道に至るの縣道なり縣道の下流數町に一村落あり草戸村と  
稱す當時は微々たる寒村なれども往時は一千戸の市街にして地方の  
名邑ありしが二百年以前寛文の頃芦田川暴漲して堤防を破壊し人家  
を流失し遂に今日の寒村に變えたりと村内に稻荷神社あり社殿は元  
明王院にありしを維新以後現今の位置に移したり其結構は見るへ  
ものなきも往時水野日向守勝貞の祈願造營したるものにて今も備後  
備中安藝又は四國地方より參詣するもの多し其由来を聞くに往古草  
戸村に一乗と云へる鍛冶あり一年京都に上り三條小鍛冶に寓せしと

福山の記

き劍を鍛へて稻荷の靈験を得之を信仰して草戸村に勧請せりと  
明王院 一に萩寺と云ふ草戸村にありて弘法大師の建立あり本堂  
并に萩門は千余年前の建築にして天下の奇觀あり萩門は徑壹尺余の  
萩一本にて山門を作り右傍は正當の用材あれども左傍は逆木を用ひ  
たり故に萩の曲門と云ふ其門扉は大閑秀吉朝鮮の役に彈丸避として  
持去りたりとて今は無し境内に五増塔あり塔は巨勢金岡の母某の建  
立したるものにて其彩色は金岡の筆あり就中著名あるは曼陀羅の額  
嵌あり金岡か精神を凝して畫きたる名畫あれば前年宮内省へ買上と  
あり當時保存する所は護摩堂に在る模造の額候あり  
妙見山 草戸村より蘆田川に沿ひ下ると數丁にして水呑村に達す  
村内に妙見山あり其山腹に妙見宮を奉祠す此地平野の西南に突出す  
るを以て最も眺望に富み福山の灣福山の市街は雙眸に集りて山水の  
風色よし春暖秋涼の時節之に登臨するもの多く近傍士女の遊山場あり  
妙見山より海岸に沿て南に馳すると二里余にして柄津あり

○藤尾の金鑛

○草戸の稻荷

○明王院

○妙見山

朝津の記

朝津の記

朝津は沼隈郡の東南に斗出したる半島の岬角にして福山の南三里にあり此地北は一面に山を負ひ南は一帶海に類し水深く岸近くして船舶の停泊に便なり故に朝津の名は古來人口に膾炙し日本良港の一に數へられたり神功皇后の三韓征伐に當り此地に戰艦を艦裝し兵食を整備し勅を以て神明を祭りし故事に因て朝津の浦と稱するとかや或は云ふ皇后西征して凱旋の時朝津を此浦に棄てたるを以て名くと其孰れか事實なるや知るへからざるも古來一の海港たりしとは疑ふべからざるなり今猶ほ山陽道の良港にして船舶の帆檣林立するのみならず大坂商船會社其他内海往來の汽船日々寄港せざるとなし市街の南北七町東西五町にして人家櫛比し商業繁昌の地あり戸數二千五百人口九千三百あり土地の物産は鉄器にして鍛冶屋町の一部落尽く此業に従ふ然れども朝津の名産は保命酒にして旅客の土産に頗る妙なり日東第一形勝 朝津に遊ぶものゝ必ず訪ふべき形勝は福禰寺の

朝津の記

對潮樓あり樓は浦の東岸にありて東は辨天島を隔て、仙醉島と相對し南は皇后島走島等數十の島嶼遠近に散見して遙に伊豫讃岐の群峯を烟霞撲糊の間に眺め波を蹴立て、走る漁船あれば帆を開きて行く和船あり浮鷗と相伍して浪に漂ふの釣舟あれば巖石を伴として順潮を待つ所の漁船あり其風色の開豁にして明媚なると丹青の能く及ぶ所にあらす宜きなり日東第一形勝の名あると朝津志に曰く正徳元年秋九月朝鮮國聘使李邦南岡と號す此地の風景を賞翫し「日東第一形勝」の六字を書して之を寺僧に與へたり當時正面に掲ぐる額即ち是なり其後寛延元年戊辰夏朝鮮聘使來朝歸帆の時此樓に遊び各詩を賦し景色を賞し洪景海をして對潮樓の三字を書せしめて僧に贈りしと今猶ほ扁額として存せり其他日本朝鮮名家の吟咏少あからす其二三を抄録して風光の萬一を形容せんすとす

登對潮樓

中谷宗明

西溟爲客日 一倚對潮樓 鏡裏晴千障

欄前渺四州 觀濤偏賦興 送雁忽鄉愁

◎日東第一形勝

百七十三

不堪斜陽盡 上方明月秋

題寺樓

朝鮮國通信正史滄窩

東南形勝地 第一此高樓

浩々天無阻

飄々岸欲浮 長風吹素月

孤燭繫歸舟

半夜清虛界 新秋又火流

對潮樓

菅茶山

評品江山人不同 傍觀遠客眼應公 望看朱棟懸半天

未見蒼崑插水中 島嶼斷連松石影 雲濤豁達帆檣風

休言邦俗誇鄉土 果爾靈區甲大東

仙醉島

仙醉島は辨天島を隔て、對潮樓の東に横り其周圍四十余町あり

松樹繁茂して鬱々晚翠を合ひ蓋し葺中の風光あり嶼中に七浦あり各

胡神社を祭る之を七胡と云ふ平相國嚴島神社を此地に移さんとせし

も狹隘なるを以て思ひ止まりしとぞ小松浦ありこれ壽永の其昔し小

松内大臣の重盛の舟軍を操練したる地あり

辨天島は仙醉島と對潮樓の中間に夾まりたる一小嶼あり嶼中に

辨財天の祠あり全島殆ど巖石

にして仙醉島の鬱葱たるに似

さるも峭崿の上に松樹の散在

するは却て風致あり仙醉島と

相並んで雙絶と稱す

沼名前神社は國幣小社

にして市街西北の山麓にあり

其祭神は素盞鳥雄命なり社殿

の結構敢て壯麗と云ふにあら

さるも其規模の宏大にして風

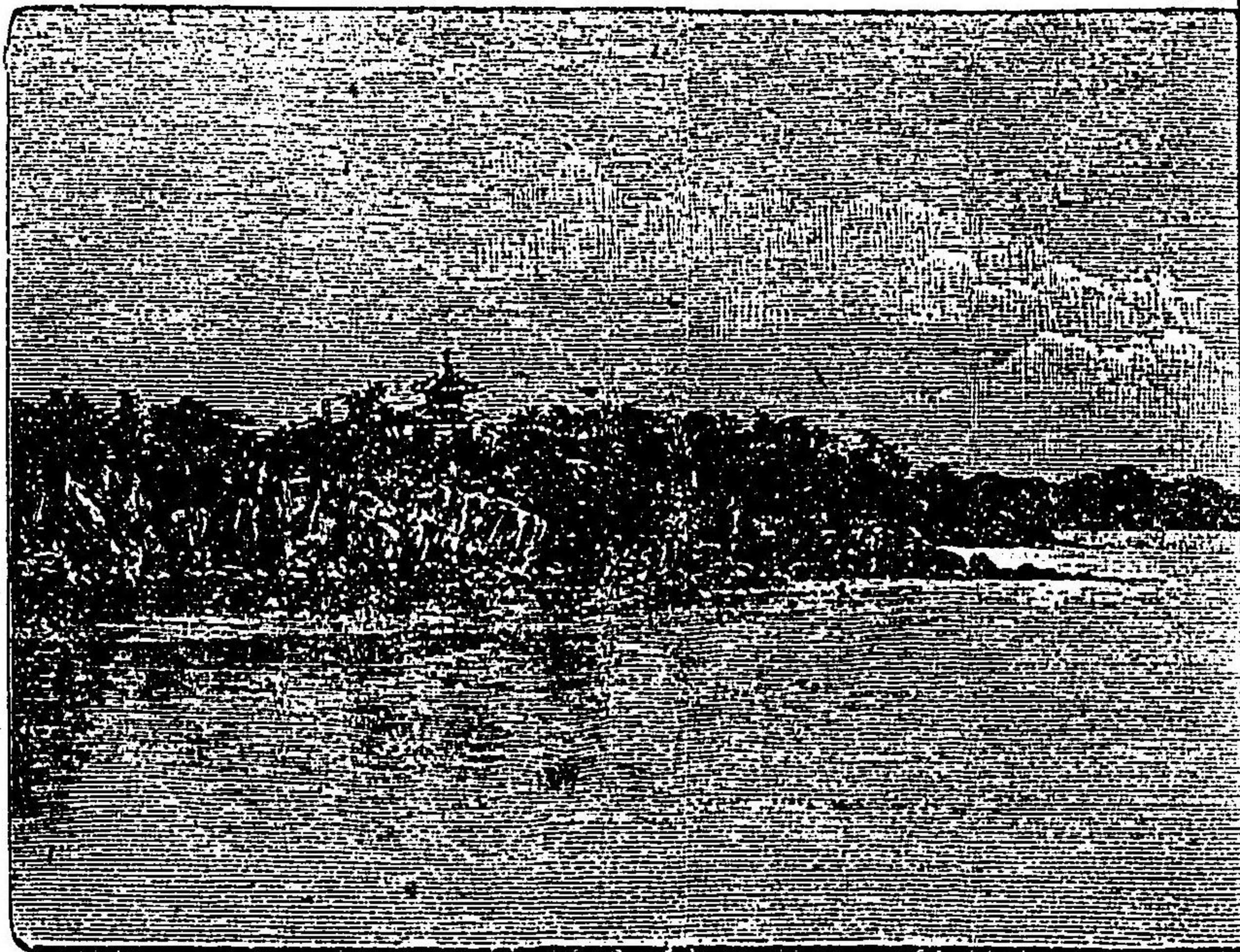
色の幽邃なるは地方稀に見る

處あり朝の浦に遊ひたるもの

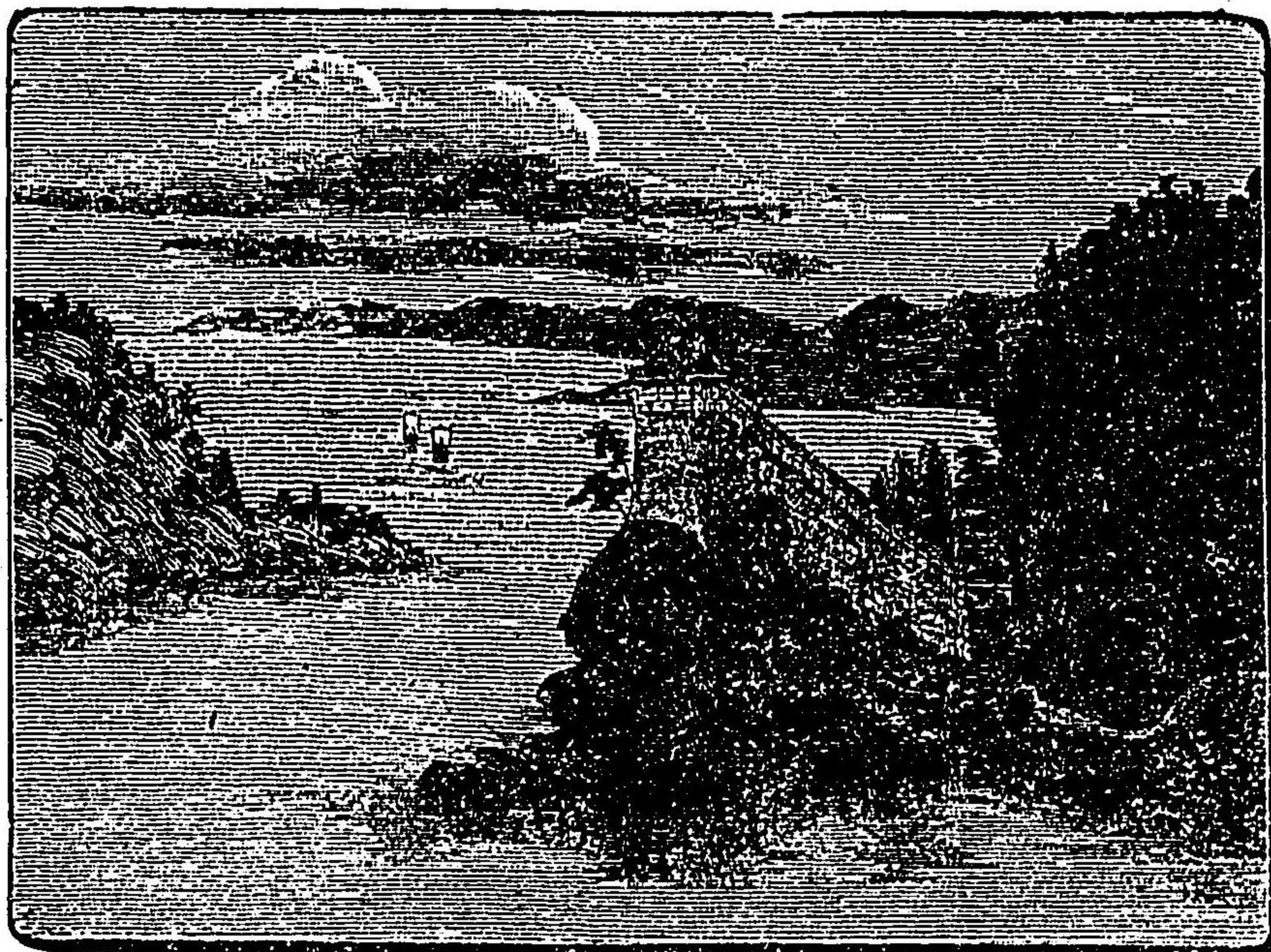
一遊すへき勝地あり

料理店及旅店 朝は古來

著名の海港にして料理店旅店



の敷奇を極めたるもの少からず先づ其重なるものを列記すれば料理  
 店には籠簾万喜を推し旅店には丸常魚吉あり對潮樓に遊んどするも  
 の此等に命して百事を周旋せしむれば坐して日東第一形勝を望むと  
 を得べし朝津の西南一里にして一の岬角あり阿伏門と云ふ此地眺望  
 の勝あり  
 阿伏門の觀音 阿伏門岬は朝津の西にあり梶子の瀬戸を隔て、  
 田島と相對す峻崖の上に觀音堂あり海潮山盤臺寺と云ふ之に登臨す  
 れば烟波渺然天水相接する所に伊豫談鼓の陸地を認め近く海面を  
 眺むれば長風潮を捲き怒濤岩石を噛み覺ゆる人をして戰慄せしむ然  
 れども雪朝月夕の風韻亦た丹青の及ばざる致さあり門田朴翁之を詠  
 して  
 阿伏門 阿伏門 阿伏門  
 遊阿伏門 遊阿伏門 遊阿伏門  
 安穩過殿脚 有祈願 有應 波浪不曾惡  
 阿伏門岬を見物して朝津に還り夫れより福山驛に戻りて復瀬車に乗



し芦田川を超ゆる赤坂村にて國  
 道と相併行す暫時にして左側  
 に松樹の繁茂する一山あり是  
 れ即ち新伊勢の鎮守あり次に  
 列車の停止する所を松永驛と  
 す

松永驛

松永驛は備後國沼隈郡松永村  
 にありて山陽鉄道第貳十六次  
 の停車場あり  
 松永村 は沼隈郡の西南部  
 にあり今津川を隔て今津村  
 に相聯りて國道の一部落なり  
 南は松永灣に枕み海陸の交通

松 永 驛

便利にして商業を營むの少からざるも最も著名あるは製鹽業あり  
新伊勢宮 は松永驛の東南十五六町を隔てたる神村伊勢山にあり  
今は昔し應永の頃荒木田半太夫なるもの神夢により新伊勢の地を開  
かんと關西の各地を巡回し泉州堺港の地宜に適するを見て此地に伊  
勢宮を設けんとしたるに神意に適はず依りて西國に赴かんとして神  
村に至り尙ほ進で西に往かんとするに身体自由ならず乃ち神意に従  
ひて神村に假殿を設く毛利氏の家臣野木津掃除頭地所を寄附し伊勢  
山に社殿を創設す之を新伊勢の縁起とす境内に内宮外宮等の社殿あ  
りて伊勢の五十鈴川に擬す舊曆一月十五日祭禮を執行するに福山尾  
道両市街を始め近傍士女の羣集するもの万を以て數へ當地方の一大  
祭事なり  
松永驛の海口にわり其祭神は新羅王子某の寶劍ありと是  
れまた地方著名の神社にして香火常に絶えず殊に舊曆六月廿五日の  
大祭は近傍の士女群衆し其雜沓新伊勢宮の祭事に次々と云ふべし昔  
し天武天皇白鳳五年新羅の王子某侍臣と共に國亂を避けて日本に來

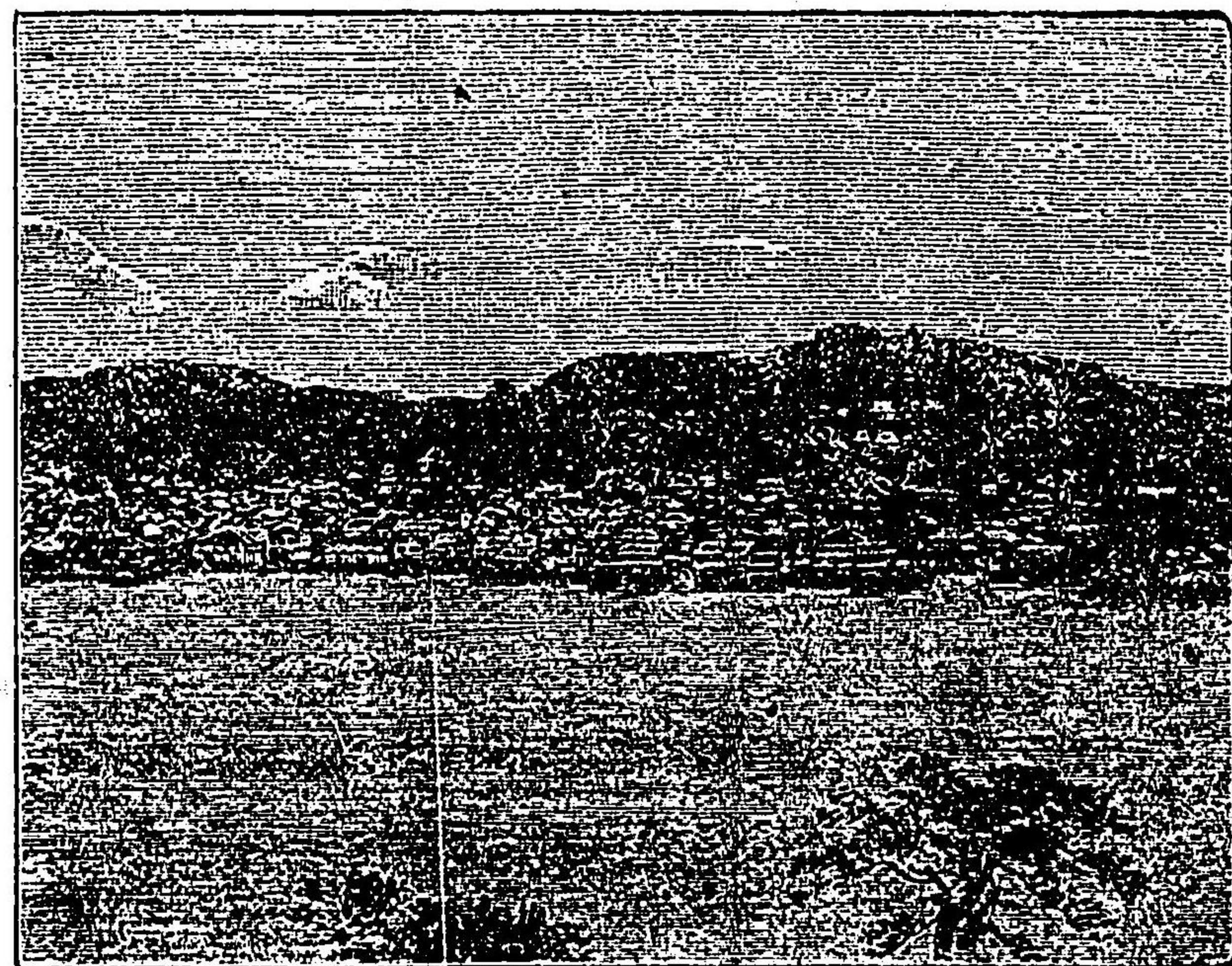
尾 道 驛

り今津村の近海に於て颶風に遇ふ邑長某之を救ひて王子を其家に招  
き待遇優渥舟を修め糧を給したるに王子年を除ねて歿す一夜王子夢  
に邑長に告て曰く我汝の恩を感銘す依りて寶刀を汝に授けん汝之を  
奉祀せは福祉を得んと夢覺て寶刀を得たり乃ち新に一祠を構へ之を  
奉祀すと是れ劍明神の由來あり  
新伊勢に詣て劍明神に念し松永驛より列車に乗して西行するに驛端  
にある鉄橋は今津川あり夫れより列車は三成川の北艇に沿ひて山間  
に入り二ヶ所の小隧道をくぐり廻ること數町にして川を横ぎり三成  
村にて長さ二百二十間の隧道を通過す而後列車の窓より再び海水を  
望み地勢轉々快裕となるは則ち尾道の瀬戸なり暫くして列車の停止  
するは尾道驛なり

尾 道 驛

尾道驛は備後國御調郡吉和村にありて尾道市街の西二十町にわり山  
陽鉄道第二十七次の停車場にして兵庫驛を距る百四十二哩あり尾道

尾道の記

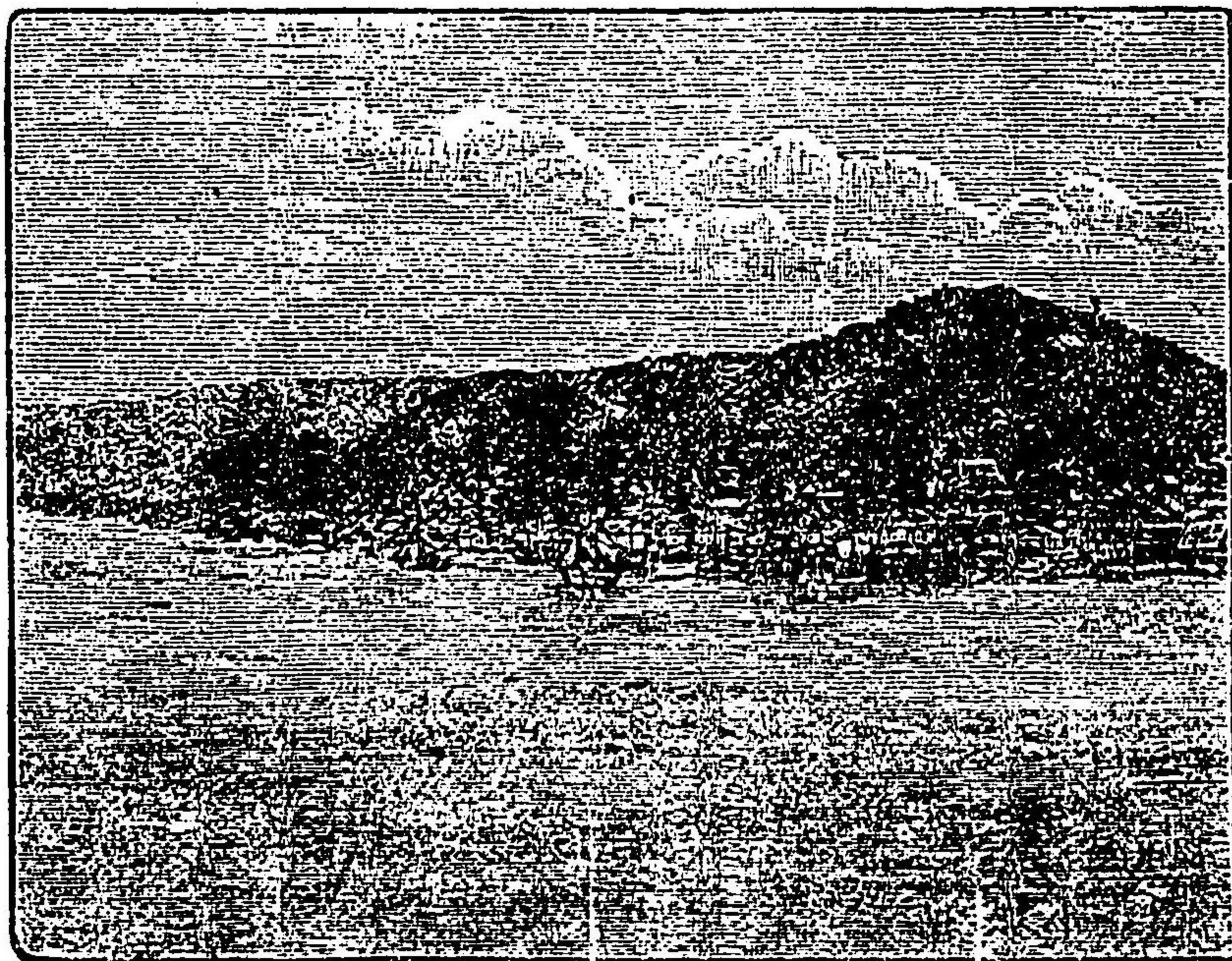


市街を見物せんとするもの若くは尾道に商業上の取引あるものは左に掲ぐる「尾道の記」を讀んで其地形風土を概想せば多少の便利あらん歟

尾道之記

尾道は備後國御調郡の東南にある一海港あり尾道の瀬戸を距て、向島と相對す其間狭きは五六町遠きも十二三町に過ぎず而して瀬戸の長さ壹里半あり此地山麓に沿ふて市街を開き南北と短く東西は長し則ち長三十余町にして幅三四町

尾道の記



乃至十五六町なり蓋し尾の道の名は海涯の狭き山麓に沿ふて往來するより山の尾の道と云ふより來りしものあらん歟市街を三大部に區劃して大字久保町。十四日町。土堂町。又御所とも云ふ尾崎町は東部にある漁村にして東西御所町は西部にある新開の埋立地なれども未だ人家の建築おし尾道は一に玉の浦と云ふ是れ或は千光寺の烏帽子殿に寶珠ありたりと云ふ但諺に基きたるものならんか又一に鶴の浦と云ふ其地形の似たるを以てあり久保

尾道の記

町字長江は隣にして久保町土堂町は其両翼に當れり宮崎町石屋町長江。長江新町。新地。新開等は久保町の小字あり藥師堂濱。東濱。山木戸。念佛堂前。鍛冶町魚店等は十四日町の小字にして荒神濱。西濱。中濱。幸の前。寺小路。渡場。今町。住吉新地等は土堂町の小字あり其戸數五千戸人口壹万八千餘人あり(廿二年十二月調)

廣島始審裁判所支廳	久保町	尾道治安裁判所	全
廣島憲兵隊首部	久保町	大隊區司令部	全
尾道警察署	久保町	尾道監獄署	全
商業學校	全	尋常小學校	全
收稅部尾道出張所	全	檢査所	全
御調世羅郡役所	土堂町	郵便電信局	全
高等小學校	全	尾道町役場	尾崎町
幼稚園	尾崎町	水上警察署	十四日町
第六十六國立銀行	久保町	諸品會社	久保町
玉蘭會社	全	綿商會社	全
愛媛同置石灰會社	全	食糧商會社	土堂町
尾道商會	土堂町	監會社	全

尾道の記

尾道の三大寺 尾道に三大寺ありて鼎足の位置に構ふ西にあるは千光寺にして東にあるは淨土寺なり其中央にあるを西國寺とす千光寺 大寶山權現院千光寺は市後大 山の山腹にありて尾道三大伽藍の一なり其開基詳かからざるも平城天皇の頃あるへしと云ふ中興は多田滿仲の宿願によりて建立したり主尊ある千手觀世音は聖德太子の作にして滿仲の深く信仰ありし守本尊あり境内に三重の塔婆あり其本尊なる多聞天は城主杉原民部大輔の奉納にて其効驗著しかりしか今を距ること二百余年前大慶の山上より落懸りて其塔を破碎したるより多聞天は更に一字を構へ護摩堂を其跡に建築したり此地市街を眼下に見仰し尾道の迫門其前に流れて向島と相對するの好景殆ど畫中にあるか如し尾道に遊はんものは一たび登臨すへきの勝地あり

鳥帽子巖 千光寺内に一大巖石の突起するあり俗に鳥帽子巖と云ふ形の似たるを以てなり或は寶珠巖又は如意巖とも云ふ其高八間周廻二十七尋あり土俗傳へて云ふ往古巖上に如意の寶珠ありて毎夜海

◎尾道の三大寺 ◎千光寺 ◎鳥帽子巖

尾道の記

上を照したり尾道を玉の浦と稱するも亦た之れか爲なりとかや時代は漢として知るに由なきも外國人尾道に過さり鳥帽子岩を買入れんとを求めしに寺僧其請求に購せしかは竊かに之を奪ひ去り遂に明光を失ひたりと今猶岩上に一の穴あり是其跡なりと或ハ杉原民部大輔旗建の穴ありとも云ふ  
千疊敷 千光寺を越へ上ると五六町にして山嶺に達す嶺に數歩の平地あり土人之を千疊敷と云ふ杉原民部大輔の城趾あり大石の上に天守臺の柱跡を存し昆沙門堂の西に古井あり此地吉備第一の眺望にして内瀬戸の好景殆ど尽したりと云ふへし殊に内海の島嶼に遮さられて二十有余の湖面を開くが如き觀を爲すは天下無雙の絶景と稱すへさか

西國寺 摩尼山總持院西國寺は市後愛宕山の山腹にありて尾道三大伽藍の一なり其開祖は行基菩薩なり天平年間菩薩隨當地に遊杖中一の香木を得自ら佛像を刻み寺院を建立して之を安置せり其後天曆年間火災に罹りしか仁利寺法親王の門弟慶鏡あるもの延久年間に来住

尾道の記

し永保年間繪旨を以て再建を勅命せられて勅願所とあり天仁元年勅して不斷經の法を修せしめられ正和年間寺領を賜はりしか其後復火災に罹り僧寮尊あるもの足利義教に請ふて之を重修し義教自ら三層塔を建立し時の貴紳に命じて建立費を喜捨せしめ門堂樓塔の用意大に備りたり其後不幸にして南大門二王門總門を燒失したり今猶は存する所の唐門は杉原民部大輔の古城門を移したるものにして其額は覺深法親王の筆あり當寺は由來久しき巨刹かれは稀有の名畫古書等に富み一々之を列擧すへからざるも菅丞相の自筆ある金光明最勝王經十卷の軸は最も貴重なるものにして天下無二の寶什ありと云ふ  
淨土寺 は市東の山麓にある一大伽藍にして尾道三大寺の一あり轉法輪山大乘院淨土寺と號す當寺多寶塔に藏する法華經の卷尾に推古天皇廿四年丙子聖德太子始淨土寺を建つとあり然れども其後弘安正應に至りて寺院漸く頽破せしを嘉元年間僧定証あるもの金本堂五層樓鐘樓食堂厨舎等を修營せしも正和年中火災に罹り嘉曆貞和の除重修して舊觀に復したり元弘年間繪旨を下し祈禱を命せられて因



尾道の記

島を賜ひたり建武年間足利尊氏の筑紫に走るの際當寺に宿りて近國の兵士を招集し後又大軍を率ひて東上の時亦た當寺に宿し僧道謙及將士と共に普門品念彼偈を分て題とし和歌三十三首を詠し尊氏手書して之を佛前に供したり其眞蹟今猶存す其後應安七年義滿將軍の參詣あり境内に尊氏直義の墳墓あり元弘の繪旨を始めとし古文書畫等夥多あり開山堂に聖德太子の肖像を安置し方丈に尊氏の位牌あり當時安置の觀音は往古人民の祈願を容れて身代りを爲したりとの古事ありて尊体に刃痕あり觀音堂の天井は血踏の天井として血痕ある足影を存す其由來は畧す

**峯の藥師** 淨土寺の山巔に一小祠あり峯の藥師と云ふ尾道に出入するものゝ最初に認め得へき好位置を占めたり然れとも堂宇頽廢纒かに其形を存するのみ併しなから舊曆一月四月の八日には之に參詣するもの多し就中一月八日に之に詣つるもの松火を携ふるより一奇觀を呈すと云ふ

**良宮** 大寶山々南にあり伊弉諾尊を祭る其建立は大同年間なれど

尾道の記

も二回の火災に罹り當時の社殿は寶永年間の建立なり其建築敢て宏壯と云ふにあらざるも尾道に在りては最も著名なるものゝ一あり

**御袖の天神** 大山寺内お奉祀する天満宮は菅原相の自畫なる肖像を神体としたるものありとぞ其由來を聞くに今は昔し菅原相の筑紫に左遷せられし節船を此地に停め海邊を徜徉して風景を弄ひ給ひしに里人金屋某其常人にあはるを見て己の家に招き迎へ麥飯醴酒を饗したりしに公之を悦び去るに臨みて自ら衣袖を截ち肖像を畫きて之を賜ふ後祠を建て之を祭り別當寺僧を置く大山寺是あり爾後祭日には金屋氏より麥飯醴酒を供するの古例あり

**荒神社** は土堂町にあり其祭神は舍人親王にして荒神ハ皇神の訛りとの説あれども其眞偽を審にせず然れども土堂町を一に御所と稱するは舍人親王の社あるか爲めありと云ふ

**八幡宮** は龜山にあり貞觀年間の創建にして仁治應永の頃屢々重修し毛利家より之を修繕し木馬等の奉納あり當時の社殿は元祿年間に改造したるものあり

◎峯の藥師 ◎良宮 ◎御袖の天神 ◎荒神社 ◎八幡宮

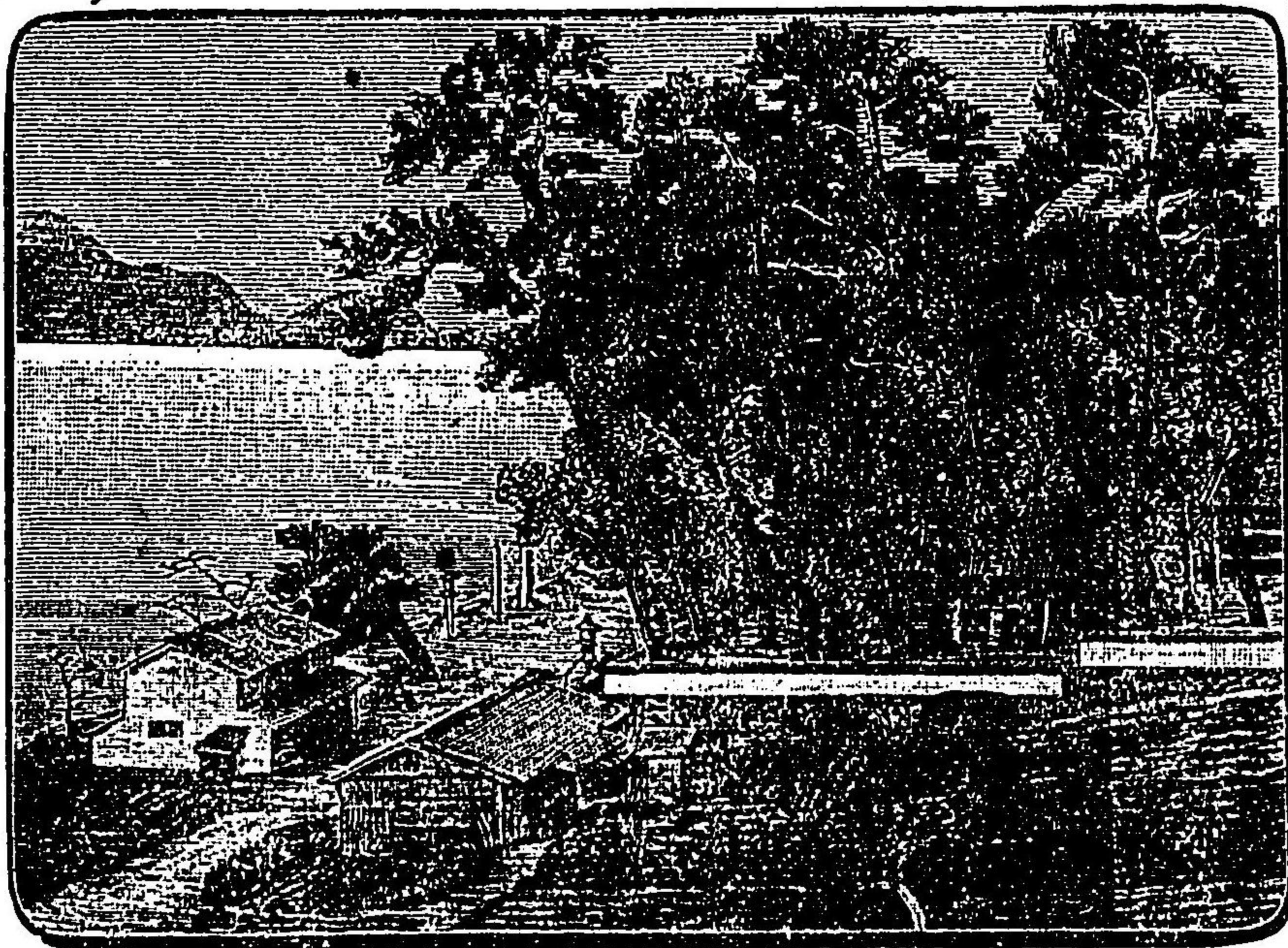
尾道の記

幸神社 幸の前にあり相傳ふ往古此邊海濱ありし時道祖神を祭りたるものなりと社記によれば天正の頃里民某神夢により地を掘りて一環を得之を神として奉祀せりと  
尾道の巖石 烏帽子岩の千光寺に在るは世人の普く知る所なるか持光寺に地藏殿あり岩面に地藏尊の像を刻み半身は地上にあるも半身は地下にあり土人は三十三尋地藏と云ふ長江の小麥畑に菅壺相の腰掛岩あり其昔し菅公の休憩せし岩ありと又西町國道の北に山姥石と云ふあり石面に人の形に似たる凹みあり千光寺の南濱に端場と云ふ所あり海中三十間計りの地に石垣の如く切立たる石あり石面に方圓種々なる紋を刻みたれども多くは丸の内に山形の印あり相傳ふ豊大閣大坂築城の節千光寺より大石を積出せし其遺物ありと又堂崎の海中十二三間の所にも同様の石あり是れ淨土寺山より出せしものありと其他万福寺の傍に觀音石不動石あり淨土寺の奥院に佛號石千光寺の南に鑿々石善勝寺に博擲石あり孰れも一見して其奇石たるを賞するの價あり

尾道の記

旅店及料理屋 當港の旅店は其數實に多く關西繁華の名に背かされども品位の上等なるもの甚た少し今其重立たる二三を擧ぐれば十四日町の濱吉今井尾崎町の一咲亭栗原等あり料理店は新地の一境内に簇かり其上等なるは竹亭胡半若胡之に次くは佳肴園福手三榮魚藤大善竹半高琴平理竹長鮮利等なり新地を除きては十四日町の濱吉今井を上等とす藝妓は新地にありて其數四十余名あり其他藝娼兼業の美人并に娼妓は新開に巢窟を構へり  
商業及物産 尾道は關西の商業地にして一歳の輸出入七拾万圓の巨額に上り其最も盛大なるは肥料にして賣買の高凡五百万貫之に次ぐに蠟表吳座あり其數百五十万枚に上ると通例なり土地にて製造するは錫酢石細工等にして其他の貨物は多く近傍若くは北海の地に産出するものなり  
尾道驛を發し海濱に沿ひて西行するに岩子島因島佐岐島其他數多の島嶼瀬戸を距て、相對し近きは五六町遠きは三四十町にして海水恰も大江の如く南北に素練を横ふ陸地の山嶽ハ森林鬱葱對岸の島嶼は

◎幸神社 ◎尾道の巖石 ◎旅店及料理屋 ◎商業及物産



は天平元年豊前國守佐八幡宮を勸請したるものにして宇佐奉幣使の下向あるや必ず参拜幣帛料を納め別格の神社として奉祀せり鎮座以來今に至る千余年の間郷内死者埋葬を禁するの慣例あり毛利氏の時社領三百三十石を寄附せしも福島氏入國して之を沒收し僅かに社領十石神官七人を充行ひ元和元年淺野氏入國の後も其制を改めざりし又西國の諸侯(鍋島氏を除く)にして當浦を通行する時は必ず幣帛を献し神策を拜授するの例ありたり

百九十  
 三原驛は備後國御調郡東濱村にありて糸崎と相接す山陽鉄道第二十  
 八次の停車場にして兵庫驛を距ること百四十八哩なり  
 糸崎浦 其一名を長井浦と云ふ戸數三百の中旅店貸座敷等其大半  
 を占め純粹の商業者少なく未だ商業繁昌の土地にわらずと雖ども港  
 頭大船の停泊に便あるを以て船舶の寄港するもの少あからず尾道に  
 商用ある北國船の如きは皆當浦に繫泊するを常とす且つ日本郵船會  
 社大阪商船會社共榮社等の漁船時々寄港して帆檣林立眞に此地方  
 の重要な海港あり

三原驛

緒山突兀山水の明媚にして風景の趣味多き之を須磨明石の海岸に比  
 するも泊仲の間にわらん歎殊に水深く岸近くして船舶の繫留に便  
 り吳海軍鎮守府の未だ定らざるに當りては此地に鎮守府を創置せん  
 との議ありしあり山陽鐵道三原驛は則ち其位置あり

長井水 糸崎神社の境内に古井あり長井水と云ふ神功皇后三韓征伐の時當浦に御船を寄せ用水を召さる乃ち邑長木梨真人此井を汲みて獻せり一名守船井と云ふ御船の船せしとき其艦に當りしか爲めちりと本郡を「みつぎ」と稱するは水を貢きしに因りてちりと云ひ又糸崎とは井戸崎の轉化ちらんと云ふ

多久良能火 糸崎の海上佐岐島と柄鎌瀬戸との間に當り黎明の頃海波赤色に變し遠く之を望めは火の如し土人之を「たくらふの火」と云ふ相傳ふ後鳥羽帝西巡の時當國を経て隱岐國に到り玉ふ其國に燒火の里ありければ

隱岐の國たぐ火の里にたかぬ火を備後の木梨に今ぞたくらふ

西の海千尋の底に燃ゆる火は東の浦に誰れかたくらふ

淡墨の松 は糸崎にあり相傳ふ神功后皇征韓の時御船を繫れし松にして今猶は存す其枝を採りて点火すれば小兒の夜啼を止むるの効ありと

山陽鐵道旅客案内終

山陽鐵道旅客案内増補

本郷驛

本

郷

驛

本郷驛は安藝國豐田郡本郷村にありて之を安藝第一次の停車場とす兵庫驛を距ること百五十六哩にして山陽鐵道第十九次の停車場なり

本郷村 は豐田郡の東南部にあり沼田川に沿ひて南の方忠海町と相對し國道の一部落にして陸路の交通便利の地なり此地は廣島より東の方十五里余にあり

佛通寺 本郷驛の東北の方二里にあり此寺院は極めて幽邃なる勝地なり

沼田川 本郷驛の沿ひたる川にて此川は河身席に土砂に埋れ上流は舟を通せず下流僅に通ずるのみ此河口は即ち安藝と備後の境なり

忠海町 本郷驛の正南三里の海濱にありて濱街道に當り廣島より東の方十七里余にして人口殆ど七千あり市街は極めて繁盛賑賑なり此地佳港ありて豐田郡役所亦在り

◎本郷村 ◎佛通寺 ◎沼田川 ◎忠海町